

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第4集

大沼遺跡発掘調査報告書

—— 平安時代の低湿地遺跡の調査 ——

1990. 2. 20

浪岡町教育委員会

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第4集

大沼遺跡発掘調査報告書

—— 平安時代の低湿地遺跡の調査 ——

1990. 2. 20

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

浪岡町には、国指定史跡浪岡城跡をはじめ原始・古代・中世までの埋蔵文化財包蔵地が多数存在し、その保護活動については鋭意努力を重ねてきたところです。

このたび、浪岡町下十川字大沼袋地内に所在する「大沼遺跡」が用水路の改修に伴い一部破壊されることとなったため、当教育委員会を中心に県文化課・中南土地改良事務所等の諸関係機関と協議した結果、部分的に発掘調査を実施して記録保存することにいたしました。調査の結果は、当初の予想をはるかに凌駕する平安時代の遺構・遺物が発見され、浪岡町下十川地内の古代史に新たな知見を得ることができました。特に、遺跡が低湿地遺跡であったことから県内でも珍しい、漆塗り椀・曲物・箸・下駄等の木製品の出土をみまして、古代における人々の生活解明の一助となることは間違いのない事実と高く評価しているところです。

本書は、埋蔵文化財保護活動の一環であるとともに、学術的にも貴重な資料として発刊されるわけではありますが、関係各位の御指導に心から感謝申し上げ、発刊の言葉とします。

平成2年2月10日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名俊吉

例 言

1. 本書は、青森県南津軽郡浪岡町大字下十川字大沼袋地内に所在する「大沼遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、中南土地改良事務所から委託を受けた浪岡町（浪岡町教育委員会）が実施したもので総経費は1,442,000円であった。
3. 発掘調査の担当は浪岡町教育委員会生涯学習課文化班がおこない、現場作業・整理作業等は浪岡町歴史資料館が実施した。
4. 本書の編集・執筆は浪岡町歴史資料館主査・工藤清泰がおこない、実測図の作製・トレース等の整理作業は主任補助員・常田紀子が主担となった。
5. 獣骨の鑑定にあたっては、八戸市博物館学芸員・小林和彦氏に依頼し、所見を玉稿として賜った。記して感謝申し上げる次第である。
6. 本報告書作製にあたっては下記の関係機関・各位の指導・助言があった。記して感謝申し上げます。（敬称略）

青森県教育庁文化課・村越潔・三浦圭介・鈴木克彦・成田誠治・岡田康博・山田昌久
工藤竹久

目 次

発刊にあたって

例言

I. 調査に至る経緯	1
II 調査の経過	6
III. 検出遺構と伴出遺物	10
IV. 出土遺物	23
V. 大沼遺跡出土土器の編年的位置	45
VI. まとめ	60
〔特別寄稿〕 大沼遺跡から出土したウシの遺存骨	74

I 調査に至る経緯

今回の調査対象となった「大沼遺跡」は、昭和53年度に青森県教育委員会が作製した『青森県遺跡地名表』の中で、遺跡番号・29016、遺跡名・大沼遺跡、所在地・川倉字大沼袋、立地・台地（河岸段丘）、種別・包含地、時代・歴史、地目・水田、出土品・土師器、須恵器、出土品の所在地・奈良岡洋一というように登録されていた。奈良岡洋一氏は、浪岡町の文化財保護指導員並びに文化財保護審議会委員を兼任していたことから、当該遺跡の動向にも早くから注目しており、今回の用水路工事にあたっても、いち早く当教育委員会に連絡を取り事態の対応をうながす事となった。

昭和63年9月9日付で中南土地改良事務所長から当該遺跡の範囲内に用水路工事を実施する旨の発掘届出がなされ、当教育委員会から県教育委員会に同年9月14日付で進達がおこなわれた。その結果県教育委員会は立合い調査をする由指導がなされ、今回調査を担当した工藤が工事箇所の立ち合い調査を実施した。しかしながら、立ち合い箇所においては遺跡として認め得る遺構・遺物が確認できず、その由県教育委員会に報告がおこなわれている。ただし、平成元年度の工事実施箇所（本報告書記載箇所）については、当初から立ち合いは無理であり予算計上を伴って本格的に発掘調査を実施するように県教育委員会文化課の強い指導がなされていた。

平成元年3月7日に中南土地改良事務所より当教育委員会宛に「大沼遺跡発掘調査に係る予算見積り」の依頼があり、同年3月10日に県教育委員会文化課の指導を経て回答をおこなった。平成元年3月22日には、中南土地改良事務所長から埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の3第1項）が当教育委員会を経て同年3月24日に県教育委員会へ進達し、県教育委員会で事前に発掘調査を行うようにという通知がなされている。

これに基づき、当教育委員会及び中南土地改良事務所浪岡地区建設事業所の事務担当者が同年8月に相方協議した結果、以下の委託契約を9月1日付でとりかわすことになった。

（県営浪岡川上流地区用排水改良事業用水路改修工事に伴う大沼遺跡発掘調査委託契約書）

- | | |
|----------|---------------------------|
| 1. 委託番号 | 中南土改委託第62号 |
| 2. 委託名 | 浪上改委託第36号 |
| 3. 委託場所 | 南津軽郡浪岡町大字下十川地内 |
| 4. 委託期間 | 平成元年9月1日から
平成2年3月20日まで |
| 5. 委託代金 | ¥1,442,000- |
| 6. 契約保証金 | ¥ 免除 |

委託者（甲） 弘前市下白銀町14番12号
中南土地改良事務所

受託者（乙） 南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101番1号
浪岡町

上記当事者間において、用水路改修工事区域内の埋蔵文化財発掘調査（以下「発掘調査」という。）の委託のため次のとおり契約を締結した。

（発掘調査）

第1条 甲は、別紙事業計画書による発掘調査を乙に委託し、乙はこれを受託した。

（委託契約の変更等）

第2条 甲は乙の都合により、発掘調査の計画を変更し、又は中止するときは、事前に協議して定めるものとする。この場合において、委託料の金額又は委託期間を変更する必要があるときは、甲乙協議して書面によりこれを定める。

（作業日誌等の作成等）

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業日程表を作成し、甲に提出しなければならない。作業日程表を変更するときも同様とする。

（発掘状況の調査等）

第4条 甲は、必要と認めるときは、発掘調査の処理状況について調査し、又は状況報告書若しくは作業日誌の提出を求めることができるものとする。

2. 乙は、発掘調査を完了したときは、速やかに発掘調査の実施結果に基づく調査概報及び調査報告書を作成し、甲に提出しなければならない。

（協議事項）

第5条 この契約書に定めのない事項及び疑義の生じた事項については、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の成立を証するため、この契約書を2通作成し、甲乙記名押印の上、各自その1通を保有するものとする。

平成元年9月1日

委託者（甲） 中南土地改良事務所長 三橋 敏男 ㊟

受託者（乙） 浪 岡 町 長 阿部 幡彦 ㊟

大沼遺跡発掘調査要項（兼 事業計画書）

1. 調査の目的

大沼遺跡の中で実施される、県営浪岡川上流地区用排水改良事業久井名用水路の改修工事に伴い、遺跡の包蔵地が現状変更されるため、事前に発掘調査を実施し文化財の記録保存を図るものである。

2. 調査期間

事前調査 平成元年9月1日～平成元年10月11日

発掘調査 平成元年10月12日～平成元年11月16日

整理作業 平成元年11月16日～平成2年3月20日

3. 調査対象地と面積

調査対象地 青森県南津軽郡浪岡町大字下十川字大沼袋34-1

調査面積 135m²

4. 調査体制

①調査主体者

浪岡町長 阿部幡彦

②調査顧問

奈良岡洋一（青森県文化財保護指導員・浪岡町文化財審議会委員）

③調査事務局

浪岡町教育委員会

教育長

蝦名俊吉

生涯学習課長（文化班長事務取扱・浪岡町歴史資料館長兼務）

加藤忠弘

生涯学習課文化班主事

木村浩一

浪岡町歴史資料館主査

工藤清泰（調査担当）

浪岡町歴史資料館主事

工藤広治

浪岡町歴史資料館業務員

大平洋子

④調査作業員等

調査主任補助員

常田紀子

調査作業員

坪田京子・東根美津子・村岡せい子・山内・ヤエ・雪田悦子以上5名

5. 調査方法

包蔵地に係る改修工事予定地に関しては全面調査を行い、周辺工事予定地については試掘的調査を行う。

6. 報告書の刊行

平成2年3月20日までに、浪岡町教育委員会が刊行する。

以上の経緯によって、大沼遺跡の発掘調査を実施する事となった。なお、発掘調査と併行して、改修工事を進行しなければ工期等の調整がつかなかったため、試掘箇所を選定や重機の手配を心良く引き受けていただいた「桜田建設」の現場担当の方々には心から感謝申し上げたい。特に、現場の通路確保・揚水作業がなければ、発掘作業も大変な困難にあったと考えられるところから関係各位の御協力にはただ頭を下げるのみである。

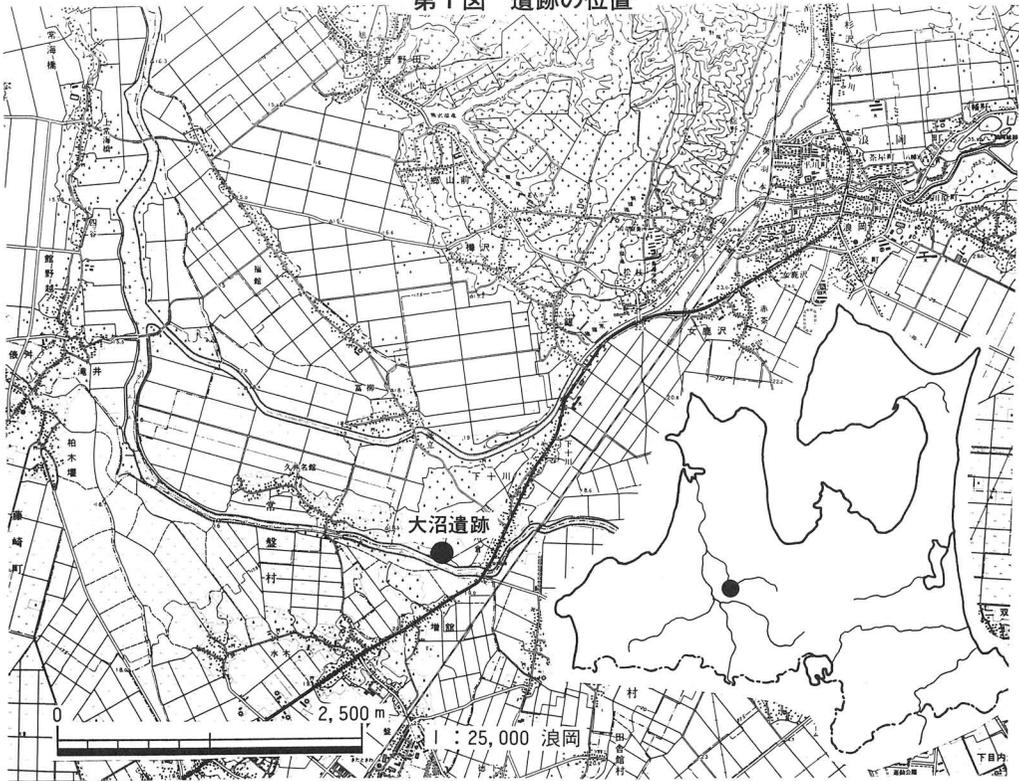
本遺跡と出土遺物の概要については、すでに奈良岡洋一氏が学界誌に発表しているため（奈良岡洋一 1977 「浪岡町川倉周辺出土の土師器」『考古風土記第2号』）その概要を付記し大沼遺跡の理解を深めたい。

奈良岡氏は今回の調査対象となった大沼遺跡と常盤村に所在する福島遺跡から表採した遺物を8点紹介している。その前段に該地域の様相に触れ『前略……採集した地点は、いずれも十川の沿岸又は川底であり、十川の形成する自然堤防或いは泥沼低湿地帯に位置する。十川は長い年月の間に洪水等による流路を変え、津軽平野の東南部を蛇行しながら浪岡川と合流し、岩木川の支流となっているが、遺跡はこの十川の沿岸に形成されている。付近には沼潟が多く、低湿地帯を形成しており、そのため、付近の小字名に湿地帯を表現するような名が多く、白鳥沼、大沼袋、福島、浮島、富蒔などの地名が認められ、古くは十川の水流が大きく湖沼に入って低湿地帯を形成したのであろう。また、水量も多く、近年まで鮭鱒の鮮生があり、農耕とあわせて生活資源の豊富な土地であったと考えられ、平安時代にはこの湿地帯の南岸に集落を営んだことを知ることができる。……後略』と記述している。

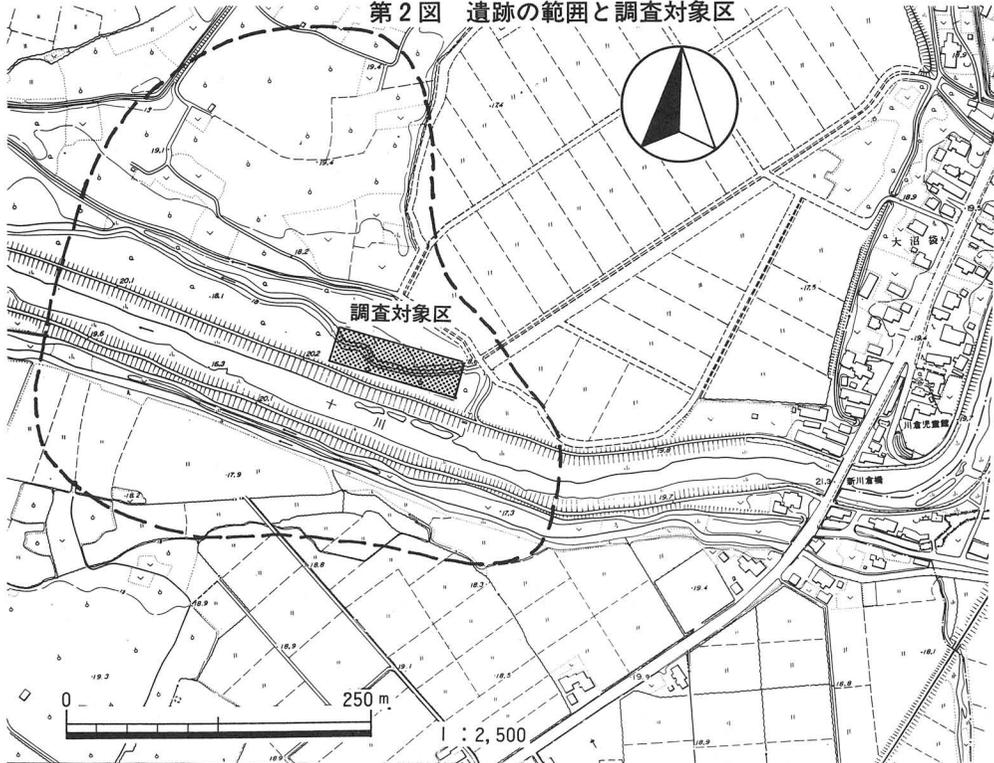
さらに出土遺物（今回奈良岡氏の配慮により大沼遺跡表採品を浪岡町歴史資料館に寄贈いただいたため実測図等を本報告書に掲載している。）の観察から、土師器坏・須恵器坏のうち土師器坏については県内でも出土例の少ない貴重な資料であるとの認識を示している。また須恵器坏については「前略……酸化炎焼成による極めて焼成の良い土器であり、土師器として把えるよりは須恵器又は須恵系土器（岡田茂弘、桑原滋郎1974）というべきであろう。……後略」との記述もみられる。これら出土遺物に関しては本遺跡出土品とあわせて後述してみたい。

いずれにしても、大沼遺跡の価値は奈良岡氏の努力に拠る所多大で敬意の念を表したい。

第1図 遺跡の位置



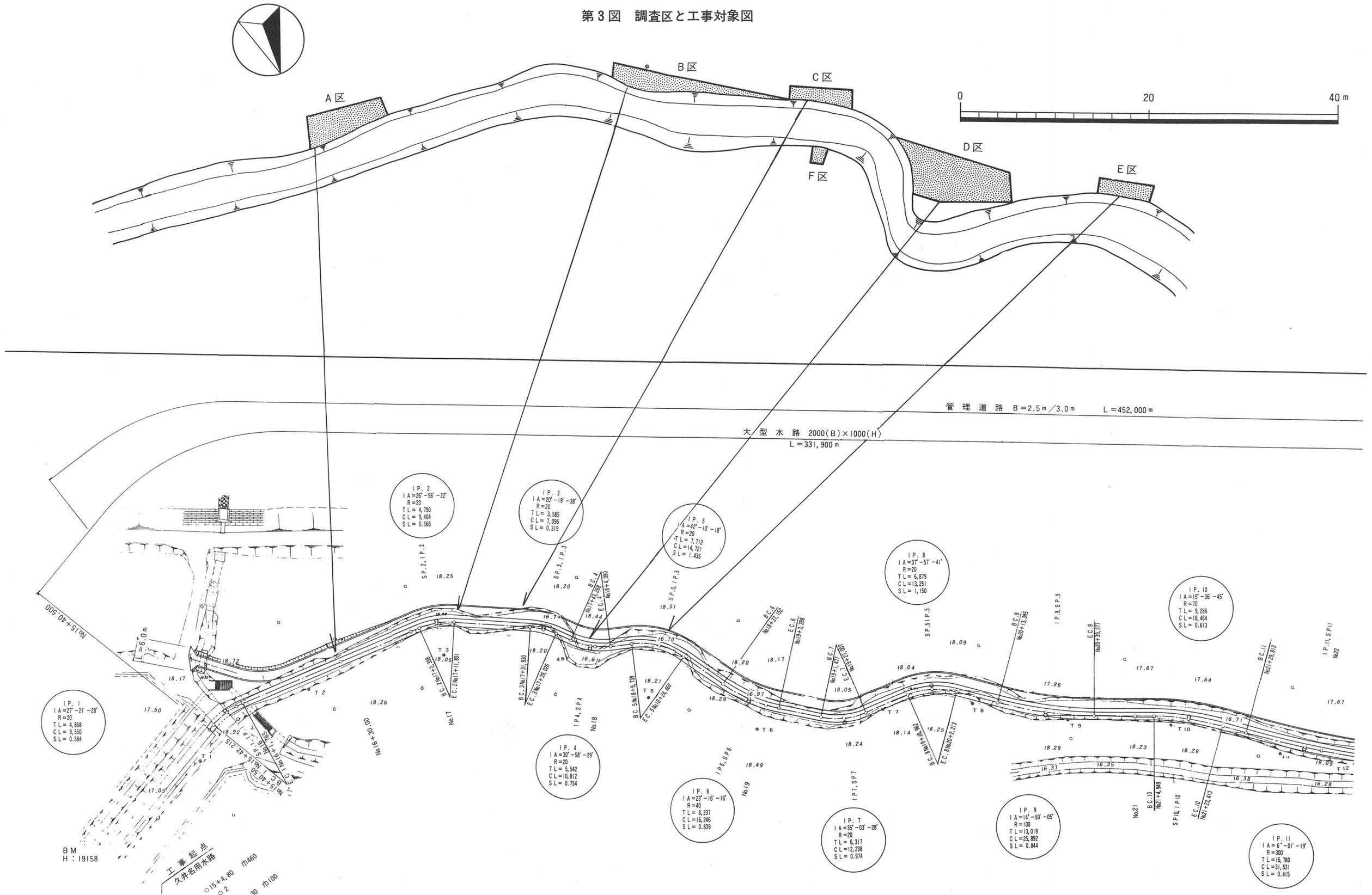
第2図 遺跡の範囲と調査対象区



II 調査の経過

- 平成元年 9 月 1 日 委託契約成立。10月11日まで発掘器材の購入、作業員等の募集、発掘届の提出等、事務的作業を実施する。
- 10月12日 担当の工藤が現場におもむき、調査対象区の東側からユンボーによって遺構検出面までの表土除去作業をおこなう。一部坪掘りをした結果では灰白粘土層が地山面と考えられるところから、地山直上の層位まで掘り下げることにした。
- 10月13日 (雨)現場が水を含んでぬかるみとなっていたため、昨日表土除去した場所等の表採を実施し、資料館にて水洗いをする。作業員説明会。
- 10月16日 現場にて調査区の設定作業をおこなう(第3図参照)。作業休憩用テントの設営。A区・B区の遺構面確認作業を実施する。
- 10月17日 A区を灰白色粘土層(地山)まで掘り下げ、溝跡4本(SD01~04)を検出する。
- 10月18日 B区を灰白色粘土層(地山)まで掘り下げ、溝跡5本(SD05~09)と不明遺構2基(SX01~02)が検出される。D区を掘り下げると、東西に伸びる大溝が存在することを確認。その大溝を切って細い溝跡(SD10)が検出される。測溝工事用BMから本遺跡のB.M.L.(18,00m)を設定する。
- 10月19日 SD10掘り下げ、実測を終了。前日発見の大溝はSD11とする。B区SD05~08までを掘り下げる。
- 10月20日 現場の冠水が激しく、資料館にて遺物の洗浄をおこなう。
- 10月23日 雨のため現場作業を中止して、遺物の洗浄をおこなう。
- 10月24日 A区SD01~04の掘り下げを進める。午後からA区の実測を開始。
- 10月25日 奈良岡顧問と「大沼遺跡」の形成過程について打ち合せをする。A区掘り下げ・実測。B区SD06~08、SX01を掘り下げる。
- 10月26日 B区の遺構を掘り下げる。
- 10月27日 昨夜来の雨でB区が冠水したためD区SD11を掘り下げる。
- 10月30日 B区SX01の下層からSD07を検出。D区SD11の掘り下げ。
- 10月31日 B区SX02の掘り下げ途中、黒色土下層から砂質土混じりの灰色土になり木製品や土師器の破片が面的に出土する。B区南壁セクション図作製。
- 11月1日 雨天のため出土遺物の水洗いをおこなう。
- 11月2日 午前中、調査区の冠水を除去し、B区SX02とD区SD11を掘り下げる。SX02から土師器・須恵器片とともに木製箸や曲物、さらに漆塗り椀の破

第3図 調査区と工事対象図



片が出土する。S D11では炭化物混入層（黒色土層）の上面から復元可能な土師器片が多く出土するようになる。

- 11月6日 B区S X02とD区S D11の掘り下げ。午後から雨となり出土遺物の洗浄。
- 11月7日 午前出土遺物の洗浄。午後から現場へゆきS X02・S D11を掘り下げる。S X02から柄穴のある板材等が出土し、井戸跡の可能性が高くなった。
- 11月8日 S X02から木釘のある曲物底が出土。さらに板材・角材の出土もみられた。S D11の東側では底に近い部分まで掘り下げ、下層になり次第木製品の出土もみられるようになった。
- 11月9日 雨天のため出土遺物の洗浄作業。
- 11月10日 B区S X02は深さ130～140cmまで掘り下げ。井戸跡であることを確認するが、湧水が激しいため実測・写真撮影に手間取る。D区S D11から出土する遺物は土師器坯に完形品が多く、鉄製品も若干みられた。E区を掘り下げても具体的遺構の確認に至らず。F区の掘り下げも湧水が多く、地山層まで達することができない。
- 11月11日 奈良岡顧問と調査進行・遺跡範囲確認の打ち合せをおこなう。
- 11月13日 終日雨。出土遺物の洗浄作業。
- 11月14日 小雪が舞う中で、D区S D11の掘り下げ、およびC区の遺構確認をおこなう。S D11より獣骨・下駄・土師器小形甕等が出土している。
- 11月15日 D区S D11を掘り下げ。同セクション図の作製。C区平面実測終了。
- 11月16日 S D11の掘り下げ終了。写真撮影・実測作業終了。現場の作業器材・テント等を撤収して、現場調査を終了する。
- 11月17日 出土遺物の洗浄。写真・台帳等の整理をおこなう。

※以上で現場作業の項は終了し、同日（11月17日）から整理作業に入った。整理作業にあたっては出土遺物の洗浄作業、注記作業、接合作業、実測作業、写真撮影作業、トレース作業等を主任補助員常田紀子を中心になって実施し、遺構図面のトレース、報告書執筆・編集は工藤清泰が中心になって平成2年2月末日まで実施した。

※本調査によって作製された図面類・写真類・出土遺物については浪岡町歴史資料館にて一括保管している。

Ⅲ 検出遺構と伴出遺物

本調査における調査面積はA区が21.25㎡、B区が34.2㎡、C区が10.4㎡、D区が57.5㎡、E区が9㎡、F区が3㎡の総計135.35㎡である。検出遺構としては、溝跡16本、井戸跡1基、その他機能不明の遺構5基があり、遺構に伴う遺物に土師器・須恵器・木製品・鉄製品・獣骨・自然石がみられた。検出遺構の中で最も多い溝は、それぞれの調査区が狭小であった関係で全体を把握できたものは1本もなく、どの方向に走るのがさえわからないものが多い。唯一、D区検出のSD11については出土遺物も豊富で一定の面積があったため、B区の井戸跡(SX20)とともに遺構らしい遺構と把握できた。

それぞれ調査区ごとに概要を述べる。

(1)A区(第4図、PL.1-(3))

A区からは4本の溝跡と柱穴・不明掘り込みが検出された。

SD01 検出区内の長さ85cm、最大幅30cm、深さ11cm、走る方向はN-78°-Wであり、出土遺物はみられなかった。

SD02 検出区内の長さ105cm、最大幅25cm、深さ7cm、走る方向はN-50°-Eであり、土師器甕破片が若干出土している。

SD03 検出区内の長さ430cm、最大幅175cm、深さ50cm、走る方向はN-43°-Eであり、出土遺物には須恵器甕・同壺、土師器甕・同坏の破片とともに施釉陶器瓶あるいは壺と推定される破片(PL.10-21、第21図-11)が覆土から発見された。

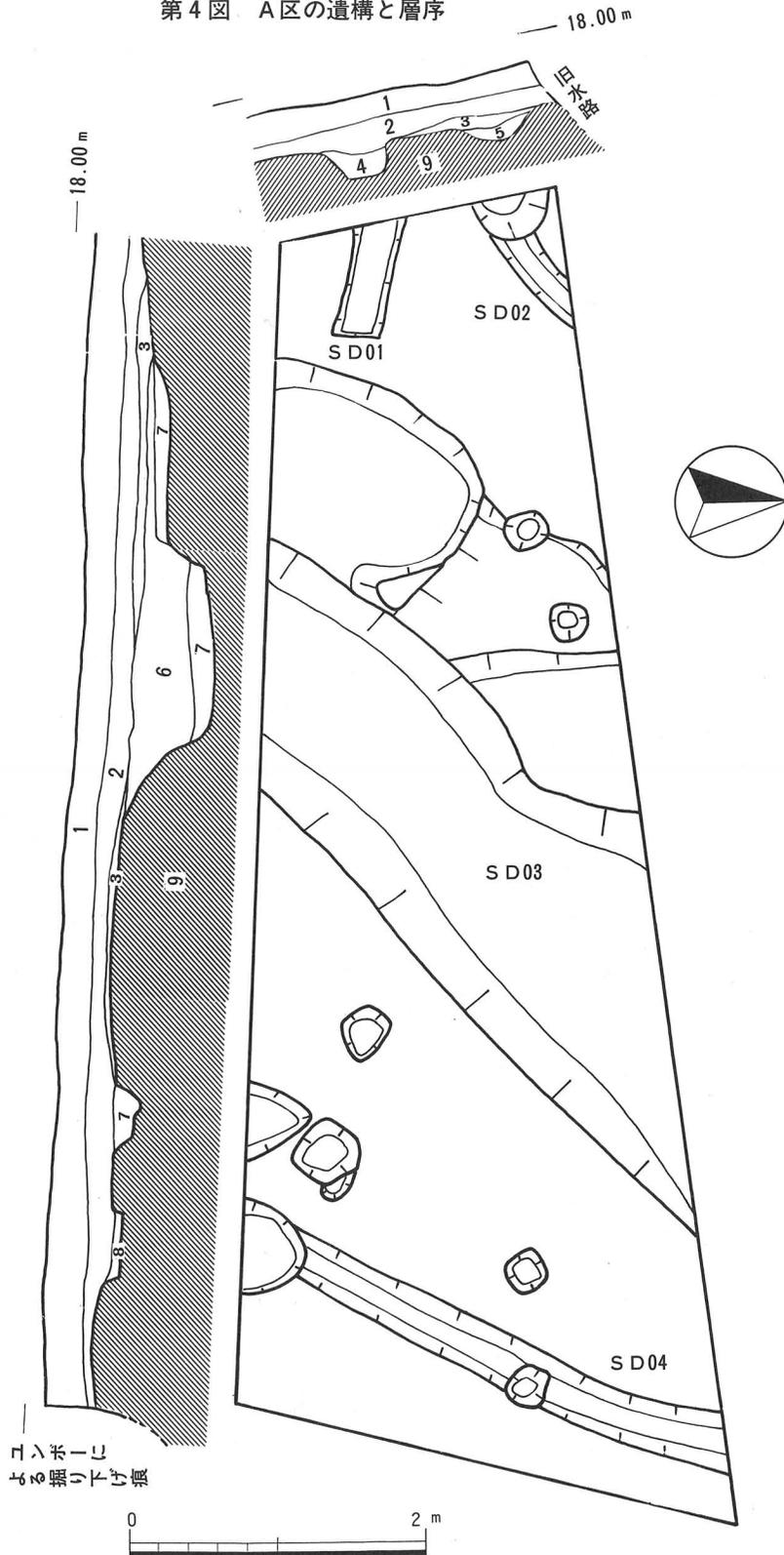
SD04 検出区内の長さ360cm、最大幅35cm、深さ8cm、走る方向はN-28°-Eであり出土遺物はみられなかった。

以上の他にSD03の西側にテラス状の掘り込みも検出されたが、土師器甕・坏の破片を若干出土しただけで特に遺構と認められる痕跡はない。また、SD03とSD04の間に5~6個の柱穴らしい痕跡を認めることができた。これらの掘り込みには炭化物等を覆土に含むものが多く建物跡の柱穴とすれば火災にあった可能性も存在するが、掘り方が10cm前後と浅いことと配置状態が明確でないため充分精査できなかった。

表1 A区層序注記表(第4図)

1	(7.5Y R4/4) 褐色土。しまりなく若干粘性があり。ユンボで上面は削平されている。
2	(7.5Y R3/2) 黒褐色土。灰白色粘土を5%粒子状に含む。
3	(10Y R2/2) 黒褐色土。灰白色粘土を30~40%ブロック状に含む。
4	(7.5Y R2/1) 黒色土。南側に灰白色粘土が大ブロックにみられる他灰白色粘土が全体に混在する。
5	(7.5Y R2/1) 黒色土。灰白色粘土を大~小ブロックに50%含む。
6	(7.5Y R2/2) 黒褐色土。灰白色粘土を50%ブロック状に含む。
7	(7.5Y R2/1) 黒色土。灰白色粘土を30%ブロック状に含む。
8	(10Y R ^{1.7} /1) 黒色土。炭化物層。
9	地山。(2.5Y 8/2) 灰白色粘土。部分的に砂質になっている。

第4図 A区の遺構と層序



(2)B区 (第5図、P L . 2 - (1))

B区からは6本の溝跡と井戸跡1基そして柱穴列と不明掘り込みが一つ検出された。

S D 05 検出区内の長さ205cm、最大幅40cm、深さ12cm、走る方向はN-37°-Eであり、出土遺物はみられなかった。

S D 06 検出区内の長さ210cm、最大幅130cm、深さ42cm、走る方向はN-50°-Eであり、土師器甕、同坏、須恵器坏の破片と鉄滓 (P L . 9 - 9) 等が出土している。

S D 07 検出区内の長さ215cm、最大幅40cm、深さは確認面から15cm上端からは約50cmを測り、走る方向はN-70°-Eである。当初S X 01として掘り下げたため明確な出土遺物の把握に至っていないが、土師器甕・同坏、須恵器坏等が出土している。

S D 08 検出区内の長さ130cm、最大幅190cm、深さ40cmで、走る方向はN-5°-Eから西側方向にカーブを有するようである。出土遺物としては土師器甕・同坏、須恵器甕・同壺・同坏の破片がある。

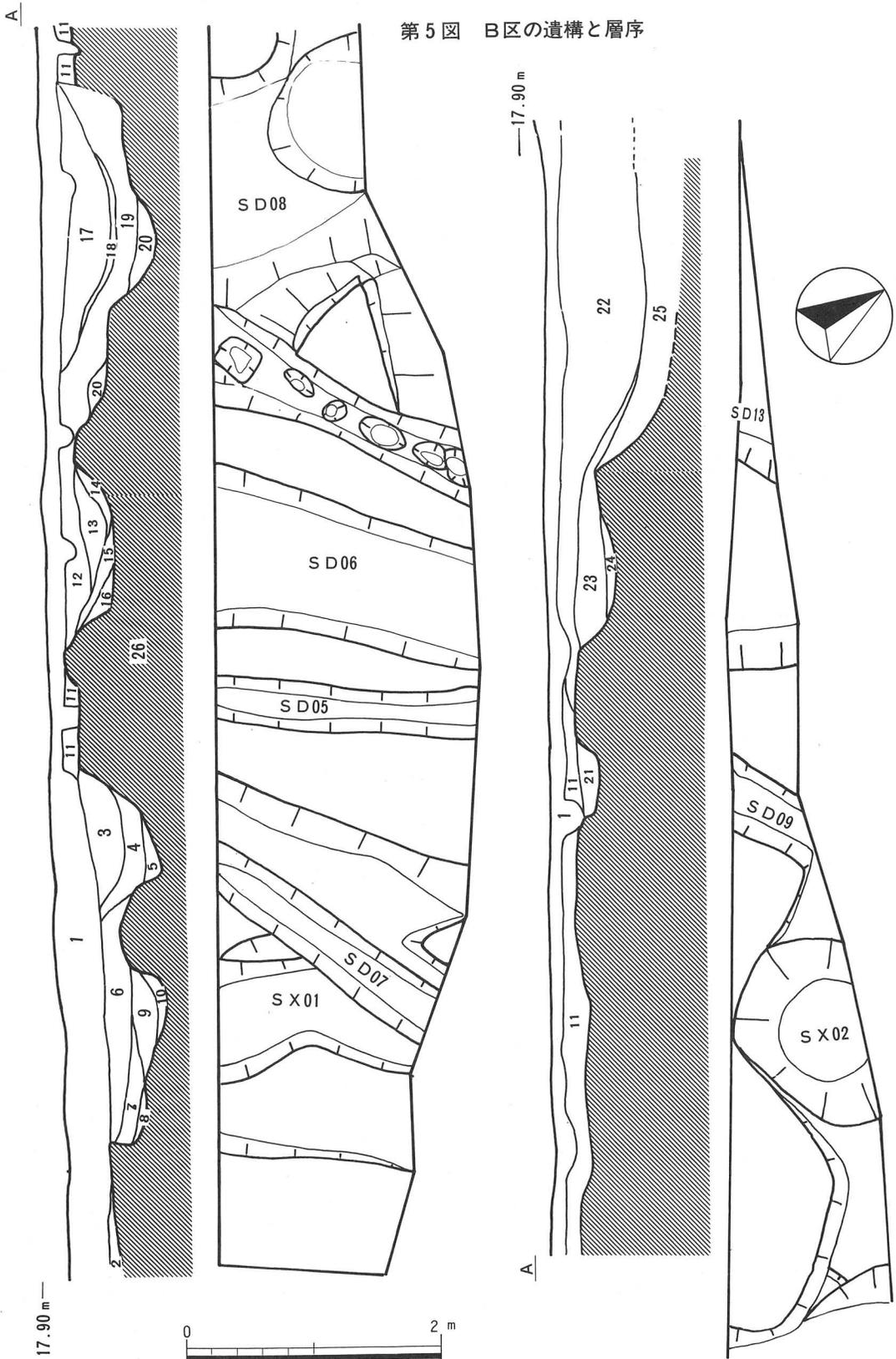
S D 09 検出区内の長さ70cm、最大幅47cm、深さ14cm、走る方向はN-66°-Eであり、出土遺物はみられなかった。

S D 13 検出区内の長さ50cm、最大幅400cm以上、深さ100cm以上でB区からC区にかけて広がる大形の溝跡である。掘り下げ範囲が狭小であったため明確な方向は確認できなかったがおよそN-67°-Eの方向に走るものと考えられる。出土遺物は土師器甕の破片があった。

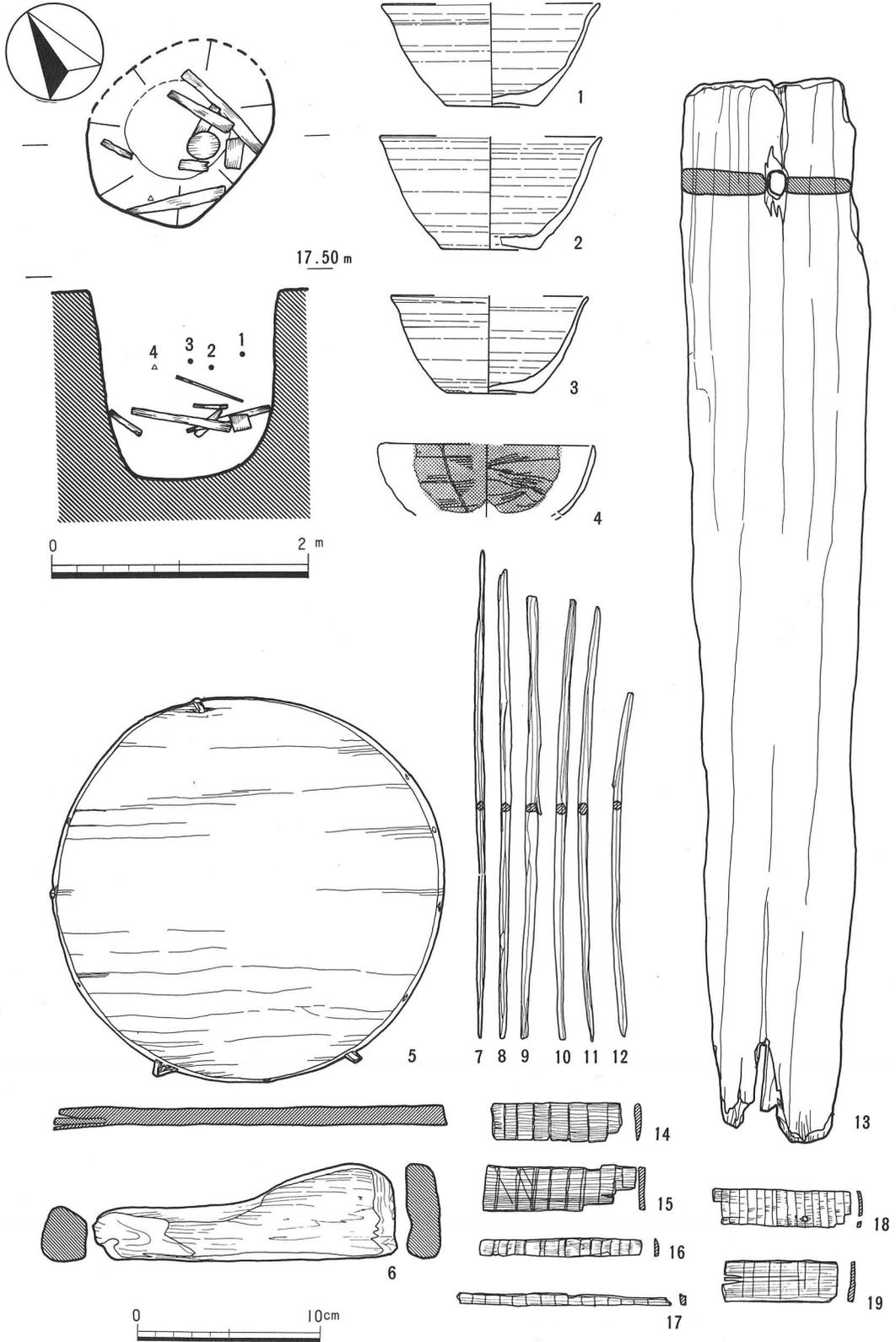
S X 01 掘り方が不定形であり、当初3層から6層の土質を一括して掘り下げたため不明遺構とした。S D 07の掘り方が見えた段階でS X 01の方が古いと理解でき、溝状になって検出されたが、溝跡であるかどうかは明確でない。出土遺物は、土師器坏 (第13図-4) や柱状高台破片 (第15図-9)、同甕破片、須恵器坏 (第21図-7) などがある。

S X 02 不整形円形プラン (150×120cm) を呈し、深さ150cmを測る井戸跡と推定される遺構。当初浅い落ち込みと考え掘り下げたが、深さ40cm前後の所から土師器・須恵器の破片とともに箸等の木製品が多量に出土し始めた。(P L . 3 - (6)・(7)) そこで10cm単位ごとに遺物を取り上げていったところ、黒漆塗椀 (P L . 3 - (5)・第6図-4) や曲物底 (P L . 3 - (2)・第6図-5) 等の木製品および板状の木製品 (P L . 3 - (3)・第6図-13) が出土し、湧水状況も考慮して井戸跡と考えられるようになった。他の出土遺物としては、土師器坏 (第6図-1~3)、須恵器長頸壺 (D区S D 11出土のものと同接合) (第21図-5)、土師器甕と須恵器甕破片、篋状木製品 (第6図-6)、曲物側板 (第6図-14~19) 等があり、土師器坏等の出土を考えると破損後の廃棄遺物と考えられた。またくるみの堅果 (P L . 11-12) も出土している。

第5図 B区の遺構と層序



第6図 S X02と出土遺物



以上の他に、S D 06とS D 08の間に柵列状の柱穴を有する遺構が存在するけれども、柱穴の深さが5 cm前後と浅く、明確に把握できなかった箇所出土遺物もなかった。

表2 B区層序注記表(第5図)

1	(7.5Y R 4 / 4) 褐色土。しまりなく若干粘性あり。
2	(10Y R 5 / 1) 褐灰色土。炭化物と灰白色粘土が若干混入。
3	(10Y R 5 / 1) 褐灰色土。灰白色粘土と炭化物粒を混入。
4	(10Y R 5 / 1) 褐灰色土。灰白色粘土と炭化物ブロックを混入。
5	(10Y R 3 / 1) 黒褐色土。炭化物ブロックと灰白色粘土粒を含む。
6	(10Y R 4 / 1) 褐灰色土。灰白色粘土をブロック状に50%、炭化物を5%含む。
7	(10Y R 4 / 1) 褐灰色土。灰白粘土を30%と炭化物を20%含む。
8	(10Y R 4 / 1) 褐灰色土。若干砂質気味になっている。
9	(10Y R 3 / 1) 黒褐色土。灰白色粘土と炭化物をそれぞれ30%含む。
10	(10Y R 3 / 1) 黒褐色土。灰白色粘土を10%含む。
11	(10Y R 4 / 1) 褐灰白色粘土。部分的に1層(7.5Y R 4 / 4) 褐色土が混入。
12	(10Y R 4 / 1) 褐灰白色粘土。灰白色粘土を10%含み、部分的に炭化物、焼土粒を含む。
13	(10Y R 4 / 1) 褐灰白色粘土。灰白色粘土を60%含み、炭化物を若干含む。
14	(10Y R 4 / 1) 褐灰白色粘土。灰白色粘土を40%含む。
15	(7.5Y R 2 / 1) 黒色土。灰白色粘土5%と多量の炭化物を含む。
16	(7.5Y R 8 / 1) 灰白色粘土。若干の褐灰色土と炭化物を含む。
17	(10Y R 3 / 1) 褐灰色土。灰白色粘土と炭化物がそれぞれ5%含む。
18	(7.5Y R 2 / 1) 黒色土。炭化物を多量に含む。
19	(10Y R 4 / 1) 褐灰色土。灰白色粘土と炭化物がそれぞれ10%含む。
20	(10Y R 2 / 1) 黒色土。19層が浸透し若干混層化している。
21	(10Y R 2 / 1) 黒色土。灰白色粘土と炭化物がそれぞれ50%含まれる。
22	(10Y R 5 / 2) 灰黄褐色砂質土。灰白色粘土を粒子状に20%含み、砂質土と粘質土が互層状態になっている。
23	(10Y R 3 / 4) 暗褐色土。
24	(10Y R 2 / 1) 炭化物層。
25	(10Y R 2 / 2) 黒褐色泥土。
26	地山(2.5Y R 8 / 2) 灰白色粘土。部分的に砂質の箇所あり。

(3)C区 (第7図・P.L.2-(2))

C区からは溝跡1本と、不明掘り込み1基、若干の柱穴そしてB区のSD13に連なると考えられた落ち込みが認められた。

SD12 検出区内の長さ440cm、最大幅63cm、深さ20cm、走る方向N-31°-Wであり、土師器甕の破片が出土している。

SX06 溝あるいは竪穴状の遺構と推定されたが、南側への落ち込みを確認しただけで全体のプランを検出できなかった。覆土からの出土遺物には、土師器小甕(第20図-4)・同坏(第12図-2)・同小壺?(第20図-6)、須恵器大甕(第21図-1)、同坏(第21図-7)等が出土している。

この他に柱穴が6個検出されているが配置も不規則で、深さも10cm前後のためその性格は不明である。また、C区南側にはB区で検出されたSD13と推定される落ち込みも認められたが連続するかどうかは確認していない。

表3 C区SX06東壁層序注記表(第7図)

1	(10YR 3/4) 暗褐色土。砂質。
2	(10YR 2/3) 黒褐色土と(10YR 8/2) 灰白色粘土との混層、(50%:50%)
3	(10YR 2/1) 黒色土。本層には(10YR 2/2) 黒褐色粘土の薄い層が互層となって土器片が多く、炭化物も多い。
4	(10YR 2/3) 黒褐色土。部分的に灰白色粘土を粒子状に含む。
5	(10YR 2/3) 黒褐色土と(10YR 8/2) 灰白色粘土の混層。(60%:40%)
6	(10YR 2/3) 黒褐色土。灰白色粘土が10%含まれる。
7	地山。(10YR 8/2) 灰白色粘土。

表4 C区SD12の東壁層序注記表(第7図)

1	(10YR 3/4) 暗褐色土。
2	別遺構覆土。(10YR 2/3) 黒褐色土に(10YR 8/2) 灰白色粘土が小ブロックに混入。

(4)D区 (第8図・第9図・第10図・P.L.4)

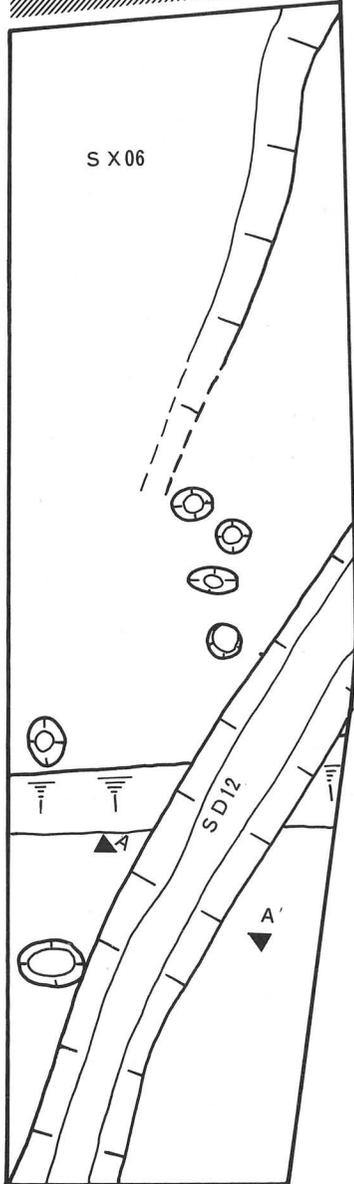
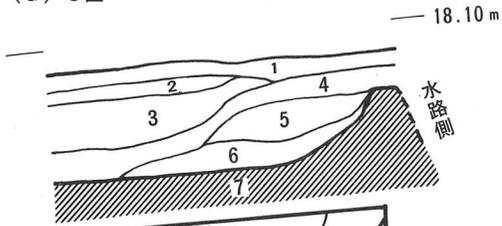
D区からは本調査で最も多くの遺物を出土した大形の溝(SD11)と他2本の溝が検出されている。

SD10 検出区内の長さ700cm、最大幅55cm、深さ15cm、走る方向N-68°-Wであり、土師器甕の破片(SD11出土のものと接合)等が若干出土している。

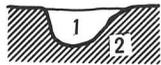
SD11 検出区内の長さ1,090m、最大幅290cm、深さ95cm、走る方向はN-28°-Wである。覆土の堆積は、3層・4層という炭化物を含む黒色土が一つのメルクマールとなりこれらの上層から土器の出土が多く、下層から木製品が多いという特徴があった。

第7図 C区・E区の遺構と層序

(a) C区

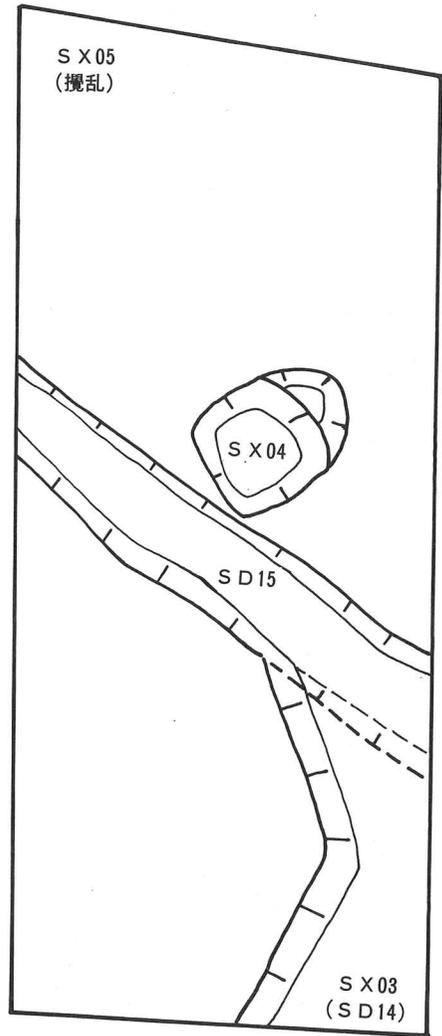


A A' 17.60 m



S D 12の層序

(b) E区



土器は破片が多く、廃棄されたものと考えられる。第9図で示した通り、遺物No.を付した遺物の取り上げ（土器の場合は口縁から底部までの形態が理解できるものを主体にしている）状況では、土師器坏・同甕等が50ポイント近くも出土し、実測をおこなった遺物だけでも100個体にのぼる。主な出土遺物としては、土師器坏（碗形と皿形）・同甕・同埴・同耳皿・同小壺、須恵器甕・同壺・同坏（詳細は出土遺物の項に記述）、木製品として下駄・箸・木錘・角材・用途不明、木製品、鉄製品として刀子（第10図参照）、底面近くから牛歯（小林氏報文参照）等が出土している。

S D 16 検出区内の長さ110cm、最大幅124cm、深さ30cm、走る方向N-65°-Eであるが西側の部分では別遺構との重複あるいは拡張も想定され具体的様相は不明である。出土遺物として土師器甕・同坏の破片が若干出土している。

表5 D区S D 10東壁層序注記表（第8図）

1	(10Y R 3 / 4) 暗褐色土。
2	別遺構覆土。(2.5Y 8 / 2) 灰白色粘土。

表6 D区S D 11層序注記表（第8図）

1	(7.5Y R 4 / 4) 褐色土をベースとして、灰白色粘土、黒色炭化物、酸化鉄が互層状態になりながら混在している。
2	(10Y R 8 / 2) 灰白色粘土。
3	(7.5Y R 2 / 1) 黒色土をベースとして灰白色粘土を2%と土師器片を5%含む。
4	(7.5Y R 3 / 2) 黒褐色土。粘土質になって水が溜っていたと思われる。
5	(7.5Y R 3 / 2) 黒褐色土と灰白色粘土(10Y R 8 / 2)が50%ずつ混在している。
6	(7.5Y R 3 / 1) 黒褐色土に(7.5G Y 6 / 1) 緑灰色砂質土を大ブロック状に5%含む。
7	(7.5G Y 6 / 1) 緑灰色砂質土に若干の(7.5Y R 3 / 1) 黒褐色土を混入。
8	(7.5Y R 4 / 2) 灰褐色土に灰白色粘土と若干の黒色土、酸化鉄を混入する。
9	(10G Y 3 / 1) 暗緑灰色砂質土をベースに(7.5G Y 6 / 1) 緑灰色砂質土と(10G Y 2 / 1) 緑黒色土を部分的に含み、凝灰質浮石を互層状態に混入。さらに青灰色砂質土を5cmほどの厚さで堆積し最下層は褐色砂質を呈する。
10	(7.5Y R 3 / 1) 黒褐色土に(10Y R 8 / 2) 灰白色粘土を混在している混層。粘性ありしまりが強い。
11	地山。(7.5Y R 3 / 1) 黒褐色土に(10Y R 8 / 2) 灰白色粘土を混在している混層。

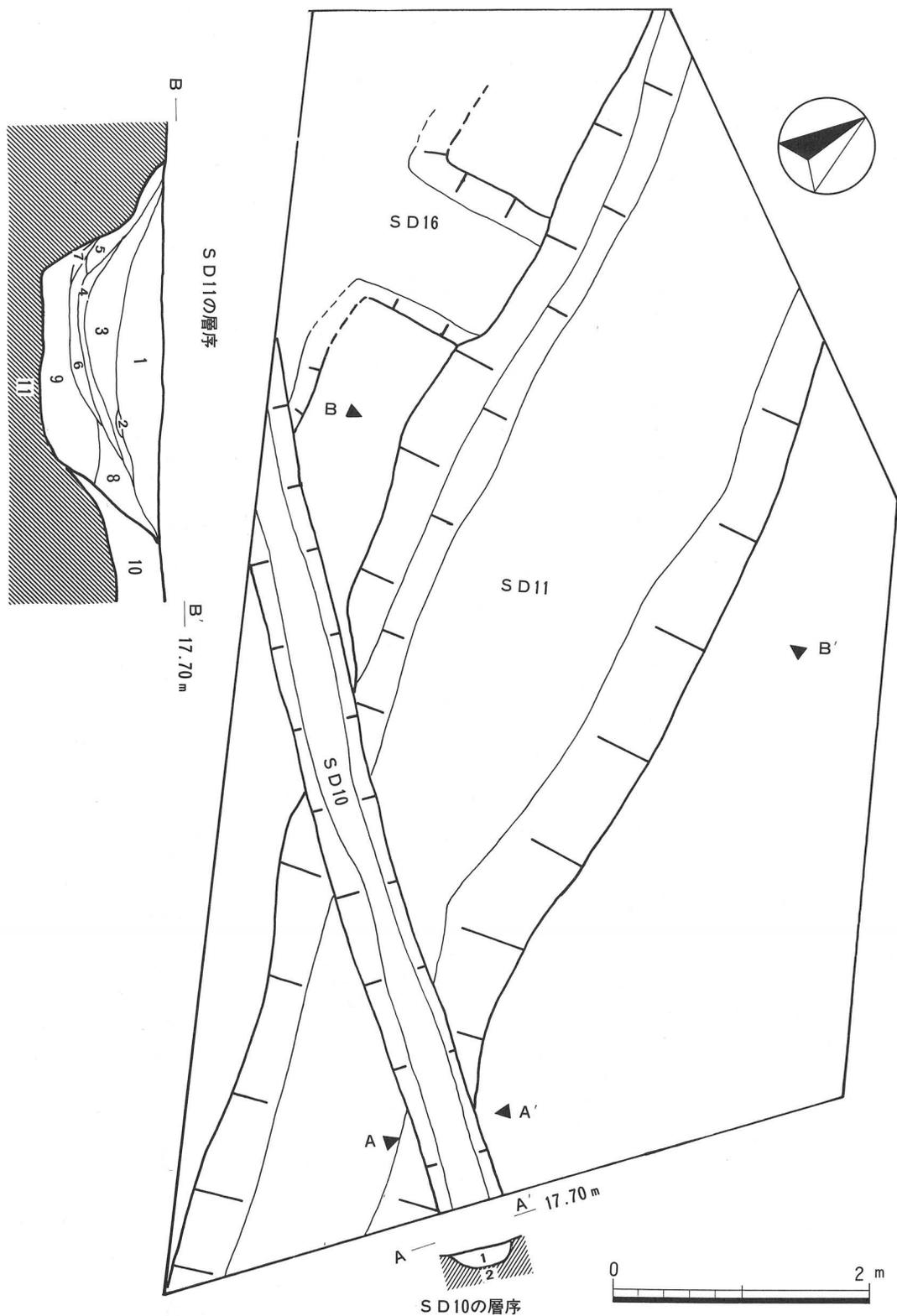
(5)E区（第7図、P.L. 2-(3)）

E区からは、溝跡1本、不明遺構2基が検出されている。

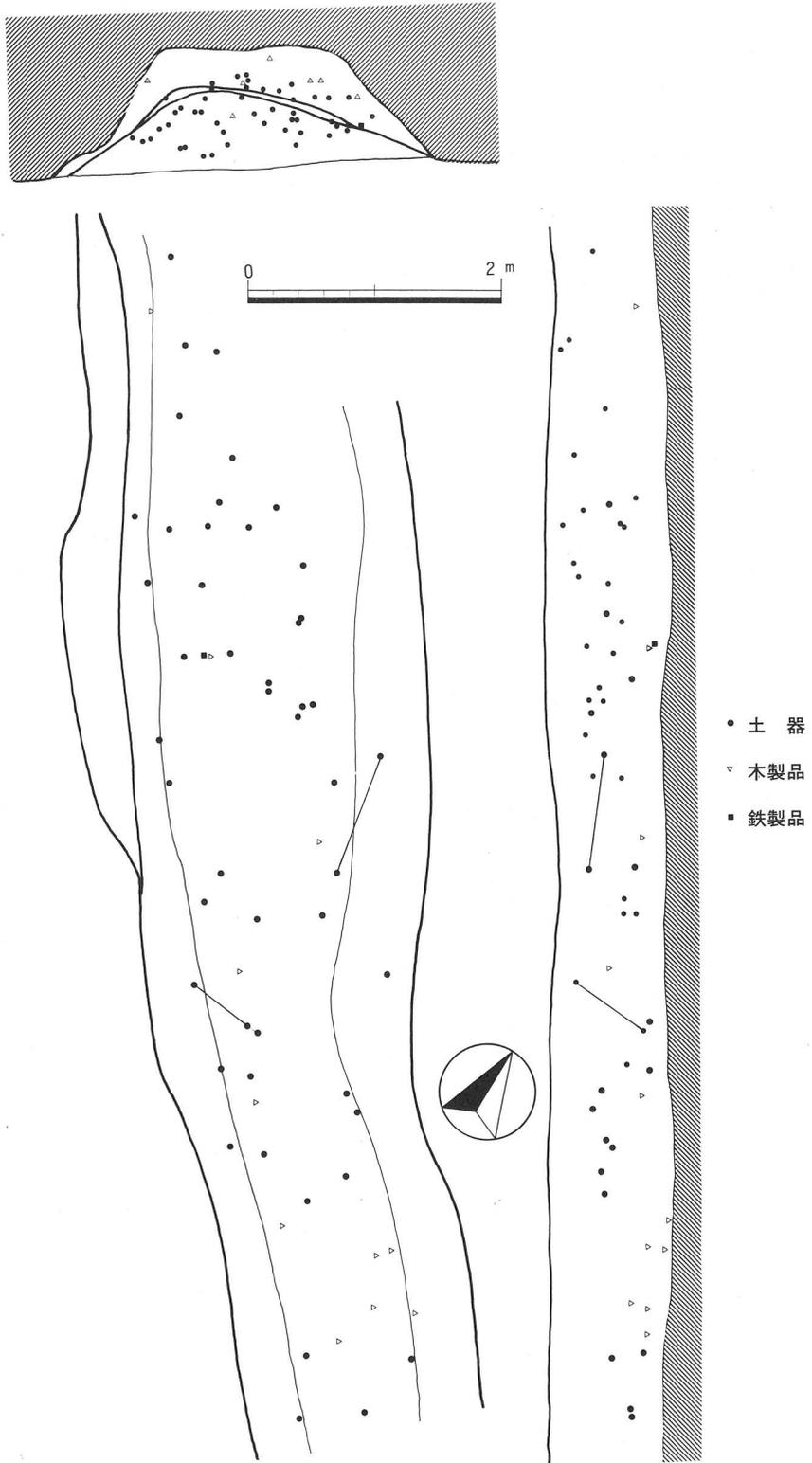
S D 15 検出区内の長さ300cm、最大幅58cm、深さ17cm、走る方向N-68°-Eであり、出土遺物は、土師器甕・同坏の破片が若干みられた。

S X 03 当初S D 14として把握したが、検出区内だけではどのようなプランになるのか確認

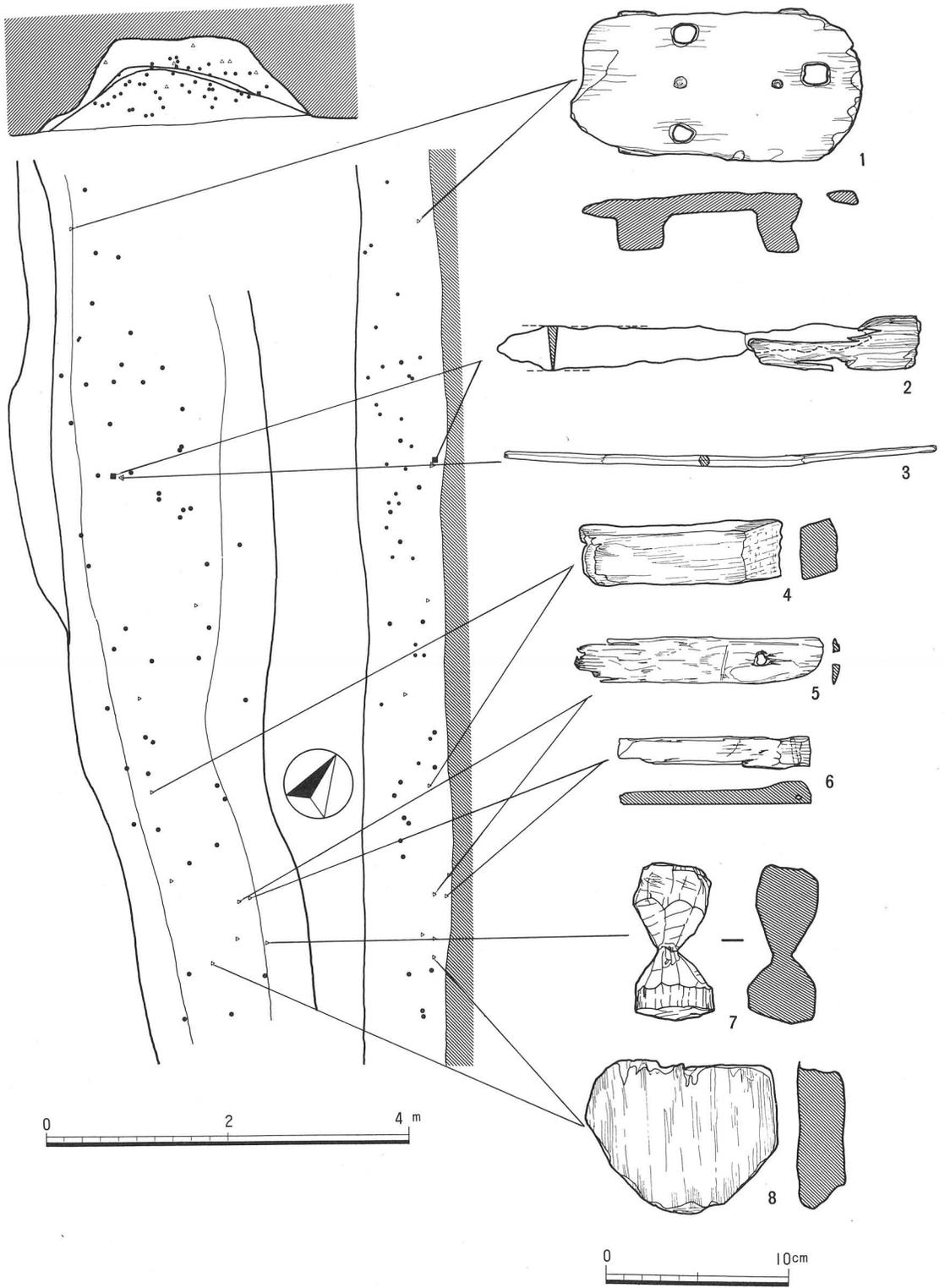
第8図 D区の遺構と層序



第9図 SD11の出土遺物分布図



第10図 S D11出土の木製品と鉄製品



できなかった。土師器甕の破片が若干出土している。

S X 04 70×65cmの方形プランを呈し深さ30cmの掘り込みである。出土遺物はない。

S X 05 確認面から若干の土師器片が出土したため5cm程度掘り込んだが、遺構と認めることができず、攪乱部分と考えられた。

(6)F区

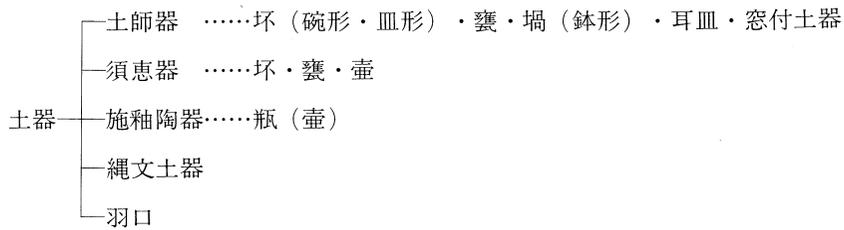
F区は2×1.5mほど試掘した部分である。深さ1.5mほどで青灰色粘土層になり、地山部分を確認することはできなかったため、用水路の盛土及び旧水路の掘り込み箇所と想定し途中で掘り下げを中断した。

(7)検出遺構のまとめ

本調査によって検出された遺構の中で溝跡は、調査面積の関係から全容を理解できたものは1本もなく、走る方向も画一的な様相にはない。しいてあげると、S D 10とS D 12が同一覆土・同一規模であり連続する可能性を有するが、S D 11のように多量の遺物がみられた溝は他になく、それらの性格も不明と言わざるを得ない。遺跡の立地からみて用水路等の可能性は高いがS X 02（井戸跡）の検出から、生活空間が隣接した場所に存在する可能性が高く、生活空間の区画を意図したものとも考えられる。

IV 出土遺物

本調査によって出土した遺物を素材・形態別に分類すると以下ようになる。



木製品 …… 下駄・曲物・箸・椀・木錘・板・他

鉄製品 …… 刀子

石製品 …… 砥石

骨 …… 牛歯

他 …… 植物遺存体・鉄滓・他

以上のうち最も出土量の多いのは土器の類で破片数で数えると 5,000 個ぐらいになり、復元可能ないしは実測可能な個体（口縁から底部まで存するもの）は 100 個前後であることからいかに破損状況が激しかったか理解できる。それは他の遺物にも言えることで、木製品の箸なども 70 本以上出土しているが完全な状態のものはわずか 7 本程度であり、今回検出した遺構の性格にも起因するがほぼ全遺物が人為的に廃棄されたと考えて大誤ないであろう。さらに、遺構による出土量の差もかなりみられた。すなわち、S D 11・S X 02 が遺構内から出土した遺物の 9 割以上であり、S D 11・S X 02 からそれぞれ出土した須恵器長頸壺の破片が接合している点などから、ほぼ同一時期の廃棄行為とみなすことも可能である。以後の遺物の記述にあたっては特に記さない限り、大部分が S D 11 と S X 02 出土の遺物であることを付記しておく。

(1) 土師器

ここで使用する土師器の語意は、かなり幅の広い意味を有している。一般的に土師器は『弥生式土器の系統をひく赤味がかった素焼き土器』で『弥生式土器と同様にろくろを用いず、巻きあげなどの原始的な方法で成形され』『いまのかわらけの前身にあたる』と理解されている。そうなると、本遺跡出土のものは「当地における弥生式土器からの系譜が不明」なばかりでなく、「ろくろを使用すること」と「当地におけるかわらけへの連続が不明」である点を考えると「赤味がかった素焼きの土器」という概念でのみ土師器と呼称していることになり、はなはだ不分明な用語と言うことになる。これは、後述する須恵器等と密接に関連することであり、当地における土器文化を考える上で大変重要な問題が存在している。

特に、青森県における古代の土器文化は須恵器工人に特有な技術であったろくろ成形を土師器に導入する時期と須恵器の窯業生産が比較的近似した時期になされたため、土師器と須恵器

を明確に使用区分する文化圏とは異質な、いわゆる「まだら状土器文化」が成立しているのではないだろうか。その意味で、今回使用する土師器の用語もあくまで「当地における土師器」として把握し、「須恵器」「須恵系土師質土器」「須恵系土器」「あかやき土器」等の各種名称にこだわらず「土師器の系譜に連なる須恵器以外の土器」として報告する。

出土した土師器の器種としては、坏・甕・耳皿・窓付形等があるのでそれぞれ詳述する。

(a)坏

坏はその形状から碗形と皿形に大別できる。が、見た目の基準では碗に近い皿あるいは皿に近い碗が存在するため、法量（口径・底径・器高）を抽出し、外傾指数（ $\text{器高} \div \frac{\text{口径}}{2}$ ）、底径指数（ $\text{底径} \div \text{口径}$ ）、高径指数（ $\text{器高} \div \text{口径}$ ）の三視点から区分すると、外傾指数は0.6～0.7のあたり、高径指数は0.3～0.36のあたりが碗と皿を分ける一つの分岐点になると考えられる（第26図－(1)・(2)参照）。外傾指数が0.6～0.7の間に入るものは一応皿形に入れて報告する。

(i)碗形

碗形の中には、内面を黒色処理する「内黒土器」がある（第11図－1～4）。これらの土器は法量的に近似した数値を示し、成形はロクロ、底部切り離しは回転糸切、内面調整は口縁部付近が横位のミガキ、胴部から底部にかけては縦位のミガキを施している。焼成状況を見ると軟質な焼き上がりで、胎土も他の碗形に比較して小石等を含まぬ精選された粘土を使用していると観察される。

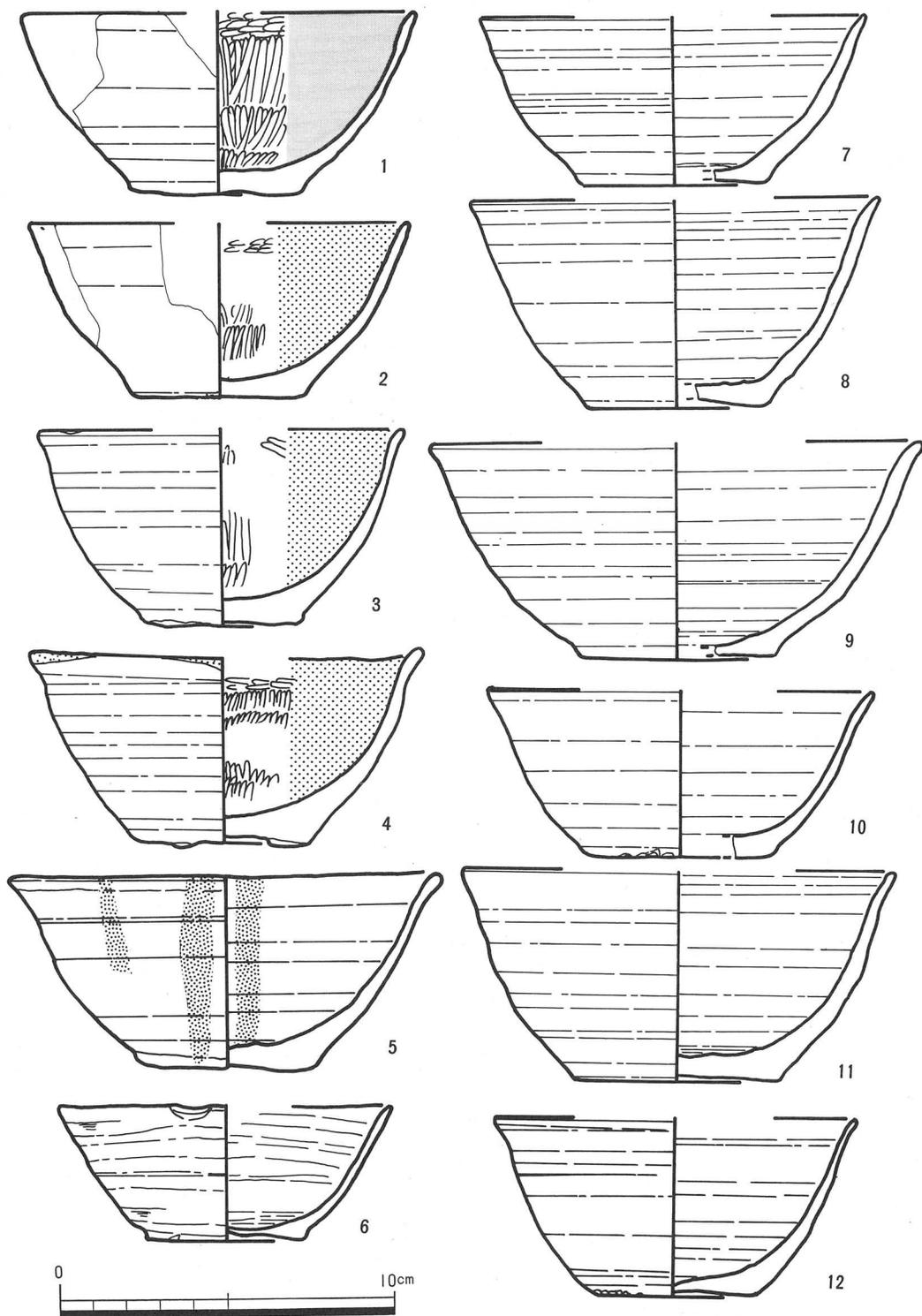
内黒土器以外の碗形の大部分は、成形にロクロを使用し、底部切り離しは回転糸切、その後の調整はまったくみられないという一律の特徴を有し、焼成状況が軟質の焼き上がり呈するか、硬質感のある焼き上がり呈するかの区別しかない。もちろん、プロポーションの点で、口縁が外反気味のものや、直線的なもの、あるいは底部の張り出しが顕著なもの、丸味を有して立ち上がるものの区別はあるが、明確に分類できるかどうか不安な点が多い。

特徴的な資料としては、火ダスキ状の痕跡を有する例（第11図－5）、口唇に片口状の指圧痕がみられる例（第11図－6）、胴部下半に馬蹄状の墨書が認められる例（第13図－12）があり、器形自体に歪みの認められる例（第12図－3・5・6・7・8・10・11、第13図－3・6・9・12）もかなり多い。法量的には、口径14.8cmの例（第11図－9）から口径10cmの例（第11図－6）まで各種存在する。

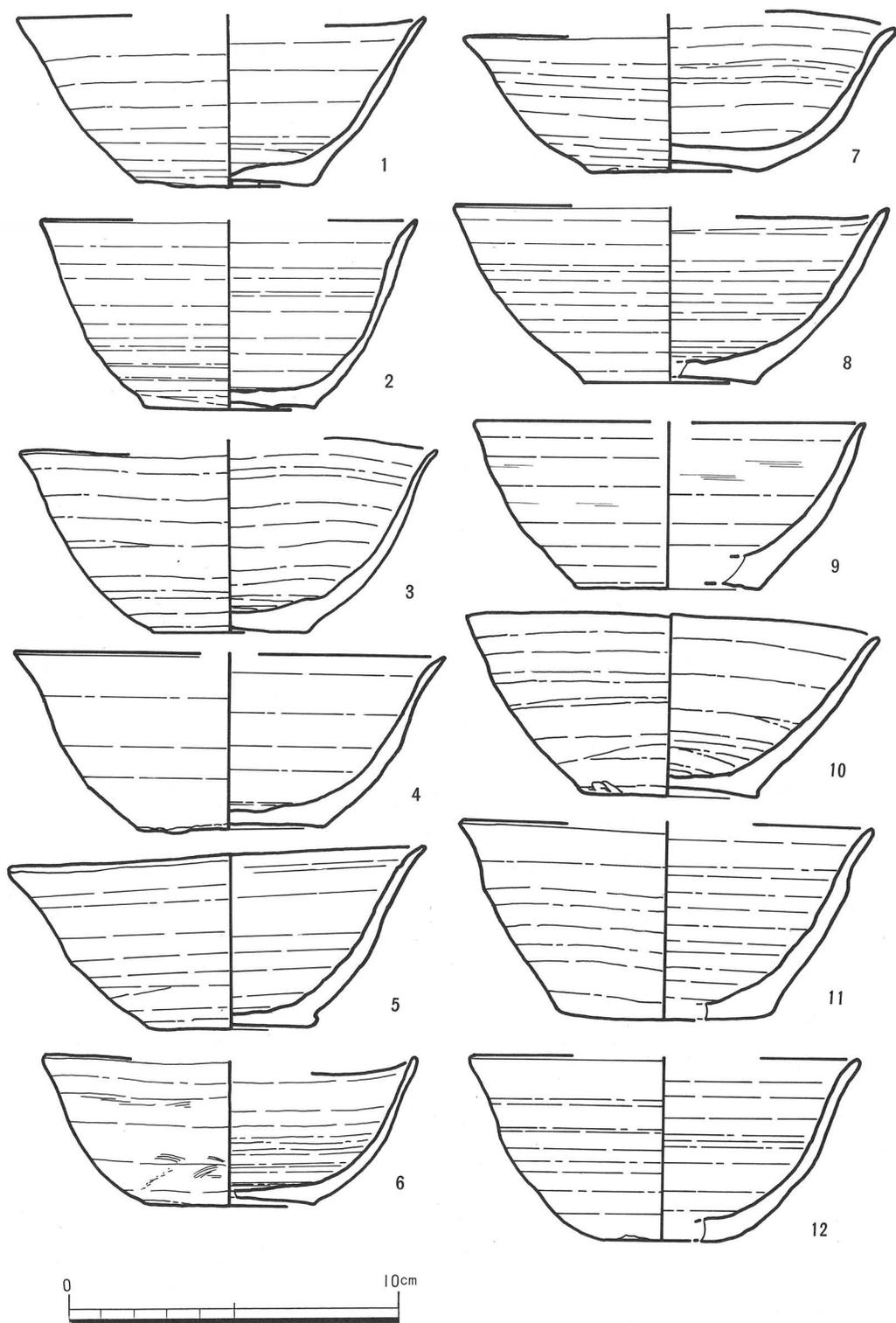
S D 11出土の例では、器体が二次加熱を受けたため表面が剥落する例（第11図－10、第12図－7、第13－1）と、スズ状の付着物が認められる例（第15図－4～8）があり、特に第15図－6・7については口縁下に穿孔があり注目される。

以上の他に、ロクロ成形でない碗形の例（第15図－3）がみられた。底部は菰編圧痕が明瞭に残り、内面は指ナデ、外面はヘラケズリによる成形がなされ、胎土・焼成は内黒土器に近い状態である。

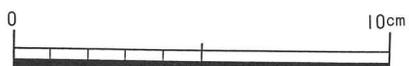
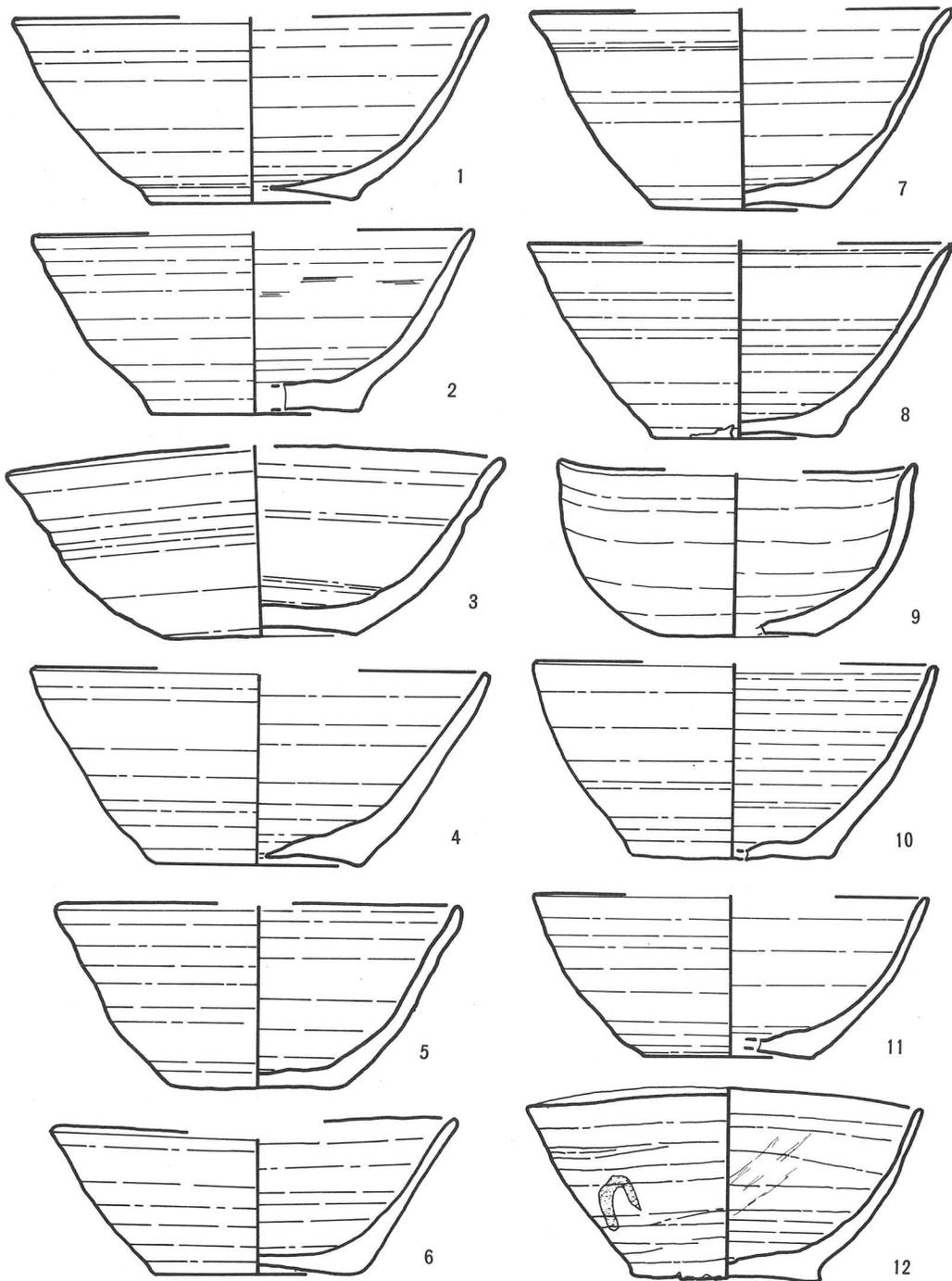
第11図 土師器実測図(1)



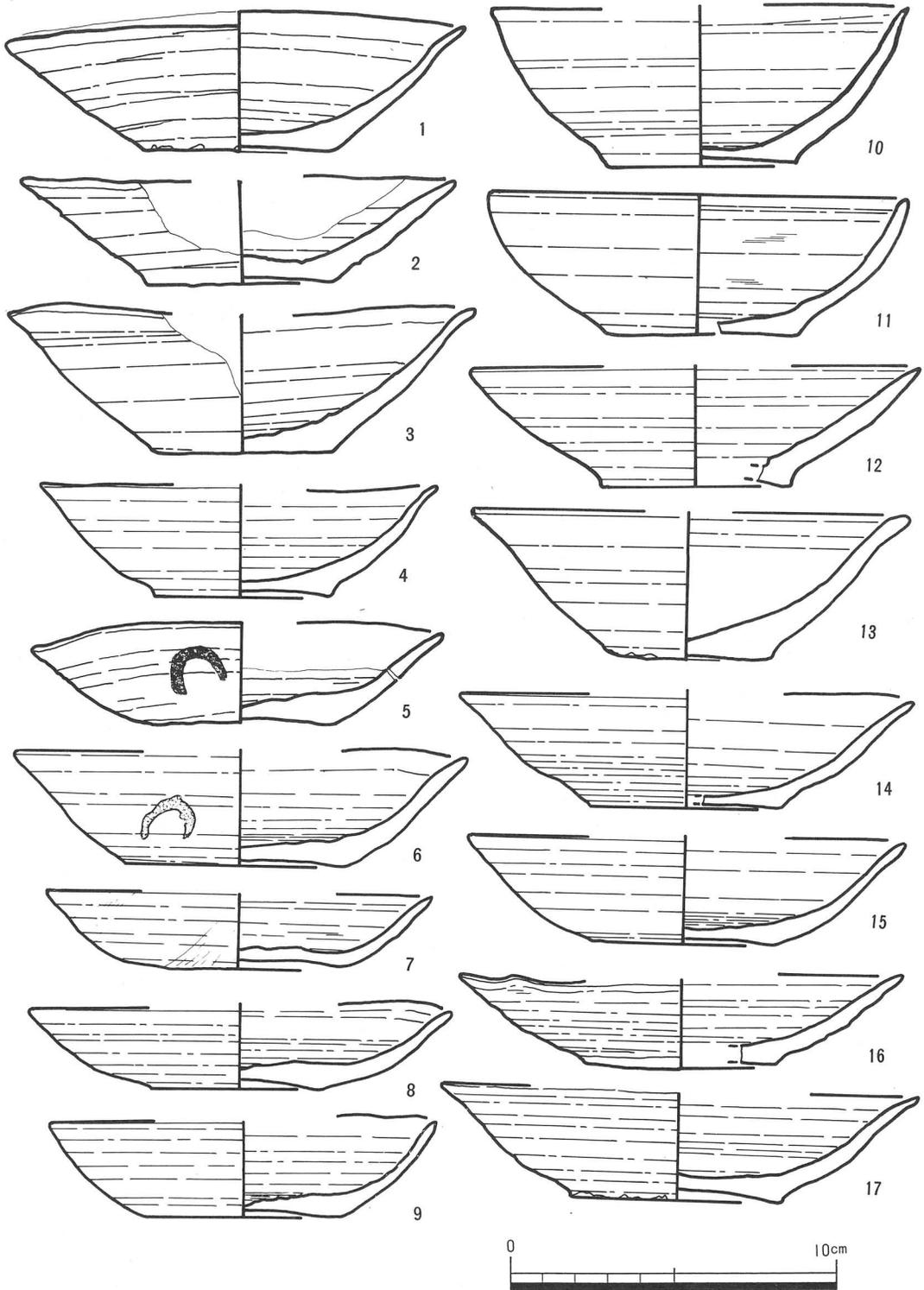
第12図 土師器実測図(2)



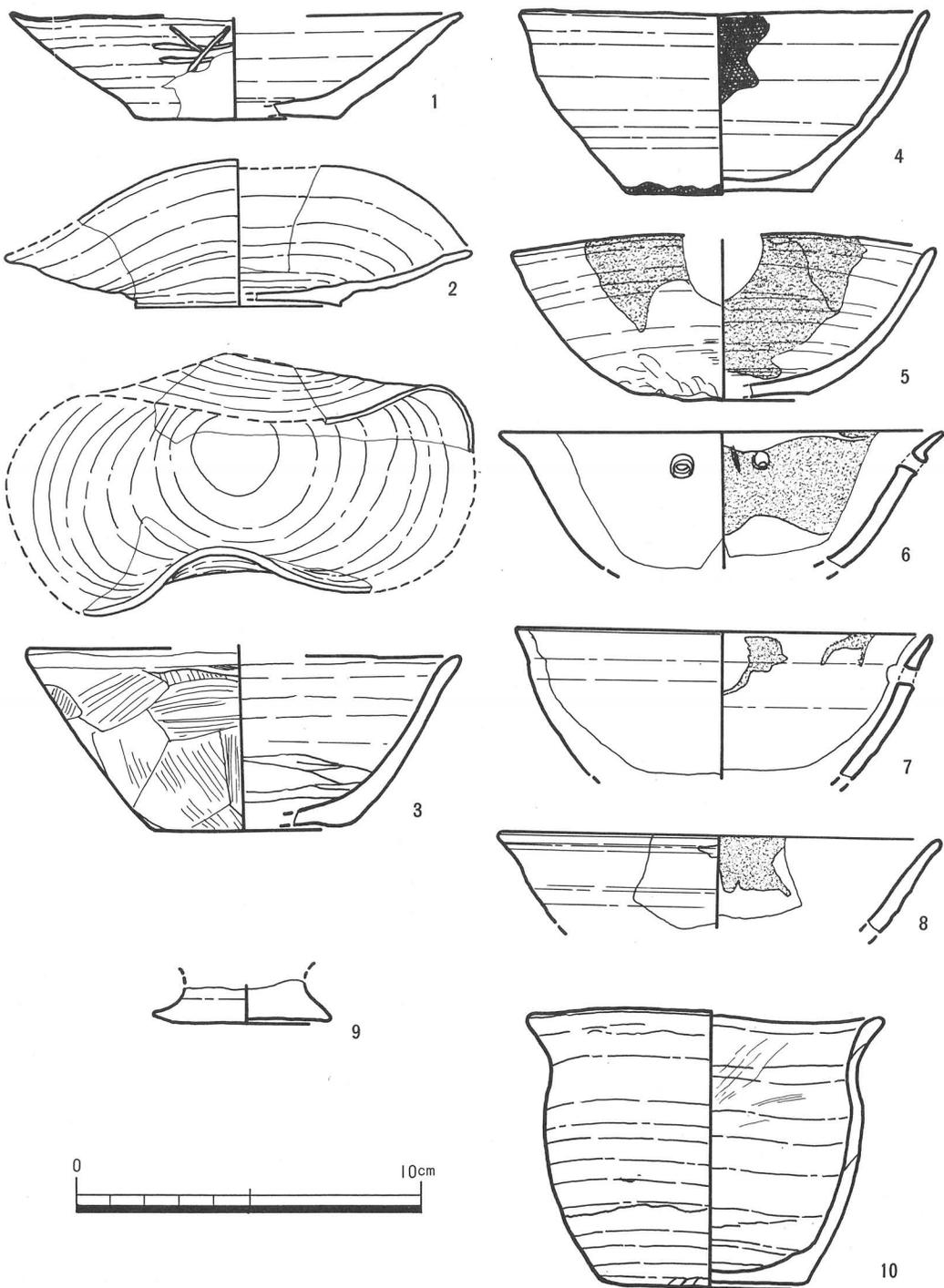
第13図 土師器実測図(3)



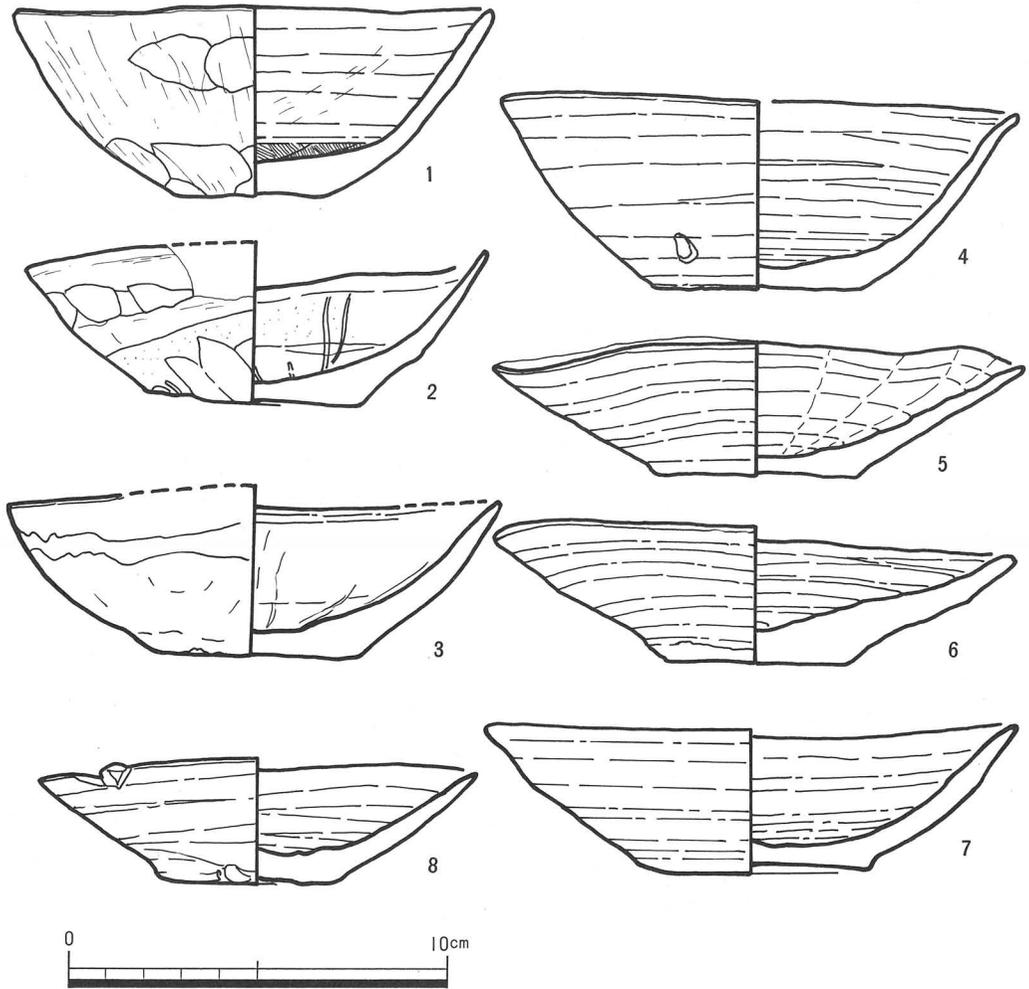
第14図 土師器実測図(4)



第15図 土師器実測図(5)



第16図 土師器参考資料実測図



(ii) 皿形

皿形はすべてロクロ成形、底部の切り離しは回転糸切、その後の調整はまったく認められない。プロポーションでは口縁が外反気味になる例（第14図－1・3・4・13・17）は比較的底部立ち上がりの張り出しが強く、口縁が直線的になる例（第14図－2・5・6・7・8・15）では底部立ち上がりが丸味をもつことが多い。一例だけ口縁が内湾気味になる例（第14図－11）がある。器体が薄手に成形されるものが多く、その結果とも推定されるが器体の歪みが多く認められる。

特徴的なものとしては、胴部外面に馬蹄形の墨書が認められる例（第14図－5・6）とヘラ書き記号の認められる例（第15図－1）がある。

(b) 耳皿（第15図－2）

耳皿と推定される破片が2点出土し、推定復元したのが第15図－2である。非常に薄手にロクロ成形された皿をつまみ上げて整形し、表面の色調は黄赤灰色を呈するが胎土は黒灰色で還元状態の焼き上がりに近い状況である。

(c) 埴

埴あるいは浅鉢と考えられる器形で、図示した以外に巻き上げ痕が残る破片も一例認められた。第17図－1は、口径28cm、器高11.6cmを測り、巻き上げ成形後胴部上半から口縁はロクロを使用して調整している可能性が高い。胴部下半から底部にかけては内外面ともにケズリ調整していると思われるが、比較的硬質・薄手に焼き上がっているため顕著には認めがたい。

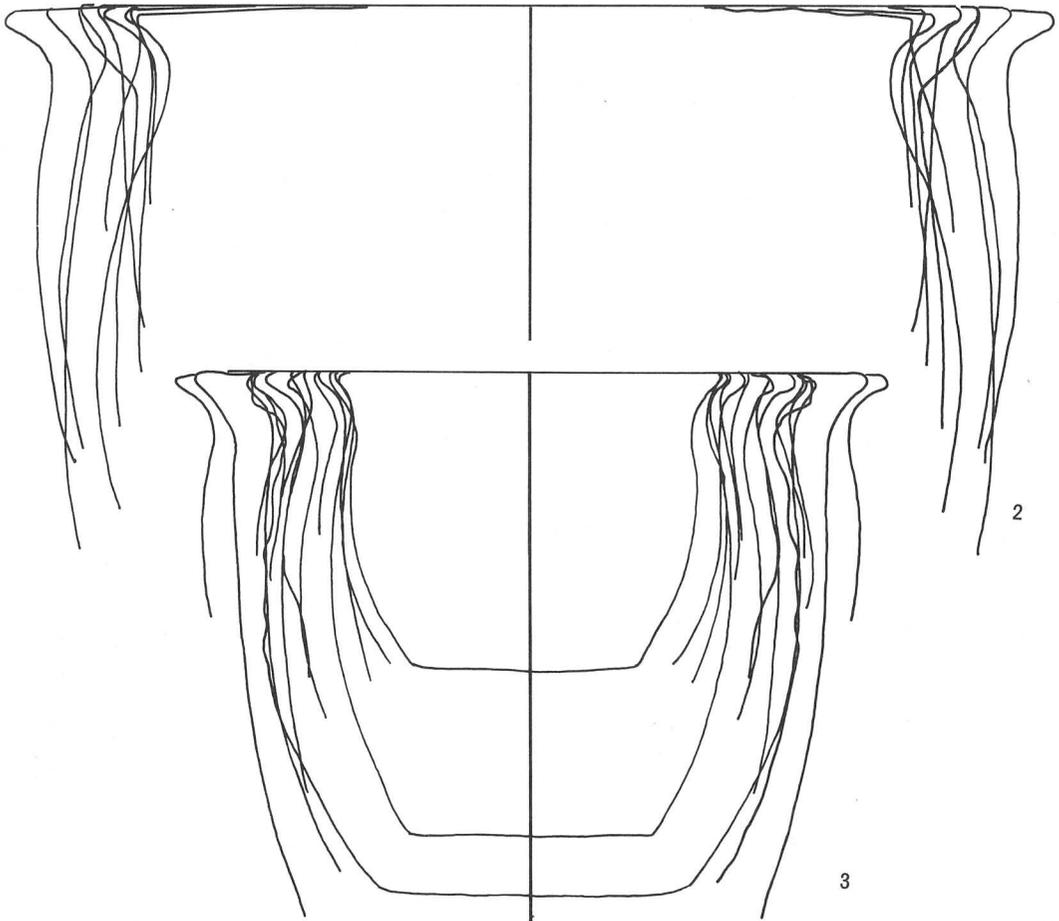
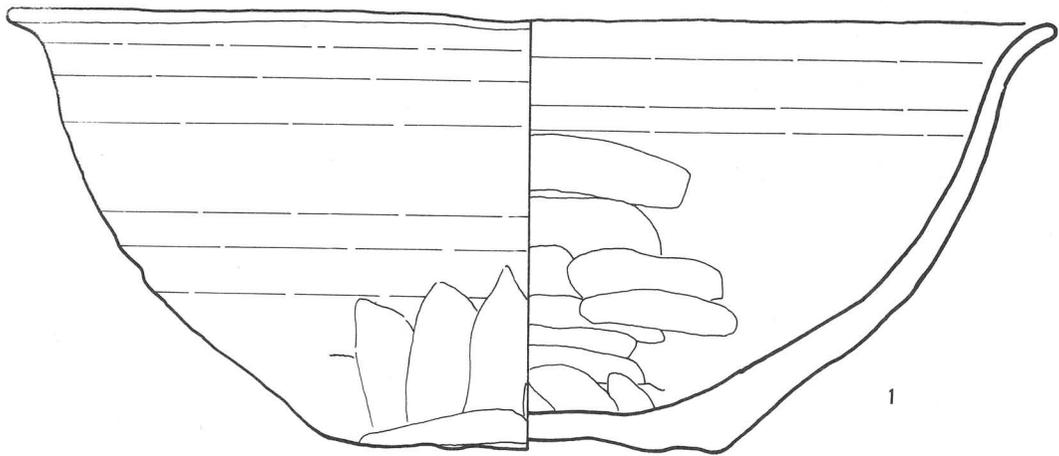
(d) 甕

甕は口縁から底部までわかる例が3例しかなく、ほとんどが破片資料である。土器の出土量の約 $\frac{1}{2}$ の重量を有する。口縁部の形状に相違は認められるものの、大部分は長胴形と推定され一部に胴部中央がふくらみを有する球胴形に近いものもあるらしい。口径が20cm以上とそれ以下の口縁形を比較したのが第17図－2・3である。最大径28cm前後から最小径11cm前後まで、の法量はほぼ非規格的な様相で、ロクロを使用しない例が多いことにも原因していると思われる。

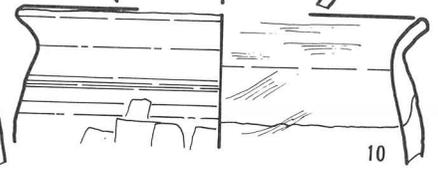
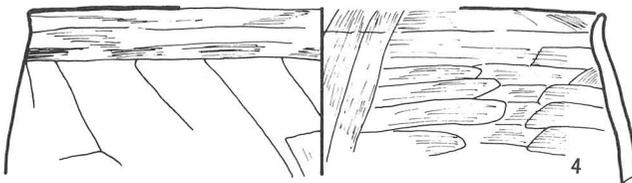
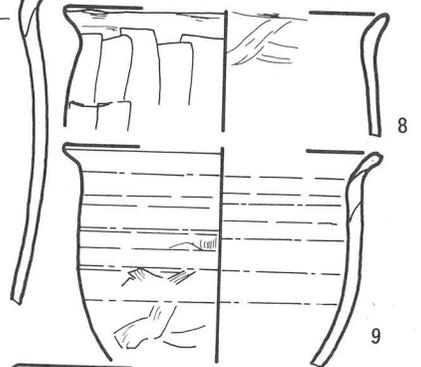
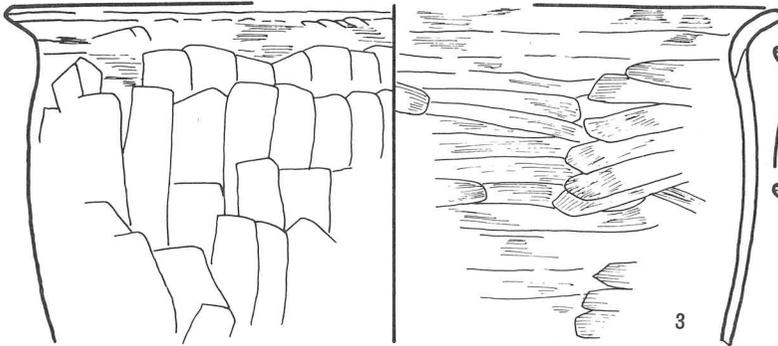
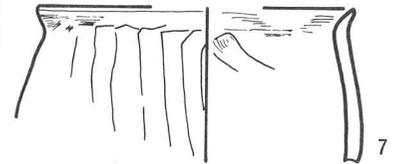
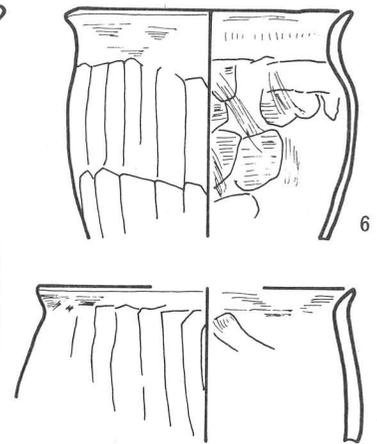
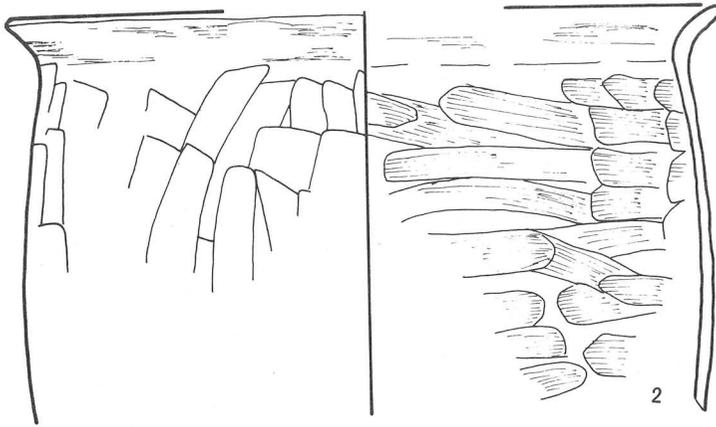
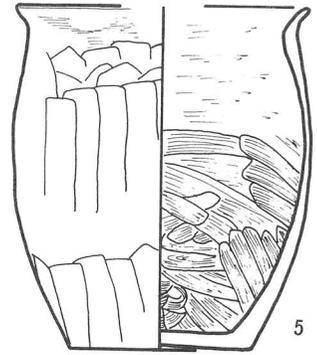
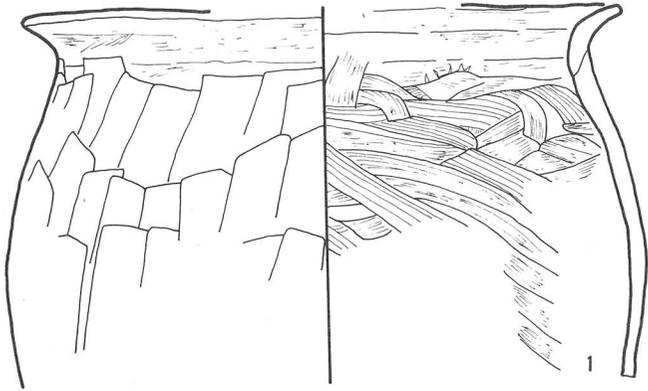
口径20cm以上の大型の甕では、口縁が一度屈曲した後に内湾して立ち上がるロクロ成形の例（第19図－2）以外、口縁が幅狭く「く」字状に外反する例（第18図－1・2・3、第19図－1・3・4・5）が多く、外面口縁部が横位のユビナデ、胴部はヘラケズリによって器面調整し、内面は口縁が横位のユビナデ、胴部は横位あるいは斜位のユビナデないしはヘラナデを施す。ただ、第18図－4は、口縁が直立する例である。

口縁20cm以下の甕では、口縁が小さく外反する例が大部分で、ロクロ成形の例（第18図－9・10、第20図－3）以外は、すべて巻き上げ成形である。器面調整も口径20cm以上のものと同様であり、第19図－9は胴部に屈折した張り出しを有している。

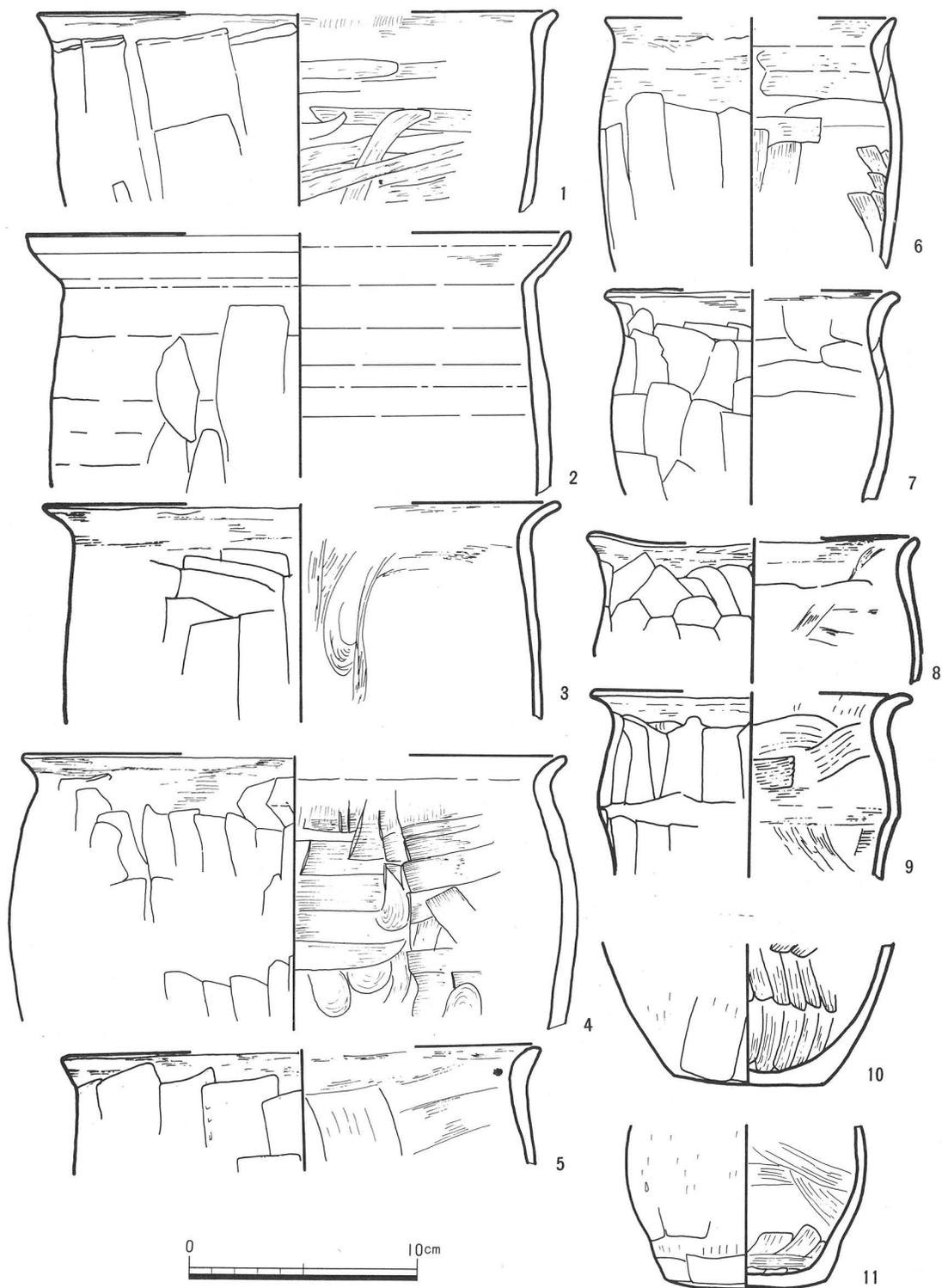
第17図 土師器埴実測図・土師器甕プロフィーラー



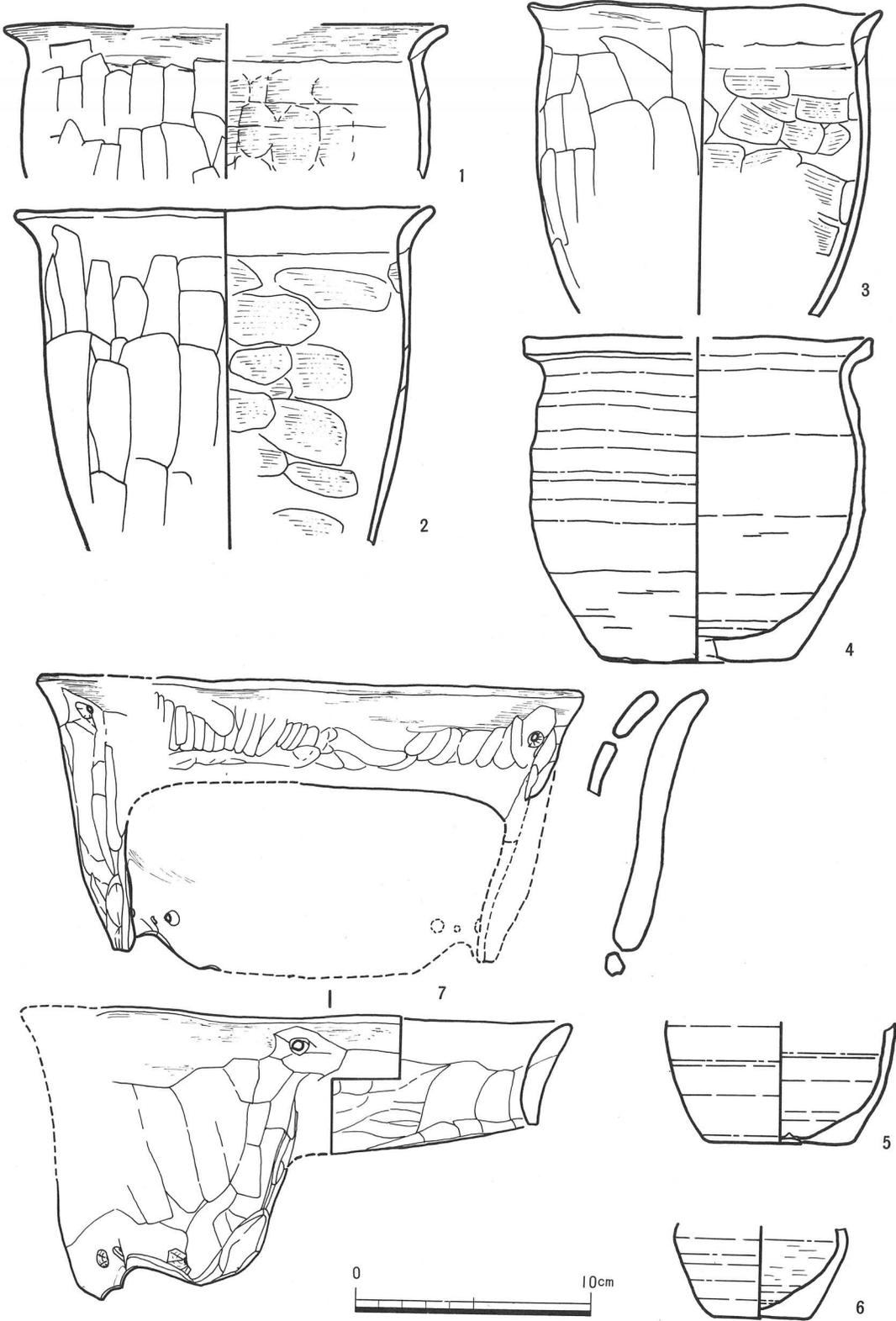
第18回 土師器甕実測図(1)



第19図 土師器甕実測図(2)



第20図 土師器甕・他実測図



甕の底部をみると、菰編圧痕の認められる例（第18図-11）、平坦に整形されただけの例（第19図-10・11）、砂の付着が顕著な例（第20図-4）、糸切底の例（第15図-10）があり、第20図-5は糸切底で穿孔の認められる例である。

(e)その他

第15図-9は糸切底で柱状の高台を有する坏形であろうか。

第20図-6は小形壺にでもなる器形と推定される。

第20図-7は、甕形の上端を輪切りにして窓を有する器形であり、類例がないため「窓付土器」とでも呼んでおく。胎土に小石を含む粘土であるが、粘土そのものは精選した感じで焼き上がりも甕と違い乳白色である。口縁はやや外反し、窓が開くあたりの口縁下に、対になった穿孔がみられる。また、底部には三箇所ほど穿孔が認められることから、これも対になるのではないかと考えられる。窓の部分は上端・側面とも焼成後の削りでなく、成形時にケズリを施しており、窓がとじる部分は肉厚に成形し面取り状のケズリ痕が各所に認められる。口縁付近および内面は指ナデ調整（一部ケズリあり）、外面はケズリ調整が主体を占める。部分的にススの付着が認められるけれども全体ではない。

(f)土師器の参考例

上述した出土土師器とともに、大沼遺跡周辺から採集された資料があるので紹介しておく。第16図-1～6は奈良岡洋一氏の採集資料である。1～3は碗と皿の中間形のような非ロクロ製品である。1は内面を若干黒色処理しているようで内底にミガキの痕跡が認められ、底は菰編圧痕が残っている。外面はケズリ痕が残っているものの摩滅が激しい。2・3は底の切り離しに静止糸切痕が残っており、内外面にケズリ調整痕・ユビナデ調整痕が認められる。4～6はロクロ成形である。5だけは硬質感があるものの4と6は黄白色の軟質な製品である。

第16図-7・8は高木征生氏採集資料であり、大沼遺跡に隣接した十川の川底工事で採集したものと聞いている。7・8ともに硬質なロクロ成形皿である。

以上の採集資料は、いずれも器形に歪みが認められることと、成形・調整技法の点から大沼遺跡出土品と類似しており、若干の時期差・使用場所の相違はあるものの参考資料としての価値は高いと考えられる。

(2) 須恵器

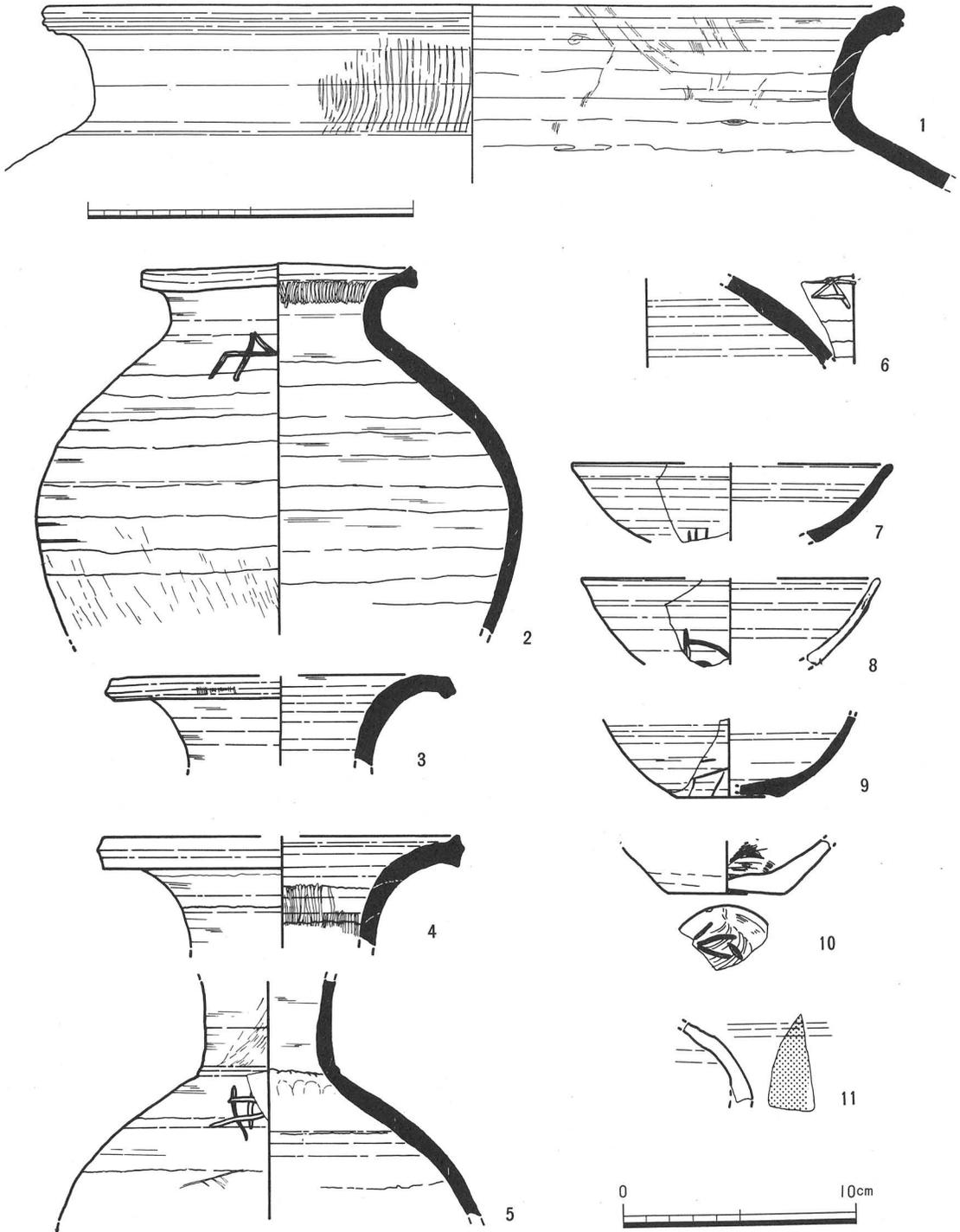
須恵器の基本要素として、「ロクロを使用する土器」「窯にて還元焼成した土器」を考え、さらに「須恵器個有の器種をもつ土器」を付加して報告する。

須恵器の器種として、大甕・壺・坏が出土している。

(a)大甕

大甕は、口縁部片と胴部片が出土しており、口縁部片だけ実測図で掲載した。第21図-1は推定口径52cmのもので、口縁が外反して立ち上がり口縁外側が三条の段を有した整形になって

第21図 須恵器・他実測図



いる。頸部外面には縦位の叩目が認められ、内面には粘土紐の接合痕が残っている。胴部外面には格子状の叩目が認められ、全体の色調は黒灰色、胎土内は赤灰色を呈している図示した以外にも同型の口縁部破片が一点存在する。

(b)壺

壺には長頸壺のタイプが多い。第21図-3は口縁がすどく外反し、口縁側面で一条の段を整形している。色調は全体にあずき色を呈している。第21図-4は口縁がラッパ状に広がり、口縁上端をつまみ出し気味にして側面を段状に整形している。色調は暗灰色を呈する。内面頸部のあたりに縦位の調整痕がみとめられる。第21図-5は、頸部から胴部にかけての長頸壺で頸部下端に一条の隆帯を有し、胴部上端にへら書記号が認められる。色調は、内面が赤褐色、外面がくすんだ赤灰色を呈し、還元状態の製品ではない。第21図-6は、へら書記号を有する壺胴部上半片であり、灰色の色調を呈する。

上記以外にも壺の破片はかなりみられ、口縁に自然釉の認められる例や酸化状態を呈するものも多い。

(c)坏

須恵器の坏は量的に少ない。第21図-7と9は還元状態で胴部下半にへら書記号を有する坏であり、ロクロ成形の痕が縞模様のような状況になっている。明確に須恵器の坏と認められるものは上記の二点であるが、他に土師器質に近いながらもへら書記号を有する坏がある。第21図-8・10および前述した第15図-1などである。

(d)須恵器の参考例

第21図-2で示した須恵器壺は、奈良岡洋一氏が大沼遺跡から採集した資料である。口径12.1cm、胴部最大径21.1cmを測り、全体が黒灰色を呈する焼き上がりの製品である。頸部は短かく胴部上半から口縁にすどく外反し、口縁上端をつまみ出して側面に段を有する整形である。内面頸部付近には縦位の調整痕が認められ、粘土紐の種み上げ痕も残っている。胴部上半にへら書記号が存在し、外面胴部下半にはへらナデと思われる擦痕がある。

(3) 施釉陶器 (第21図-11、P.L.10-21)

施釉陶器としてよいか疑問な点もあるが、一応可能性ありと考えて報告する。器形としては壺形の上半部と推定され、外面上端に筋状の沈線が認められる。外面には暗オリーブ色 (Hue 5 Y $\frac{1}{2}$) の釉、胎土は灰黄色 (Hue 2.5 Y $\frac{1}{2}$) の色調で黒色微砂を混入、内面は灰色 (Hue N $\frac{5}{10}$) の色調を呈している。A区S D03の出土であり、同遺構から胎土が類似する甕形の製品も出土している。

表7 土器類計測表

No.	遺物No.	出土区	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	図版No.	P L-No.	備考
1	P 102	D	S D11	フク土	11.9	5.2	5.55	11-1	5-3	内黒調整
2	P 48	D	"	"	11.5	5.2	5.3	11-2	5-4	"
3	P 107	D	"	"	11.0	4.8	5.9	11-3	5-2	"
4	P 44	D	"	"	11.9	5.2	5.9	11-4	5-1	"
5	P 58	D	"	"	13.1	5.0	6.0	11-5	5-9	火ダスキ有
6	P 50	D	"	"	10.0	4.8	4.1	11-6	6-2	片口?
7	P 75	D	"	"	11.6	5.6	5.1	11-7	-	
8	P 53	D	S X02	"	12.4	5.3	6.3	11-8	-	
9	P 71	D	S D11	"	14.8	5.9	6.55	11-9	-	
10	P 38	D	"	"	11.7	5.8	5.05	11-10	-	二次加熱
11	P 86	D	"	"	13.0	6.2	6.4	11-11	-	
12	P 54	B	S X02	"	11.0	4.8	5.6	11-12	-	
13	P 57	D	S D11	"	12.4	5.3	5.25	12-1	-	
14	P 67	C	S X06	"	11.6	5.2	5.8	12-2	-	
15	P 105	D	S D11	"	12.8	4.9	5.9	12-3	-	
16	P 47	D	"	"	13.2	5.8	5.55	12-4	-	
17	P 108	D	"	"	12.7	5.1	5.6	12-5	5-7	
18	P 24	D	"	"	11.4	5.2	4.6	12-6	-	
19	P 30	D	"	"	13.2	5.2	4.86	12-7	-	二次加熱
20	P 103	D	"	"	13.2	5.2	5.4	12-8	-	
21	P 79	D	"	"	11.9	5.6	5.1	12-9	-	
22	P 36	D	"	"	12.6	5.4	5.5	12-10	5-6	
23	P 9	B	S X02	"	12.7	6.5	6.0	12-11	-	
24	P 13	D	S D11	"	12.0	3.5	5.6	12-12	-	
25	P 22	D	"	"	13.8	6.0	5.3	13-1	-	
26	P 110	D	"	"	12.8	6.0	5.2	13-2	-	
27	P 45	D	"	"	14.5	5.4	5.45	13-3	-	
28	P 3	B	S X01	"	13.3	6.0	5.6	13-4	-	
29	P 1	D	S D11	遺構確認面	11.8	5.0	5.3	13-5	6-1	
30	P 40	D	"	フク土	11.7	5.9	4.5	13-6	5-11	
31	P 61	B	S X02	"	12.2	5.0	5.7	13-7	-	
32	P 109	D	S D11	"	12.3	5.3	5.6	13-8	-	
33	P 70	D	"	"	10.4	4.6	5.1	13-9	-	
34	P 12	D	"	"	11.6	5.8	5.6	13-10	-	
35	P 63	D	"	"	11.4	4.8	4.6	13-11	-	
36	P 49	D	"	"	11.2	5.6	5.6	13-12	5-8	
37	P.29, 39	D	"	"	14.1	5.8	4.3	14-1	6-9	
38	P 15	D	"	"	13.4	6.0	3.4	14-2	6-7	
39	P 100	D	"	"	14.5	5.4	4.6	14-3	6-8	
40	P 55, 69	D	"	"	12.3	5.5	3.5	14-4	-	
41	P 81	D	"	"	12.7	6.0	3.2	14-5	6-4	
42	P 84	D	"	"	14.1	5.0	3.1	14-6	-	
43	P 83	D	"	"	12.0	6.9	2.4	14-7	-	
44	P 37	D	"	"	13.2	5.4	2.8	14-8	6-10	
45	P 82	D	"	"	12.0	6.0	3.2	14-9	-	
46	P 34	D	"	"	12.9	5.9	5.0	14-10	-	
47	P 80	D	"	"	13.1	5.7	4.3	14-11	6-11	
48	P 59	D	"	"	14.0	5.9	3.7	14-12	-	
49	P 14	D	"	"	13.6	5.1	4.6	14-13	-	
50	P 26, 73	D	"	"	14.1	6.0	3.7	14-14	6-6	
51	P 64	D	"	"	13.4	5.6	3.4	14-15	-	

No.	遺物No.	出土区	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	図版No.	PL-No.	備考
52	P 51	D	S D11	フク土	13.8	6.0	2.9	14-16	-	
53	P 11	D	"	"	14.8	6.4	3.4	14-17	6-5	
54	P65. 74	D	"	"	13.3	6.0	3.2	15-1	6-3	ヘラ書
55	P43. 66	D	"	"	-	6.0	4.3	15-2	-	耳皿
56	P 42	D	"	"	12.7	5.8	5.5	15-3	5-10	非ロクロ
57	P 104	D	"	"	12.0	5.3	5.4	15-4	5-5	
58	P 101	D	"	"	12.4	5.0	4.8	15-5	10-12	
59	P 87	D	"	"	13.0	-	-	15-6	10-10	通し穴有
60	P 88	D	"	"	12.2	-	-	15-7	10-13	"
61	P 111	D	"	"	13.0	-	-	15-8	10-11	
62	P 89	B	S X01	"	-	5.25	-	15-9	10-14	
63	P 46	D	S D11	"	10.45	6.0	8.2	15-10	$\frac{4}{9} - \frac{5}{1}$	
64	P 96		(参考資料)		12.8	4.0	5.1	16-1	7-2・3	菰編圧痕
65	P 97		"		12.3	4.7	4.3	16-2	7-6	静止糸切
66	P 93		"		13.1	5.4	4.3	16-3	7-1	"
67	P 95		"		13.8	5.6	5.2	16-4	7-5	
68	P 94		"		14.4	5.4	3.7	16-5	7-4	
69	P 98		"		14.0	4.8	3.8	16-6	7-7	
70	参 1		"		14.2	6.2	4.1	16-7	7-8	
71	参 2		"		11.7	4.4	3.4	16-8	7-9	
72	P 92	D	S D11	フク土	28.0	10.4	11.6	17-1	6-12	
73	P 32	D	"	"	21.6	-	-	18-1	8-1	
74	P 25	D	"	"	25.7	-	-	18-2	8-4	
75	P 17	D	"	"	28.0	-	-	18-3	8-8	
76	P 124	D	"	"	20.7	-	-	18-4	8-3	
77	P 58	D	"	"	10.5	6.5	12.35	18-5	9-5	
78	P 126	D	"	"	10.3	-	-	18-6	9-3	
79	P 127	D	"	"	11.4	-	-	18-7	-	
80	P 128	D	"	"	11.6	-	-	18-8	-	
81	P 130	D	"	"	11.4	-	-	18-9	-	
82	P 131	D	"	"	14.8	-	-	18-10	-	
83	P 135	D	"	"	-	9.0	-	18-11	-	スグレ圧痕
84	P 121	D	"	"	23.0	-	-	19-1	8-2	
85	P 122	D	"	"	24.0	-	-	19-2	8-10	
86	P 123	D	"	"	22.85	-	-	19-3	8-7	
87	P 125	D	"	"	24.0	-	-	19-4	8-5	
88	P 137	D	"	"	21.15	-	-	19-5	-	
89	P 134	D	"	"	12.8	-	-	19-6	-	
90	P 141	D	"	"	13.0	-	-	19-7	8-6	
91	P 132	D	"	"	14.6	-	-	19-8	8-11	
92	P 133	D	"	"	14.2	-	-	19-9	-	
93	P 136	D		遺構確認面	-	6.5	-	19-10	-	
94	P 139	D	S D11	フク土	-	7.1	-	19-11	-	
95	P 129	D	"	"	19.0	-	-	20-1	-	
96	P 90	D	"	"	18.0	-	-	20-2	8-9	
97	P 91	D	"	"	15.2	-	-	20-3	9-4	
98	P 60	C	S X06	"	14.95	8.4	14.0	20-4	9-2	
99	P 2	D		遺構確認面	-	6.1	-	20-5	9-6	
100	P 68	C	S X06	フク土	-	4.1	-	20-6	-	
101	P 8. 72	B	$\frac{8}{8} \times \frac{9}{11}$	"	24.6	-	13.2	20-7	8-12	不明
102	P 120	C	S X06	"	52.0	-	-	21-1	10-1	
103	P 99	大沼袋	表 採		12.1	-	-	21-2	10-9	ヘラ書

No.	遺物No.	出土区	遺構	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	図版No.	P L-No.	備考
104	P 118	D	S D11	フク土	14.6	—	—	21-3	—	
105	P 119	D	〃	〃	16.0	—	—	21-4	—	
106	P 117	D	§ X02	〃	—	—	—	21-5	10-2	へら書
107	P 116	D	S D11	〃	—	—	—	21-6	10-7	〃
108	P 113	B	§ X06	〃	14.0	—	—	21-7	10-5	〃
109	P 114	A		遺構確認面	13.0	—	—	21-8	10-4	〃
110	P 112	B	S X01	フク土	—	4.6	—	21-9	10-8	〃
111	P 115	A	表採		—	5.0	—	21-10	10-6	〃
112	P 76	A	S D03	フク土	—	—	—	21-11	10-21	施釉陶器
113	P 21	D	S D11	〃	—	—	—	—	9-9	溶解物
114	P 20	D	〃	〃	—	—	—	—	9-12	〃
115	—	B・D	—	—	—	—	—	—	9-14~17	縄文一括
116	P 138	B	S D07	フク土	—	—	—	—	10-3	へら書、火グスキ
117	P 62	D	S D11	〃	—	—	(長) 6.6	—	10-22	羽口
118	P 77	D	〃	〃	(外) 7	(内) 3	(長) 4.1	—	10-23	〃
119	P 140	D	〃	〃	—	—	—	—	10-15	高台付の(碗か皿)
120	—	D	—	—	—	—	—	—	10-16~20	釉のある土器片

(4) 縄文土器

P L. 9-14~17で示した細片が4点あり、中期末~後期頃の土器片と推定される。

(5) 羽口

羽口は2点の破片が出土している。P L. 10-22は、外側を面取りするような形状と考えられ、内面は赤黄色、外面は赤灰色と黒色の色調になっている。P L. 10-23は、炉の先端部のためか鈳物質に焼き堅まり、内面は赤色、外面は熔融物の付着などから黒灰色を呈している。

(6) 木製品

木製品はそのほとんどがS X02とS D11の出土品である。

(a) 椀

椀はS X02から1点だけ出土した(第22図-1)、推定口径11.8cmであり、内外面に黒漆を塗っている。口縁はやや内湾気味に立ち上がり、薄造りの成形で、漆の塗り重ね痕も内外面に認められる。

(b) 曲物

曲物もS X02からの出土であり、底板と側面部が別々に出土している。底板は径約21cmの円形に成形され、側方には木釘および木釘痕が計14箇所で見られる。平坦面の整形にはヤリガンナと推定される痕跡が残っている(第22図-2)。側面部は、一面に刃物による切れ込みを入れているため理解できるが、切れ込みの様相から4種類以上の製品が存在した可能性が高い。特に、木釘痕のみられる例(第22図-3)や、桜皮等による綴じ痕などのみられる例(第22図

ー4)、内面を黒色処理しているのではないかと推定される例(第22図ー6)、他(第22図ー5)があり、幅2cm強から5cm前後のものが多い。

(c)箸

箸は破片を加えると70本以上の出土があった。S X02に多くS D11は少ない。全形のわかる例は7本ほどで、中央部をやや肉厚に両端を先細に成形する例(第22図ー7~10・13)が多い中で、無造作に成形された例(第22図ー11・12)もある。長さは24cm前後の例が多く27cm以上の例もあることから、規格品的というより任意的な製作方法がとられていたのだろう。

(d)下駄

下駄は連歯下駄が1点S D11から出土している。第22図ー14は、長さ16.1cm、幅8.0cmの大きさで、前壺の位置から右足用のものと推定される。表面に丸いえぐり痕が二箇所認められる。

(e)木錘(きのおもり)

丸い木材の両端を切り落とし、中央部をV字状にえぐって成形したもの、長さ8.6cmで径はおよそ3.7cmである。切り落としやえぐりにあたっては鋭利な刃物を使用しているためか、ケズリの痕跡が明確に認められ、後の調整等は一切おこなっていない。編物等のおもりとして使用するものであろうか(第22図ー15)。

(f)篋状木製品

第22図ー16は、幅広の平坦部と柄状の部分に成形された製品で、篋のように使ったものであろうか。柄の部分から平坦部にかけては意図的に丸味をもたせる整形が認められる。

(g)その他の加工木製品

第22図ー17は、角材の一端を斜めに削った製品である。

第22図ー18は、外辺を六面に面取りした成形で、厚さも2.6cmと比較的肉厚になっている。

第22図ー19は、S X02から出土した板材で、径1.2cmほどの穿孔が認められる。割り板の後若干のヤリガンナによる整形痕がみられる。

第22図ー20は、木釘孔らしい穴が穿たれており、孔の付近が肉厚に、他は板状に成形されているが破損品のため全形を知ることはできない。

第22図ー21は、板状の一端を丸く整形し一孔が穿たれている。

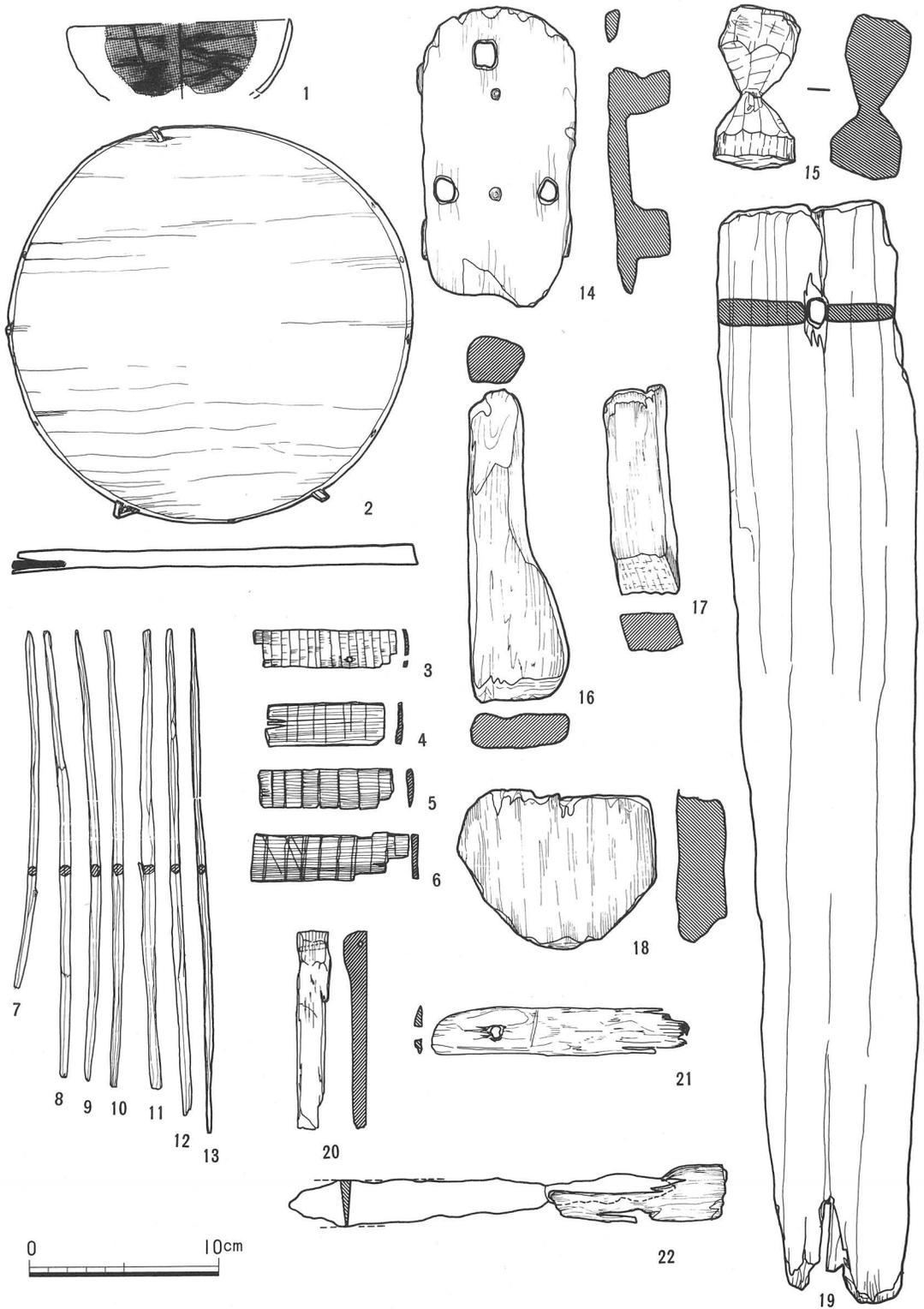
P L. 11-3は、厚さ0.4cmの薄い板状の製品で当地で言う屋根柱に類似した製品である。

以上の他に、S X02出土のものでは板状の製品や、削りカス状の木材片がみられ、S D11では薄い柱板状の製品(長さ130cm、幅2cm)も出土している。

(7) 鉄製品

鉄製品としては、S D11の底面近くから刀子が一点あっただけである。腐植が進んでいるため全体の長さは不明であるが、現存する部分は23cm、刃部と木質が残る柄部からなっている。

第22図 木製品実測図



刃部の幅 2.5cm、木質部の幅（高さ）は 3cmほどで、刀子というより小刀に近いものである。

（第22図-22、P L. 12-14）

(8) 石製品

石製品としては砥石として使用したと考えられる遺物が 1 点あった（P L. 9-18）。硬質な凝灰岩のような石質で、自然石の一面だけ平坦に擦り、一条の凹も認められた。

他に自然石が数点出土している。

(9) 骨

牛歯が S D 11 から出土しており、後述小林氏報文を参照されたい。

(10) その他

植物遺存体として、くるみが S X 02 から（P L. 11-12）、桜皮が S D 11 から（P L. 11-10・11）が出土している。

鉄滓が、S D 03・S X 01・S D 06 から出土している（P L. 9-7~13）。

昆虫の遺存体が S X 02 から出土している。

表 8 木製品・鉄製品・石製品等計測表

No.	遺物No.	出土区	遺構	層位	計測値（長×幅×厚）cm	図版番号	P L. No.	備考
1	M 2	B	S X 02	フク土	11.8（口径）	22-1	11-1	黒塗の椀
2	M 4	B	"	"	21.6×21.35×1.1	22-2	11-2	曲物の底
3	M25	B	"	"	7.6×2.0×0.2	22-3	11-5	曲物の側部
4	M33	B	"	"	6.3×2.3×0.3	22-4	-	"
5	M31	B	"	"	7.2×2.1×0.35	22-5	11-7	"
6	M32	B	"	"	8.5×2.5×0.4	22-6	11-6	"
7	M26	B	"	"	19.2×0.53×0.46	22-7	12-8	箸
8	M23	D	S D 11	床面直上	24.0×0.57×0.44	22-8	12-7	"
9	M24	B	S X 02	フク土	24.2×0.7×0.46	22-9	12-9	"
10	M29	B	"	"	24.05×0.53×0.5	22-10	12-6	"
11	M27	B	"	"	24.72×0.73×0.36	22-11	12-4	"
12	M30	B	"	"	26.2(+α)×0.56×0.46	22-12	12-3	"
13	M28	B	"	"	27.1×0.56×0.43	22-13	12-5	"
14	M11	D	S D 11	"	16.1×8.0×3.35	22-14	12-1	下駄
15	M15	D	"	"	8.65×3.7×3.7	22-15	12-10	おもり
16	M19	D	"	"	16.5×5.53×2.32	22-16	11-9	篋
17	M12	D	"	"	11.16×3.11×2.21	22-17	12-11	加工木製品
18	M10	D	"	"	8.5×10.42×2.69	22-18	12-2	加工木製品
19	M 3	B	S X 02	"	59.2×10.5×1.5	22-19	11-4	柄(1.24×1.08)
20	M21	D	S D 11	"	10.61×1.71×1.2	22-20	12-13	角柄(0.29×0.29)
21	M22	D	"	"	12.86×2.54×0.48	22-21	12-12	柄(0.7×0.64)
22	F 4	D	"	"	23.35×2.5×0.6	22-22	12-14	刀子
23	F 1	A	S D 03	"		-	9-13	鉄滓
24	F 2	B	S X 01	"		-	9-12	鉄滓
25	F 3	B	S D 06	"		-	9-9	"
26	S 2	D		遺構確認面	11.38×7.11×4.68	-	9-18	一直線に刻み有
27	M34	B	S X 02	フク土	9.1×1.0×0.2	-	11-8	曲物の側部
28	-	D	S D 11	"		-	11-10	桜の皮
29	-	D	"	"		-	11-12	くるみ(半)
30	M 1	D	"	"	6.835×0.54×0.41	-	11-14	箸
31	M 5	D	"	"	5.705×1.29×1.1	-	11-13	楔
32	-	B	S X 02	"	40.0×5.1×0.4	-	11-3	柁
33	B 1	D	S D 11	"		-	13	牛歯

IV 大沼遺跡出土土器の編年的位置

県内における古代の土器編年は、学史的には桜井清彦^(注1)の提唱した第一型式・第二型式を基盤として、青森県以南の諸研究に自らの資料を対比させる状況で進展してきた。しかしながら、今日的課題として地域的な土器編年をいつまでも地域から遊離した形で継承するのは考古学的視点の欠如と言わざるを得ず、不明な部分は不明として地域資料に側した編年の組み立てが求められている。青森県内における古代遺跡の調査も昭和40年代後半から増加の状況をみせはじめ、現在まで調査した竪穴住居跡の数は1,000以上になっていると思われる。

そのような中で、古代土器の編年を精力的に取り組んだ三浦圭介は、1982年11月に野辺地町で行なわれた青森県考古学会研究発表において、7世紀後半から12世紀に亘る詳細な編年試案を提示した事があった。^(注2)この資料は現在まで印刷物として発表されていないらしく、該期の論文等に参考にはされながらも資料活用の点では報告者の意を汲みとれないところがある。ただ、その概要については今日でも普遍的側面を有しているため、公開の日が待たれる。また、宇部則保は最近になって7・8世紀の土器編年を、馬淵川周辺から出土することが多くなった豊富な資料と周辺地域との比較によってI群～IV群に編年している。^(注3)現在のところ、編年的視点から考察された土器変遷をたどれるのは、上記二者のものだけであり、各遺跡の調査報告書内で一遺跡の土器変遷を考察している研究者もあるものの少例にすぎない。^(注4)

今回大沼遺跡の調査によって出土した古代の土器を観察するうちに、その実年代を想定する資料の少なさに気付き、ある程度の土器変遷試案が必要であろうと感じるようになった。筆者は1986年に某出版社の依頼で、青森県における7～10世紀の土器を執筆したことがある（該資料は未刊行のため今だに資料提示できない状況にある）。当時は、もっぱら中世資料の研究に明け暮れていたため十分に吟味した内容になっていない点はあるものの、未刊のままで終止するのも筆者の意に反するため、本報告の紙面を借用して資料提示してみたいと思う。その上で訂正・修正部分を加え、11～12世紀までの試案をおこない研究者の御教示を期待したい。【7～10世紀の記述中〔〕以外は1986年時の執筆原文のままである】

(1) 7世紀の土器（第23図）

青森においては、弥生土器から土師器を主体とする土器群への変遷は明確でなく、現在なお暗中模索の状況にある。その中で、7世紀に製作されたと推定される土器群は、八戸市根城東構地区から出土した土師器が比較的まとまった資料であり〔後に八戸市丹後谷地遺跡・田面木平遺跡でも良好な資料が加わる〕、現在のところ類例は少ない。八戸市根城遺跡の近隣には最北の末期古墳とされる〔後に丹後平古墳、下田町阿光坊古墳、尾上町原古墳等が発見されている〕鹿島沢古墳群があり、青森県において本地域が比較的早く大和朝廷の影響を受けていたものと考えられる。今後、根城遺跡(110号・122号住居跡)の出土土器が県内における7世紀の土

器の標式となる可能性が高く、十分に吟味を要するところである。

器種としては、坏・高杯・長胴甕・球胴甕・甌・壺・罍などがあり、特に坏は形態の上で東
北南半における栗圀式との強い類似性が認められる。

坏は、ロクロ未使用で内外面に段を有し、体部下半から口辺部にかけて外反する形状と一部
に口辺部が直立するものがあり、底は丸底、内外面のへら磨きは丁寧に施され、内面を黒色処
理するものが大部分である（第23図-1~4）。

高杯は、脚部の明確なものが少ないため全形を理解できる資料は限られるが、上記杯の形態
の特徴を有しながら脚部上半は縦位のへら磨き、下半に横位のへら磨きを施す例がみられる。

甕には長胴形と球胴形の二形態がある。長胴形は口辺が大きく、くの字状に外反し、肩部に
段を胴部上半にふくらみを有して底径は小さく底部は突き出るものが多い。また、底部内面は
丸味をもつものと平坦なものがあり、ハケ目の後にへら磨きを施すことが多い。器高が24cmぐ
らいで大小に区別でき、小型のものはへら削りが行なわれた後内外面にへら磨きを施し、底部
内面は丸味を有する例が多い（第23図-7・8）。大型のものは肩部に段を有し、へら磨きは丁
寧に施される（第23図-9・10）。球胴形は胴部中央の張り出しが顕著である。大型のものは口
辺の外反度がきつく、底径が小さく突き出しを有し、胴部内面はハケ目、外面がハケ目の後で
へら磨きを施す（第23図-12）。小型のものは口辺の外反度が緩く、内外面ともにハケ目の後に
へら磨きを施す例が多い（第23図-11）。

甌は、無底式のものがあり、口径は器高より大きく、底径に対して3倍以上の広がりをも
有する。肩部に段を有するのは長胴甕と同様であるが、内外面のへら磨きはより丁寧
に施されている（第23図-6）。

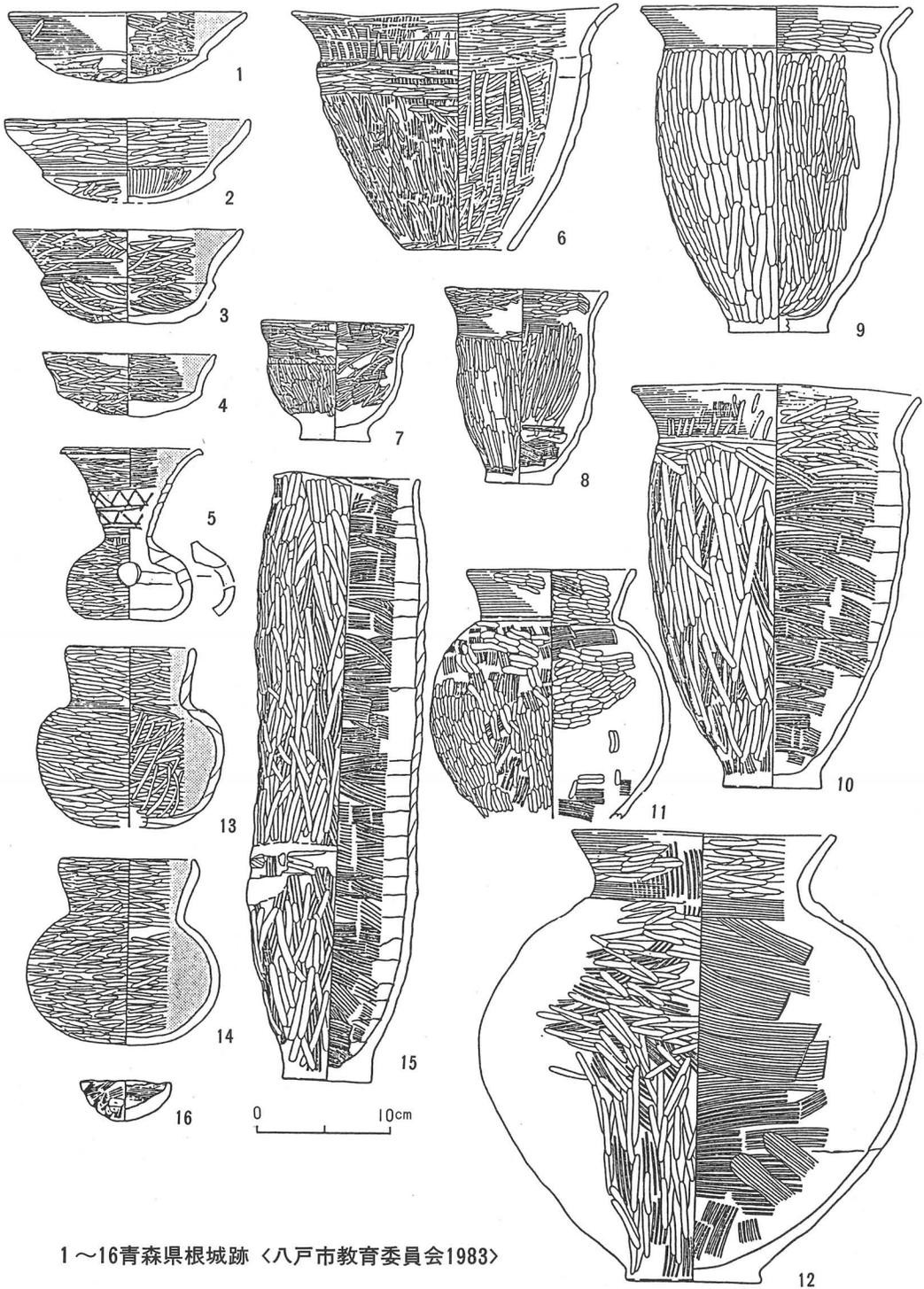
壺は、器高14cm前後のものも多く、頸部に段を有するものとなないものがあり、頸部から口
辺にかけての外反度は少ない。内外面ともにへら磨きは丁寧に施され、内面を黒色処理し
ている（第23図-13・14）。

罍は、丸味の強い胴部に大きく開いた口頸部が付き平底を呈する。口縁部は外側に反って下
部につまみ出され、頸部には鋸歯状沈線文が2段施され、胴部中央に孔がある。全体は丁寧
にへら磨きが施され、内外面に黒色処理がなされている（第23図-5）。

これらの他、特異な器種として筒形土器と手捏ねり土器がある。前者は器高45cmの長さで底
部が突き出す円筒形である。外面はハケ目の後にへら磨き、内面はハケ目のみの仕上げがな
され、底面には木葉痕とハケ目がみられる（第23図-15）。後者は、外面がへら削りとハケ目
のものである（第23図-16）。

以上の土器の特徴をまとめると、各器種はすべてロクロ未使用のもので、坏は丸底で胴部下
半から口辺にかけて外反気味の立ち上がりを呈し、内面を黒色処理する例が大多数である。
長胴形の甕は、口辺部の外反度は緩いが胴部上半でのふくらみが認められ、球胴形とともに底径

第23図 7世紀の土器



1～16青森県根城跡〈八戸市教育委員会1983〉

は小さい。坏・甕・壺などの各器種におけるへら磨きは極度に発達し、丁寧な器面仕上げを行っている。

これら根城東構地区の土器は、現在のところ7世紀後半に位置づけられると考えられるが〔後に宇部は周辺地域土器の比較から7世紀前葉～7世紀中葉と位置づけている〕、^(注5)県内における土師器の初現の問題と深くかかわっているため、今後の調査に期待する部分が多い。特に青森県の場合は、南からの文化伝播とともに北からのそれに注意を払う必要があり、鹿島沢古墳群の形成年代とともに検討すべき課題である。

〈参考文献〉 八戸市教育委員会 1983『史跡根城跡発掘調査報告書V』

(2)8世紀の土器 (第24図)

8世紀に入ると県内各地で類似する土器群の出土例が多くなる。東北南半でいう国分寺下層式に併行する土器であり、五戸町中ノ沢西張遺跡(2号・3号住居跡)、八戸市根城遺跡(118号住居跡ほか)、尾上町李平II号遺跡(1号・3号住居跡)、黒石市浅瀬石遺跡(6号・19号住居跡ほか)、市浦村十三中島遺跡(採集資料)などが県内の代表的遺跡である〔後に三沢市小田内沼(1)遺跡(1号住居跡)、尾上町下安原李平遺跡(49号住居跡など)が追加されつつある〕。また本時期の様相として、前半は須恵器と土師器の共伴が認められないのに対し、後半になるとロクロ使用土師器の出現前段ということもあり、へら起しの須恵器坏を共伴する例が認められる。

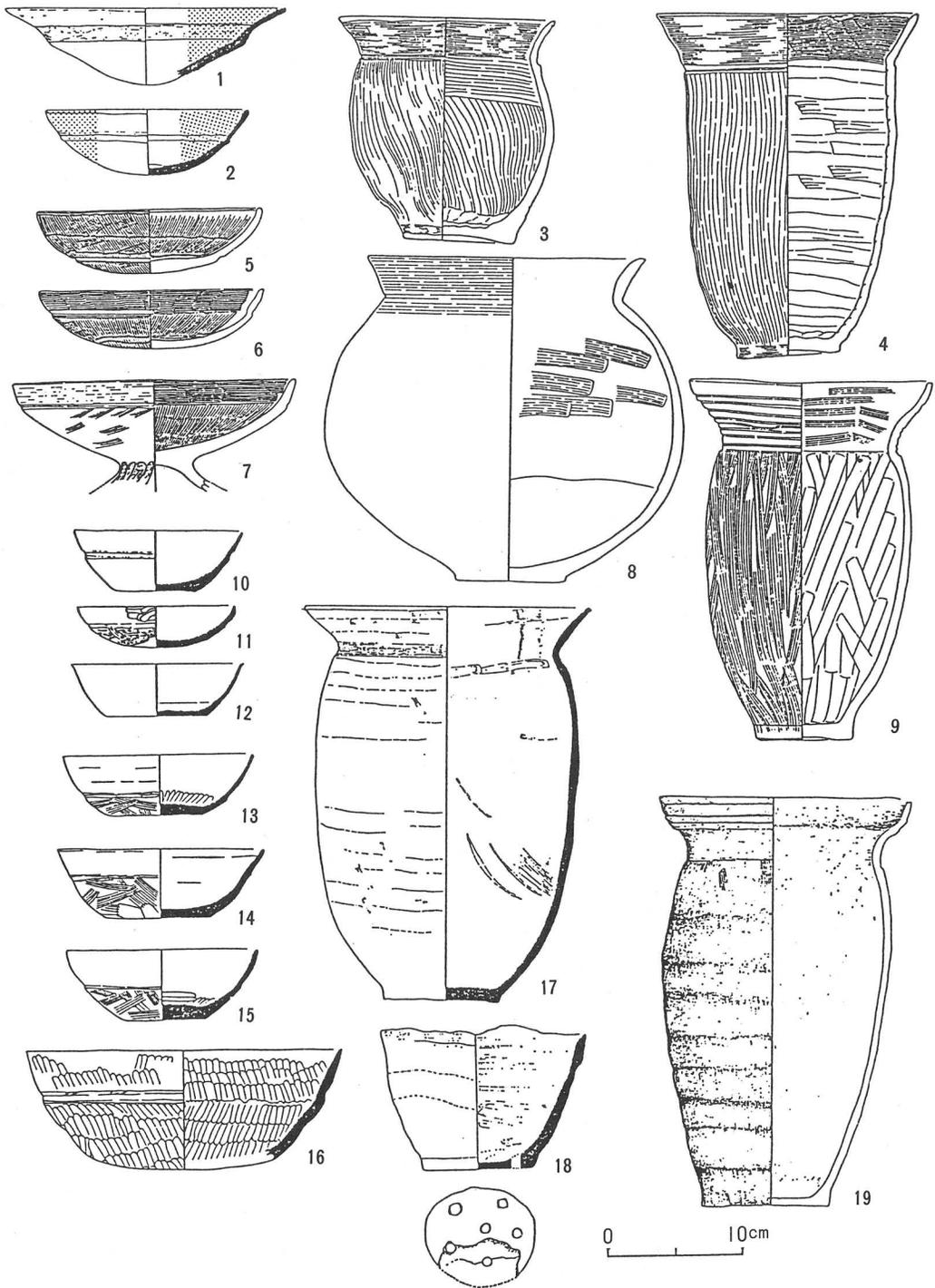
土師器 器種としては、坏・高坏・長胴甕・球胴甕・甑がある。

坏は、丸底で胴部下半および上半に段を有し、口辺は一部に外反するものもある(第24図-1)が大部分は内湾して立ち上がる。内外面のへら磨きは7世紀に引き続き多用され、内面の黒色処理も一般的である(第24図-2・5・6)。しかし後半になると胴部下半の段は次第に上半に移り、段下半のへら磨きの省略化、丸底から平底への変化、器体の小型化が認められるようになる。特に浅瀬石遺跡出土の坏に顕著である(第24図-10～11・13～15)。

甕は7世紀と同様に長胴甕と球胴甕がある。長胴形は、口辺部がくの字状に外反するものと、頸部から口辺にかけて内湾するものがある。前者は、肩部に段を有するが胴部上半のふくらみは7世紀ほど顕著でなく、次第に直線的な胴部となる(第24図-3・4・17)。後者は、外面頸部から口辺にかけて3～8条の沈線あるいは段を施す。どちらも底部内面は平坦なものが多くなり、底の突き出しは7世紀のように著しいものは少ない。器面の仕上げは、頸部から口辺にかけて横方向に指ナデ、胴部外面を縦位にへら磨きするものが多い(第24図-9・19)。球胴形のもの、口辺部がくの字状に外反し、胴部の張り出しは中央部下位に位置するものが多い。器面の仕上げは口辺部を横に指ナデ、胴部外面をへら磨きしている(第24図-8)。

高杯は、坏形土器の特徴を踏襲し、ハの字状に広がる脚部を有する。脚部上半は縦位のケズリやハケ目、下半は横位の仕上げが施され、一部に透し窓を有する例も認められる(第24図-7)。

第24図 8世紀の土器



1～4 中ノ沢西張 5～9 同十三中島 10～18同浅瀬石 19同李平Ⅱ号 (12のみ須恵器) <1～4 桜田隆1976、5～9 成田誠治・鈴木克彦1977、10～18古市豊司ほか1976、19葛西励1980>

壺は、器高10cm前後で胴部は球状を呈し、口辺部がくの字状に外反して広口となる。胴部から底面にかけてハケ目がみられ、底は平底である。

他の器種としては浅鉢に近いものがあり、内外ともにへら磨きを多用し、胴部中央に段を有するのは坏形土器の影響であろうか（第24図-16）。

須恵器 坏は、平底でへら起し、土師器より底径が大きく器高の低いものが多い（第24図-12）。甕・壺については、現在のところ明確な土師器との共伴関係を認めることはできないが、須恵器坏の存在から出土する可能性は否定できない。〔本期の須恵器は近年北陸産と推定される搬入品が多くみられるようになり、器種も坏だけでなく壺の出土が確認されつつある。〕

以上の土器の特徴をまとめると、坏は胴部下半の段が次第に消滅してゆき、それとともに丸底から平底へと移行して小型化の傾向が認められる。7世紀の段階で盛行するへら磨き仕上げは次第に減少して、有段の坏については内面および段上半にのみ施され、下半は磨きを省略するものが多くなる。長胴甕は胴部上半のふくらみが緩くなり、底径が大きくなって安定した平底になってゆく。口辺部の外反度は7世紀段階より傾斜を増し、頸部から口辺にかけて数条の沈線を有するものも認められるようになる。さらに、へら磨き仕上げが減少して、外面の仕上げを省略する例が多くなる。他の器種にあっても、後半になるとへら磨き仕上げは減少して簡略な仕上げを施すものが増大し、ロクロ成形を主体とする土器群に移行してゆく。

〈参考文献〉 桜田隆1976 県埋文報第28集 『五戸町中ノ沢西張遺跡古街道長根遺跡』

古市豊司ほか1976 県埋文報第26集 『浅瀬石遺跡発掘調査報告書』

(3) 9世紀の土器（第25図）

9世紀になると、土師器に伴い須恵器が少量出土するようになり、一般的にロクロ成形の器種が多くなる。土師器の器種としては、坏・長胴甕・埴といわれる広口鉢があり、以前にあった高坏・球胴甕・甎・壺などはほとんどみられなくなる。須恵器は、坏・甕・壺の器種が現われる。また後半になると須恵器製作の影響を受けたと考えられる赤焼土器〔須恵系土器と同義で使用していたが検討の要あり〕といわれる土器群が出現し、土器製作技術面でも進展が認められる。

県内での主要な遺跡としては、黒石市浅瀬石遺跡（8・31号住居跡）、八戸市和野前山遺跡（1号住居跡）、八戸市根城遺跡（108号住居跡ほか）、浪岡町松元遺跡（15号住居跡）などがあり、県内全域に分布がみられる。

土師器 坏は、ロクロ成形で底部は糸切および静止糸切の平底である。内面は黒色処理するものも多い（第25図-1～3）。8世紀の段階でみられた胴部の段は、前半期には若干内面に痕跡を残すかほぼ消滅する。その過渡的段階として、外面口辺部直下に一部分へら磨きを施す例や、底部内面に縦位の磨きを施す例（第25図-18）などがみられる。器型上の特徴としては器高に対する底径の比が縮小する傾向があり、いわゆる碗形の器型が多くなる（第25図-9・10）

・18～22)。

甕は長胴甕の器型だけで、前半は頸部から口辺部にかけての外反が広く大きいのが、後半になると短くそり返えるような形状のものが多くなる(第25図-24)。頸部から口辺部にかけては、8世紀でみられた沈線状のものから段を有するものに変化し、2～3条と数は減少する(第25図-16)。長胴甕の中には器高30cm以上の大型のもので、20cm以下の小型の2種に分類できる。成形上から言えば前者は巻き上げが多く、後者はロクロ使用のものがみられるようになる(第25図-23)。器体表面の口辺部は横位のヘラナデ、胴部は縦位のヘラナデを施す例が多く、内面の仕上げは次第に省略するようになる。

塀については8世紀以前の段階ではみられなかった器種であり本時期を特徴づけると考えられるが、量的にそれほど多いというわけではない。ロクロ成形により内面を黒色処理し口縁はやや外反、底には低いながらも台を有している例(第25図-5)もあるが、一般的にみられるものは巻き上げ成形後に口辺は指ナデ、胴部内外面はヘラナデを施す例で、煮沸用に使用されたと推定されている。〔塀の用途が煮沸用以外の饗膳用にも使用されている可能性が強いので大型坏類の系譜に入れることも検討している。そのため本時期からの特徴的器種と考えるには十分な資料をそろえていない〕

他の器種としては、円筒形の深鉢型土器などがあり、巻き上げ成形後外面底部に縦位、内面上半にヘラナデを施している(第25図-17)。

須恵器 坏は、ロクロ成形で底部は糸切りとヘラ起しが認められる。切離し後は底部立ち上がりへラ状工具でナデつけるものもみられる(第25図-4・11)。

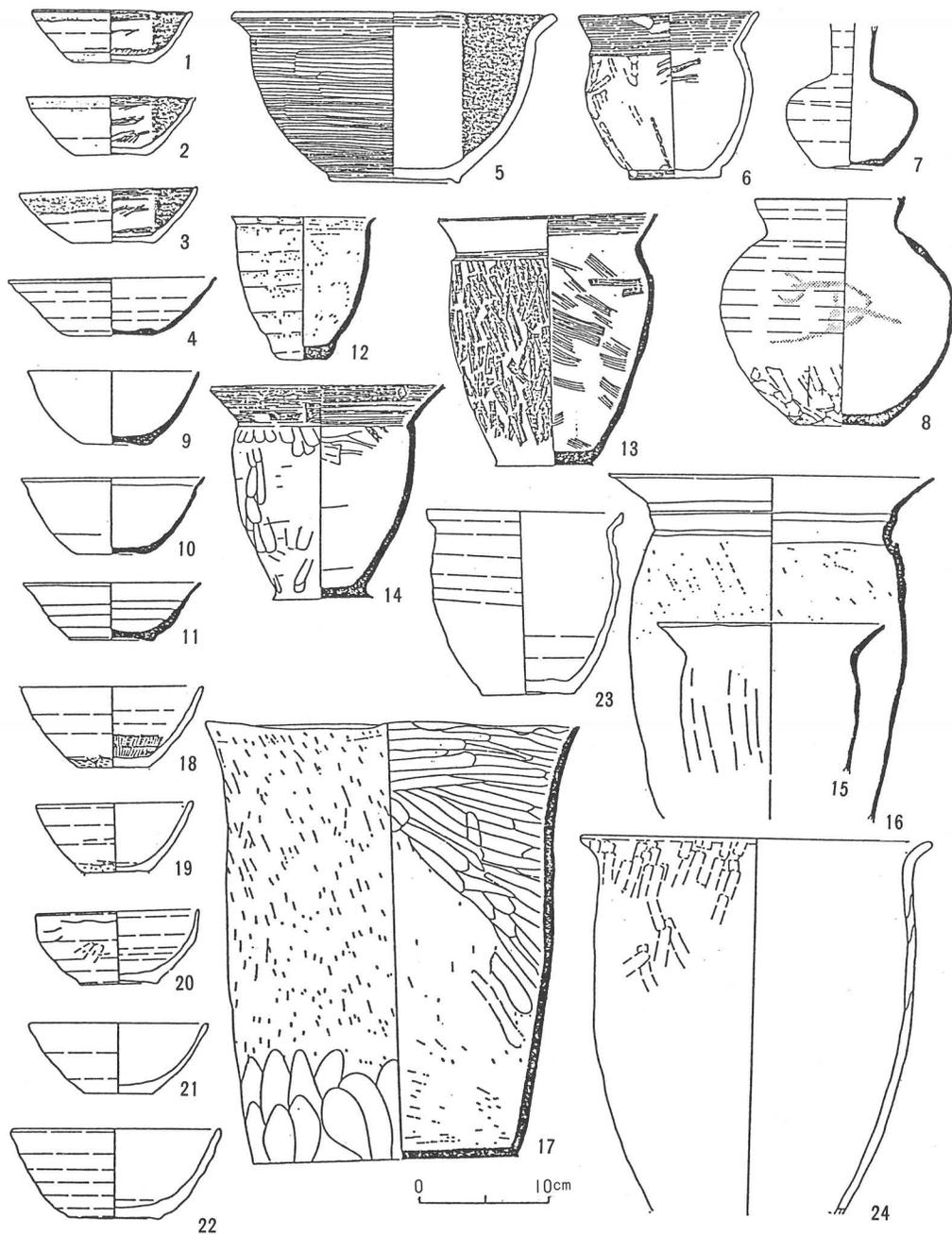
甕は、内面に叩き具による叩き目の認められる例がある。しかし類例が少なく詳細は不明である。

壺は、広口と長頸の2種類があり、どちらも底部から胴部中央、胴部中央から肩部、肩部から口辺部と3段階による成形がなされ、底部から胴部にかけてはヘラ削り、ヘラナデが施されている(第25図-7・8)。

9世紀の土器の特徴をまとめると、第一に前代まで一般的である巻き上げ成形からロクロ成形への変化、第二に土師器と須恵器の共伴をあげることができる。これは東北部における最初の土師器分類を提唱した桜井清彦の、土師器第I型式から同第II型式への移行という大枠と符合するものである。しかしながら、ロクロ技法の導入が土師器生産の転換期となることについて、明確な編年の基盤および集落構成のあり方から不明な点が多く、今後に残された課題である。さらに土師器に共伴する須恵器についても、現段階では県内における窯で生産されたという根拠は薄いので、須恵器の搬入路を発見することも急務の課題となっている。

〈参考文献〉 桜田隆ほか 1976 県埋文報第26集 『浅瀬石遺跡発掘調査報告書』
白鳥文雄 1984 県埋文報第82集 『和野前山遺跡発掘調査報告書』

第25図 9世紀の土器



1～8 青森県和野前山 9～17同浅瀬石 18～24同松元 (4・7・8・11は須恵器) <1～8 白鳥文雄1984、9～17桜田隆ほか1976、18～24杉山武ほか1979>

(4)10世紀の土器（第26図）

10世紀になると県内における調査例も増大し、資料も多くなる。特に須恵器の絶対量が多くなることは、県内における持子沢系須恵器窯・前田野目系須恵器窯等の製品が各遺跡に供給されていることによる。

代表的遺跡としては青森市近野遺跡（78号住居跡ほか）、黒石市板留(2)遺跡（7号住居跡）東通村アイヌ野遺跡（2号住居跡）、青森市三内遺跡（44号住居跡）、青森市螢沢遺跡（5・9号住居ほか）などがあり、土師器と須恵器の相伴関係は明瞭となる。器種としては、土師器に坏・長胴甕・埴があり、須恵器には坏・鉢・壺（長頸・広口）・甕がみられる。

土師器 坏はロクロ成形、平底で胴部にやや張りのある碗形の器型が主体を占める（第26図-1～3）。内面を黒色処理したり放射状に磨きを施す例（第26図-8・9）あるいは底部上端にへら削りを施す例（第26図-8・10）も継続的に製作されているものの、いわゆる赤焼土器といわれる須恵器製作の影響を受けた坏が増大する。また、出土量は少ないものの内面黒色処理後、放射状の磨きを施し、底に高台を貼り付ける例（第26図-19）も認められる。これらの坏には時折外面胴部下半を中心に墨書文字の施された例があり、「大」「田」「寺」などの文字を確認できる。

甕は、9世紀段階までみられた頸部の有段がほぼ消滅し、口辺は狭くくの字状にするどく外反するようになる。器高30cm前後のもの15cm前後のものに二分でき、前者は巻き上げ成形後内外面にへらナデを施す例（第26図-7・12・16）が多く、後者はロクロ成形が多くなる（第26図-4・5）。底は平底で、胴部上半にややふくらみを有する例が多く、底部までの張り出しも比較的安定した形となる。

埴は、粘土紐による巻き上げ成形後、口縁を平端に成形し、内外面をへらナデ仕上げにすることが多い。底は平底ないしは丸底である（第26図-6）。

須恵器 坏は、ほとんどがロクロ成形であり、口辺部がやや外反する例が多い。また重ね焼きの痕跡とされる火ダスキを放射状に残す例もあるが、須恵器本来の暗灰色の色調だけでなく黄灰色・黄白色など各種の色調を呈するものもある。これらの坏には胴部下半から底にかけてへら記号が認められる例が多く、現在20種類余りが確認されている（第26図-11・14・15・18）。

甕は、器高50cm、胴部径40cm前後の大型の製品が多く、口辺は外反しながら立ち上がり、外面は頸部下半から底まで叩き痕を有し、底は丸底のものが多い。成形にあたっては底部から胴部までが巻き上げ、頸部から口縁までがロクロ成形した後に接合し、接合部の叩き目は格子状になっていることが多い。頸部にはへら記号を施す例（第26図-17）がある。

壺には、長頸壺と広口壺の二種類がある。長頸壺は、ロクロ成形後、肩部と底部で接合している。外面の仕上げは、頸部はロクロ、肩部から底部にかけてはロクロとへらナデの併用・底はへらによるが一部に菊花状痕も認められる、底は平底、上げ底、高台状のものなどがある。

頸部あるいは肩部上半にヘラ記号を有する例が多い（第26図-13）。広口壺は、ロクロ成形後、外面胴部下半をヘラナデし、胴部上半にヘラ記号を有する例が多い。胴部の張り出しは下半で顕著になり、小型甕に近い器型となるが長頸壺に比較して出土量は少ない（第26図-20）。

10世紀の土器の特徴をまとめると、須恵器の増大と土師器における仕上げの簡略化を指摘できる。坏型土器についても、前代からの技法を踏襲した土師器が残るものの、相対的には須恵器坏および須恵器製作の影響を受けたロクロ成形の赤焼土器が大半を占め、器型も碗形のものと同半以降は皿形に近い器型に分化する傾向を示す。

須恵器については、持子沢系窯跡と前田野目系窯跡の製品が主体を占めるものの、いずれにも属さない須恵器も出土していることから、各地域における供給地の同定が課題となっている。また上記窯跡の存続年代がいつごろまでであったのか、現状では把握できない状況にあり、今後に残された大きな問題である。

〈参考文献〉 三浦圭介 1977 県埋文報第33集 『近野遺跡(Ⅲ)三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』

桜田 隆 1978 県埋文報第37集 『青森市三内遺跡』

藤田亮一 1979 『蛸沢遺跡』

(5)11世紀から12世紀の土器の概略

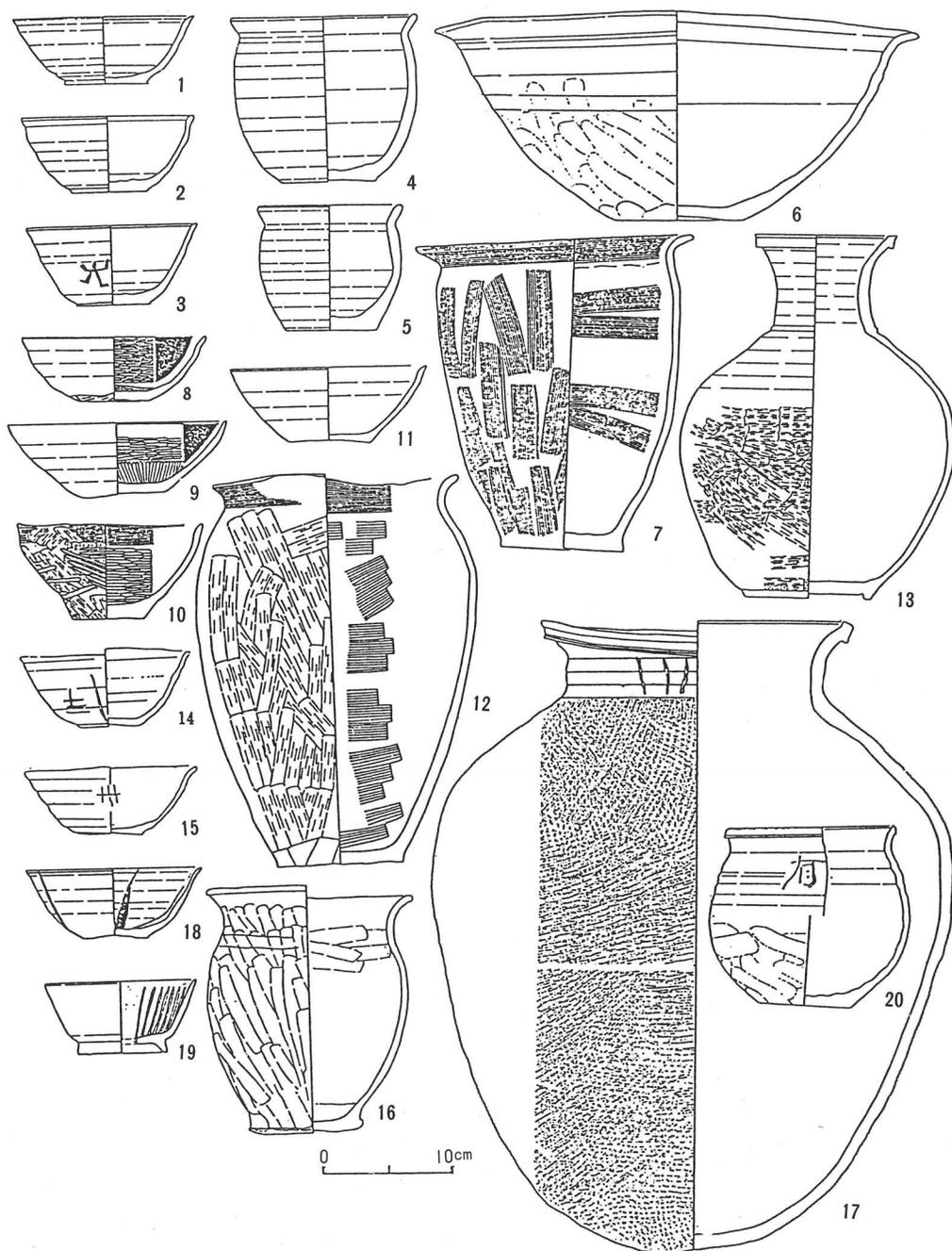
上述した編年試案に付加する形で11～12世紀の土器を考えてみたい。三浦圭介は11世紀前半の特徴を神明町遺跡4号住居で出土した皿形土器を一つのメルクマールと考え東北南半の須恵系土器に対比させようとした。この皿形土器の出現がいかなる原因によるものか筆者もまだ理解できずにいる現状ではあるが、近年10世紀代の年代観を有する「灰釉陶器」を県内で散見するようになった。沖附(1)遺跡、旧大光寺城(2)遺跡であり、熊野堂遺跡でも類似資料が発見されているようである。今かりに皿形土器が灰釉陶器の影響下によって出現したと考えると、皿形土器の出現を10世紀代以降のことと考えなければいけないことになる。三浦圭介氏に直接聞いた所では耳皿（皿形土器の変形）も灰釉陶器の影響ではないかという指摘もあり、皿形土器・耳皿の出現は灰釉陶器の存在を抜きに考えられないのではなかろうか。また「須恵系土師質土器」の名称を提唱している福田健司は、10世紀まで須恵器を模倣していた土器の系譜が11世紀以降は木器・緑釉陶器・山茶碗を模倣するように変化するという。

青森県内において、該期の遺跡から出土する陶磁器をみると、蓬田大館遺跡から出土・表採した中国製白磁と青磁が11世紀～12世紀前半の年代観を有し、県内では最も古い陶磁器ということになり、高館遺跡出土の白磁は12世紀の年代観が推定されている。さらに浪岡城跡出土白磁四耳壺は12世紀後半に比定され、平泉遺跡群出土かわらけと類似した土器が相伴している。

（中崎館出土陶磁器も相伴する遺物から12世紀後半の年代が推定されている。報告書未刊）

以上の事を考えながら、11世紀と12世紀をみると、10世紀後半から11世紀にかけての資料と

第26図 10世紀の土器



1～7 青森県近野 8～13同アイヌ野 14～17同三内 18同板留(2) 19・20同蛭沢 (11・13～15
 ・17・18・20は須恵器) <1～13・18三浦圭介1977・1980・1982、14～17桜田隆1978、19～20藤田
 亮一1979>

(注14) (注15)
して神明町遺跡4号住居跡、羽黒平遺跡3号住居跡の遺物をあげることができる。神明町遺跡4号住居跡では、土師器の器種として皿・碗・甕(大小あり)があり、須恵器の器種として大甕と長頸壺が認められる。羽黒平遺跡3号住居跡の遺物では土師器の器種として皿・高台付皿・碗・甕(大小あり)、須恵器には長頸壺がみられる。いずれも須恵器は甕・壺の貯蔵形態だけとなって坏がみられなくなり、土師器が食膳具の主体を占めるようになってきている。

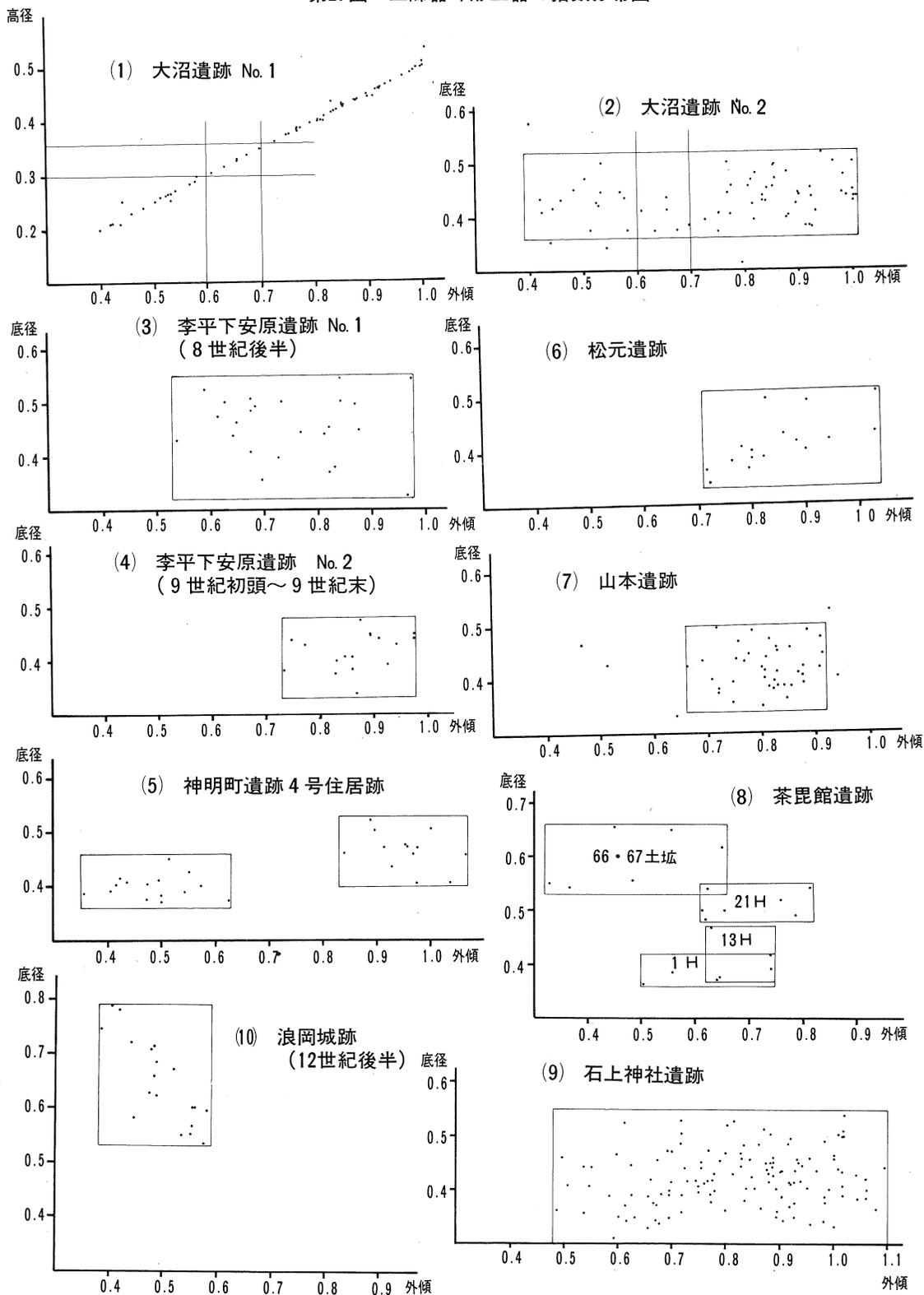
(注16)
これに対して10世紀代の主体的年代観を有した山本遺跡の出土遺物を見ると、須恵器坏(火ダスキを有する例が多い)は一定量が認められ、須恵器甕・壺も一定量の出土がある。このことから皿形土器の出現と須恵器坏の減少は相関関係を有した一連の流れとみられ、蓬田大館遺跡では須恵器に長頸壺と甕の破片しかみられなかった事も陶磁器の年代観と対応している。ただし、前述した皿形土器と耳皿の関係については、山本遺跡においても耳皿が2点ほど出土していることから若干の時間差を有して先出するのかもしれない。このような10世紀後半から11世紀にかけての変化とともに、11世紀中頃から12世紀前半にかけての変化は、把手付土器や羽釜の出現と擦文土器の相対量の増大、さらに須恵器の消滅という現象で理解できると考えられる。

把手付土器と羽釜の出現が何時からかという問題とともに、それらの土器がどのような機能で使われたのかという点も加味して考える必要がある。羽釜は煮炊具と考えてよいが、把手付土器については今だに明確な解答がでていない。さらに少例ではあるがこの頃から内耳土器も散見されるようになり、煮炊具の主流が土器から鉄鍋に移行しつつある現象を想定することが可能となる。(注17)その上で食膳具としての碗・皿は、11世紀以降の遺跡で特に出土例が多くなる木器に移行している可能性も否定できず、10世紀代の遺跡と比較すると碗・皿の相対量は激減の印象を受けるほど少なくなってくる。ただ少なくなるものの、土器食膳具の系譜はある程度保持されており、須恵器のような消滅に至る過程とは相異が認められる。

今回、食膳具としての碗・皿について大沼遺跡の法量を考えながら、他遺跡出土例と比較する事をした。第27図がそれであり、この分布状況から次の事が推定された。

- (1)ロクロ成形の前段階である8世紀後半では、外傾指数と底径指数がそれぞれ広い分布域を示す(第27図-(3))のに対し、ロクロ成形が主体となる9世紀になると碗形の法量が規格化され(第27図-(4))はじめ、10世紀のある段階(須恵器坏が大きく生産される頃)では最も規格的な碗形となる(第27図-(7))と考えられる。
- (2)ところが、10世紀のある段階では(山本遺跡例)、規格化とともに皿形への分化傾向が現われ始め10世紀後半から11世紀にかけて皿形と碗形への二極分化が進む(第27図-(5))と考えられる。
- (3)さらに、この二極分化は次第に碗形の量を減じながら皿形の方に進み(第27図-(8))、12世紀後半には皿形だけに移行してしまう(第27図-(10))と考えられる。

第27図 土師器環形土器の指数分布図



この分布図の正否は別にして、食膳具に関する変化の一端を推定する意味で、ロクロ成形無調整坯を製作する集団における法量変化が、ある程度時間軸の中で変化することは感知できる可能性が高い。今後、時間を費やししながら土器変遷の過程を追求してみたいと考えている。

(6)大沼遺跡出土土器の編年的位置

大沼遺跡から出土した土器を、どの時期と考えるか上述した内容を基にして考えてみる。

まず、出土土器の内容として土師器皿・碗・甕・窓付土器・壺、須恵器大甕・壺・坯の器種が認められ、施釉陶器に近い製品（壺）も存在した。このような器種の組み合わせと類似した土器^(注18)を出土している遺跡として当初石上神社遺跡を比較していた。ところが石上神社遺跡の場合は、把手付土器・羽釜・擦文土器等の11世紀中頃から12世紀前半の土器も出土し、かなりの時間幅が存在する事に気付いた。第27図-(9)で法量分布をみると、外傾指数領域が大沼遺跡に比較して0.1ほど高位に位置し、底径指数領域も幅が広がっている。さらに大沼遺跡で皿と碗の区分に使用した外傾指数0.6~0.7の周辺に分布密度が多くなり、法量の様相に違いが認められる。

皿と碗が二極分化した状況で出土した神明町遺跡と比較した場合、碗の法量は大沼遺跡が低位に位置し、皿の法量は高位に位置するところから、二極分化の前段階に大沼遺跡をあてはめることができると考えられ、若干の須恵器坯が出土していることも前後関係の上からは容認できると考えられる。また、山本遺跡と比較した場合、底径指数の幅は近似しているのに対し、皿形の絶対量が増大する外傾指数領域で明確な相違が認められ、大沼遺跡は山本遺跡に後続するものではないかと推定される。

以上の結果から、大沼遺跡は10世紀後半から11世紀前半の時間幅に編年されるべきと考えられ、今後他の重要な遺跡と比較しながら細かい時間変遷を考察してゆきたいと思う。

〈参考文献〉

- (注1) 桜井清彦 1958 東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題 『館址』
- (注2) 三浦圭介 1982 青森県における奈良・平安時代の土器編年一覧 『青森県考古学会研究発表資料』
- (注3) 宇部則保 1989 青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として— 『北海道考古学第25輯』
- (注4) たとえば三宅徹也 1988 県埋文報第111集 『李平下安原遺跡発掘調査報告書』
- (注5) 注3に同じ
- (注6) 注2に同じ
- (注7) 成田誠治 1986 県埋文報第100集 『沖附(1)遺跡』
- (注8) 高橋 潤 1988 平賀町埋文報第17集 『旧大光寺城(2)遺跡発掘調査報告書』
- (注9) 宇部則保 1988 八戸市埋文報第32集 『熊野堂遺跡発掘調査報告書』

- (注10) 福田健司 1987 『日野市落川遺跡調査概報Ⅴ』
- (注11) 荒川正明 1987 『蓬田大館遺跡』
- (注12) 成田誠治 1978 県埋文報第40集 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』
- (注13) 工藤清泰 1989 『昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡Ⅹ』
- (注14) 杉山武・他 1980 県埋文報第58集 『金木町 神明町遺跡』
- (注15) 木村鉄次郎 1979 県埋文報第44集 『羽黒平遺跡』
- (注16) 白鳥文雄 1987 県埋文報第105集 『山本遺跡』
- (注17) 宇野隆夫 1989 古代的食器の変化と特質 『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』
- (注18) 工藤泰博 1977 県埋文報第35集 『石上神社遺跡発掘調査報告書』

V まとめ

大沼遺跡の調査は、135㎡という狭い面積の調査であったが検出遺構と出土遺物の内容は津軽における古代史を理解する上で貴重な資料提示をすることができたと考えている。

第一に、遺跡が低湿地に位置しているため、土器というある意味ではポピュラーな遺物とともに当時の生活復元に欠くことができない木製品と動・植物遺存体が出土したことである。平安時代の遺跡調査によって木製品が出土する例は、近年増大してきたと言っても数量的には稀少価値が高く、大沼遺跡で出土した漆塗り椀・曲物・下駄・木錘・箸などは「蝦夷」と呼ばれた辺境(?)の地に日本的文化が根付いていた証拠であり、牛歯の出土によっても水田耕作を基盤とする社会集団が存在していた可能性を特に強くしていると考えられる。

第二に、遺構の中でS X02と呼んだ井戸跡の存在、さらに炭化物を多量に含み土器を一括廃棄したS D11の溝跡などは、社会集団の定住性という面から特に貴重である。井戸を構築する事は社会集団が長期に亘って居住する領域を設定していた事につながり、S X02における木製品や土器の出土状況も単なるゴミ捨て場というより井戸を廃棄する段階で不用となった生活用品を「埋める」行為の所産と考えられなくもない。もしそのような精神的対応があるとするれば、生活儀礼の中で遺構の有する深い意味を理解するように努めなければならないであろうし、土器の廃棄行為に基づく、生活様式の変化等にも注目しなければならないであろう。ただ、おそらくは住居跡等の遺構が未検出であるということで、今後大沼遺跡における集落史的視点が必要となっている。

第三に、出土した土器類に関してみると、須恵器製作の影響を受けた碗と皿および小型甕とともに従来からの土師器製作の系譜上に存在する碗や甕は厳然として伝統色を残して製作・使用されており、汎日本的土器製作の流れと対応するものである。時期的な面は今だ不明瞭な印象を取り去ることはできないものの、10世紀後半から11世紀前半における土器の様相としては若干の地域色は存在しても他地域との交流が盛んであったことを裏付けているように思う。交流という面でいえば上述した木製品・牛歯の出土等から、単に物だけが移動するだけでなく人間や、社会集団の有する技術的な面まで考察の対象となるであろう。

以上、大沼遺跡の調査によって考えられる点を述べ、まとめとする。

(注1) この考え方は八戸市教育委員会の工藤竹久氏の御教示による。

写真図版

PL. 1

(1)調査現場遠景
(東側から)



(2)調査現場遠景
(西側から)



(3)A区全景
(東側から)





(1)B区全景
(東側から)

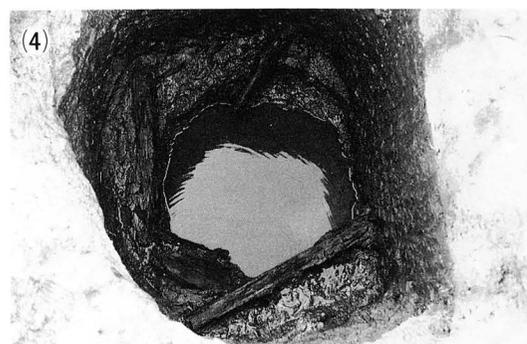
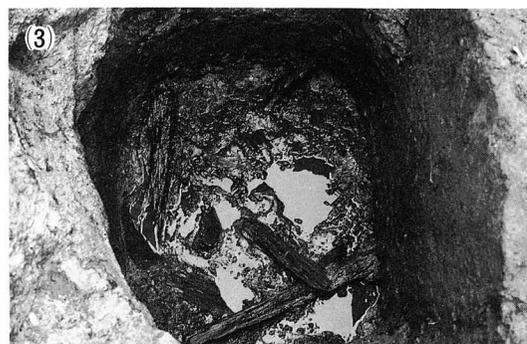
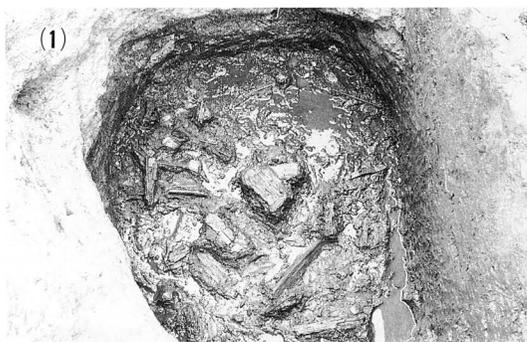


(2)C区全景

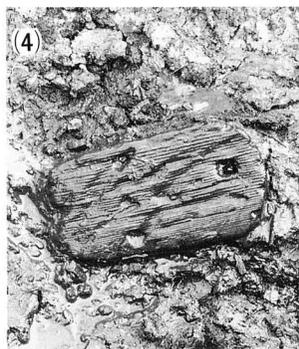


(3)E区全景
(南側から)

PL. 3 S X02の調査

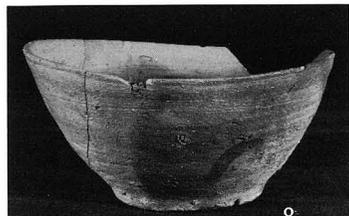
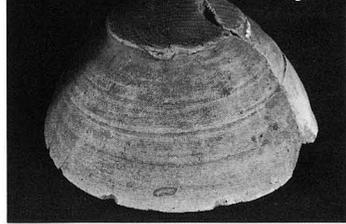
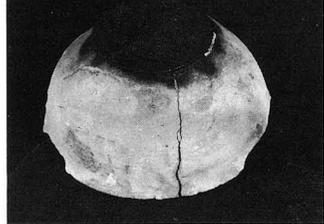
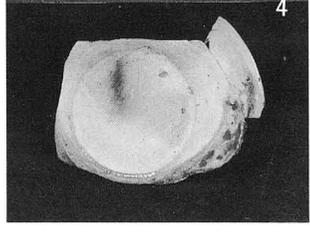
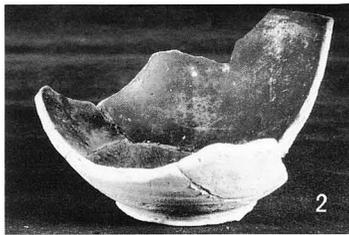
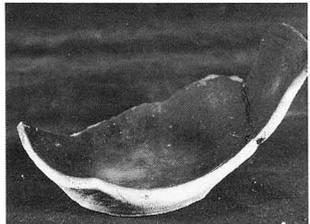
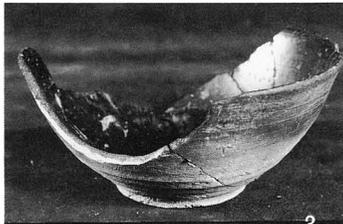


- (1) S X02 遺物出土状態
- (2) " 曲物底出土状態
- (3) " 板等出土状態
- (4) " 完掘状態
- (5) " 漆器碗出土状態
- (6)・(7) S X02 箸等出土状態

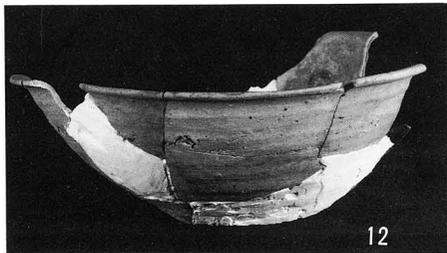
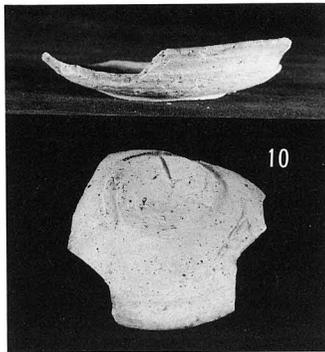
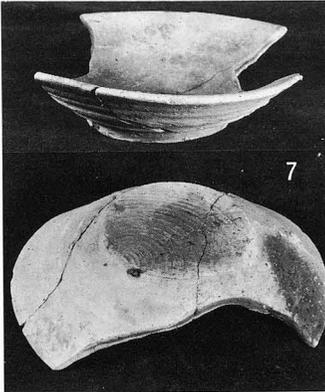
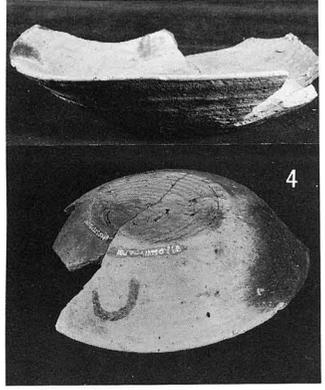
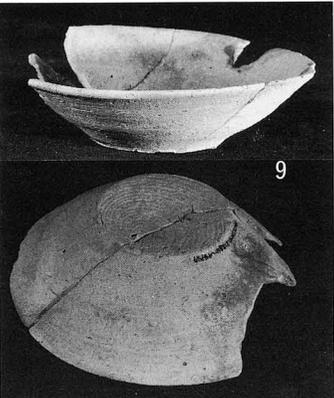
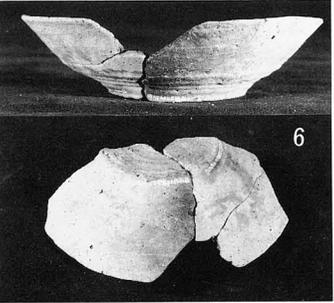
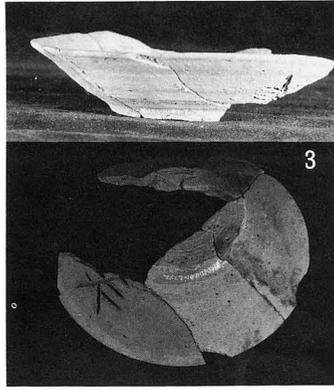
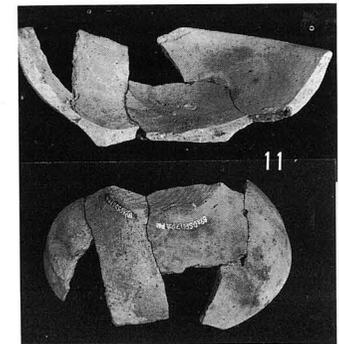
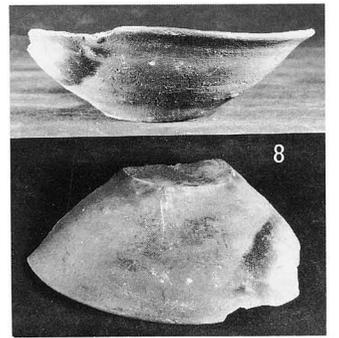
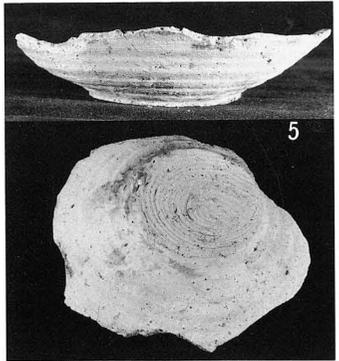
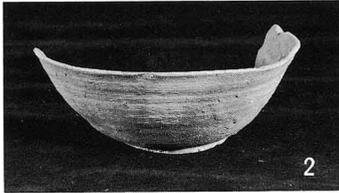
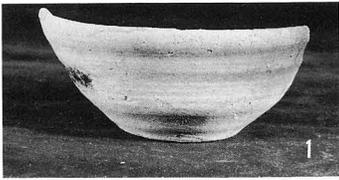


- (1) S D 11 土器出土状態
- (2) " 層序断面図
- (3) " 完掘状態
- (4) " 下駄出土状態
- (5) " 土師器出土状態

PL. 5 土師器坏



PL. 6 土師器皿・埴



PL. 7 土師器參考資料



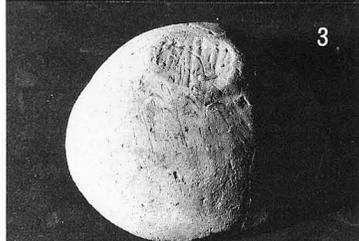
1



2



3



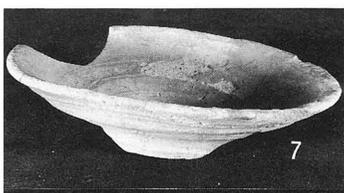
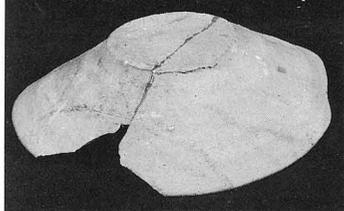
4



5



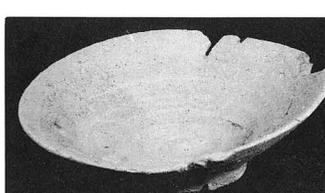
6



7



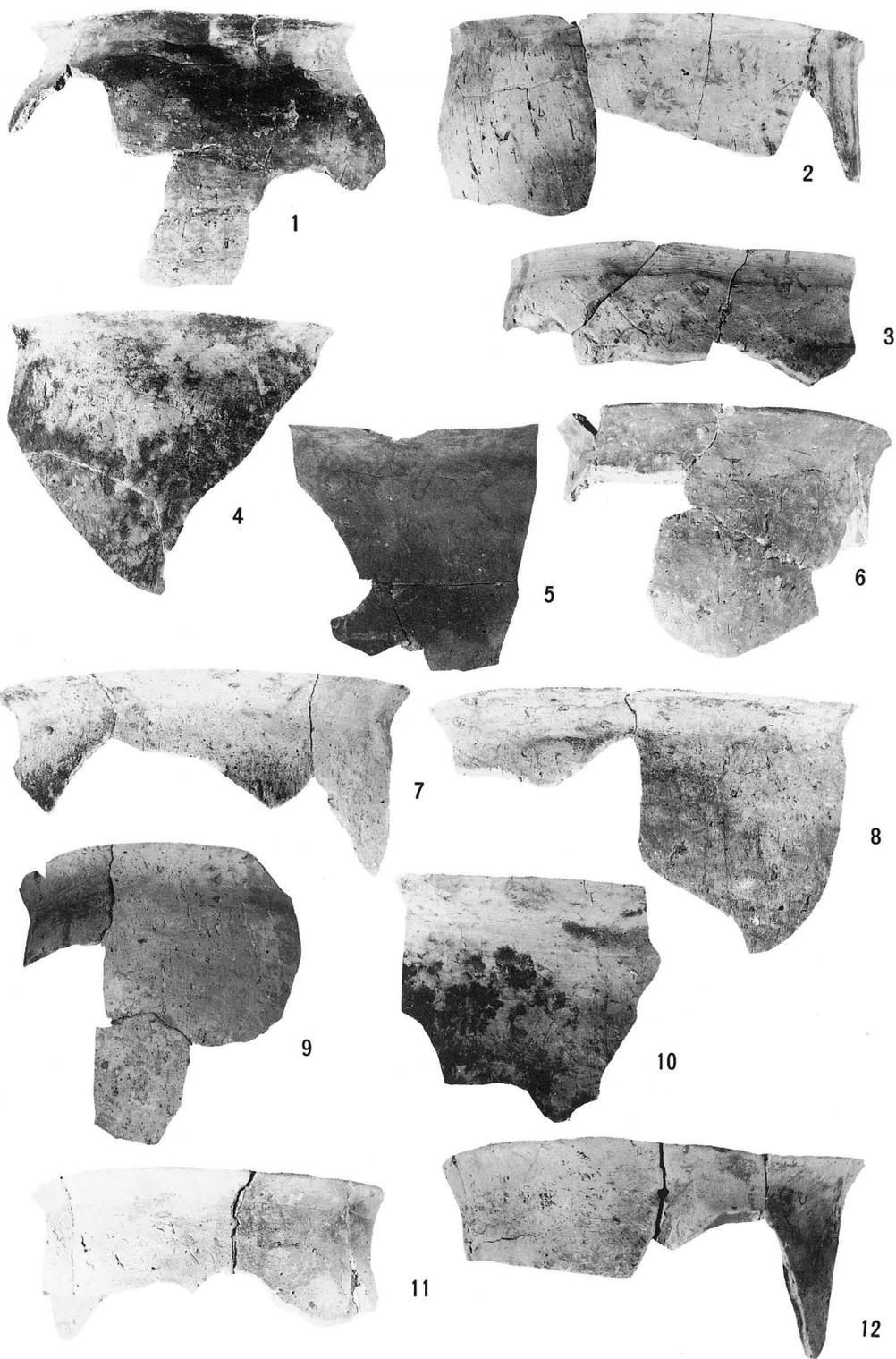
8



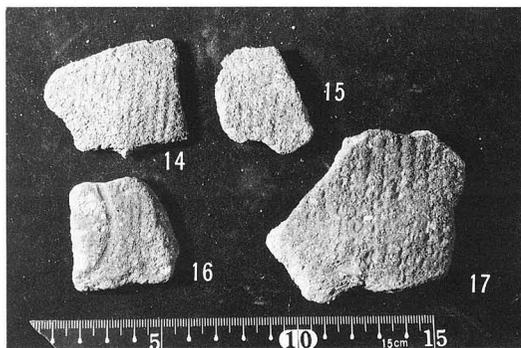
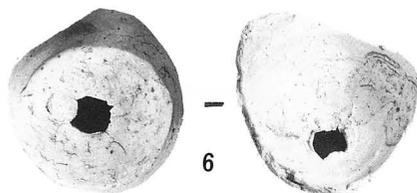
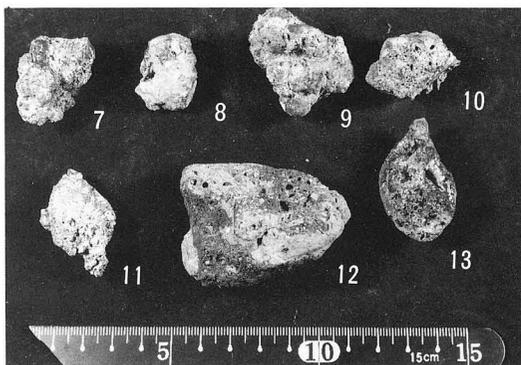
9



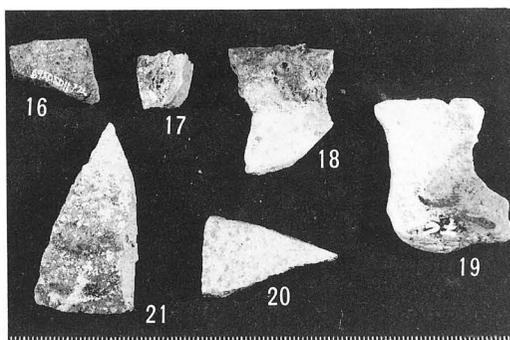
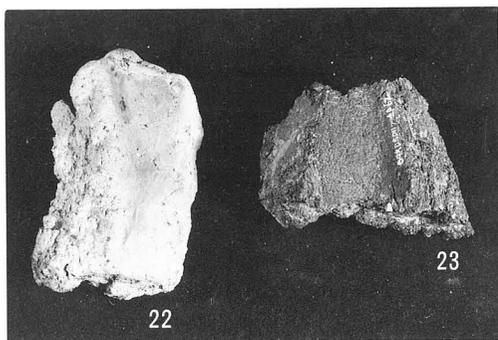
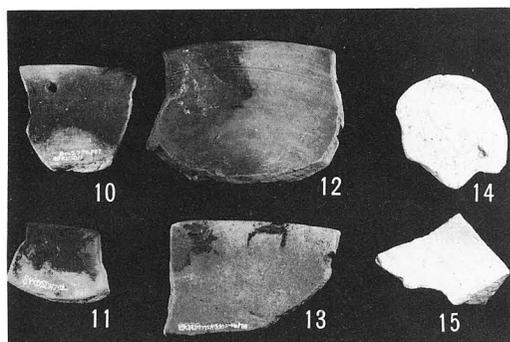
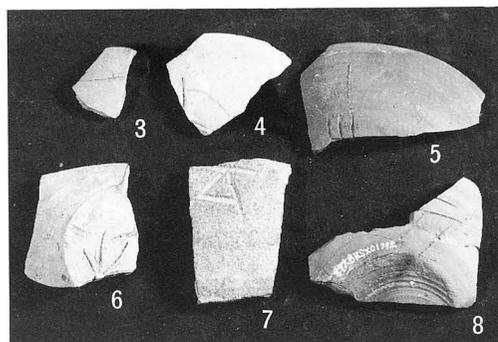
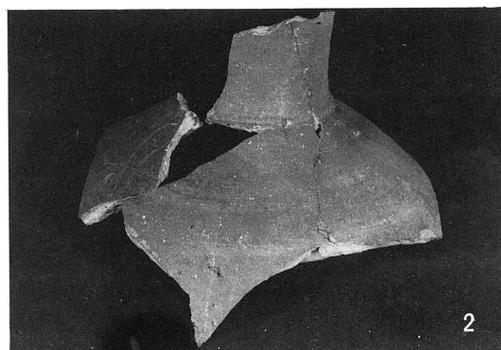
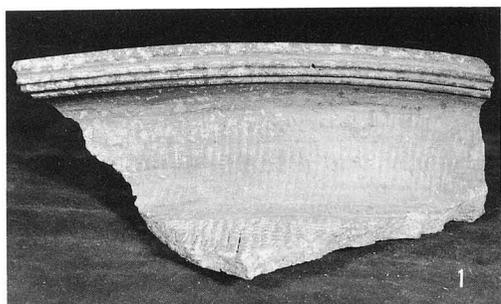
PL. 8 土師器甕



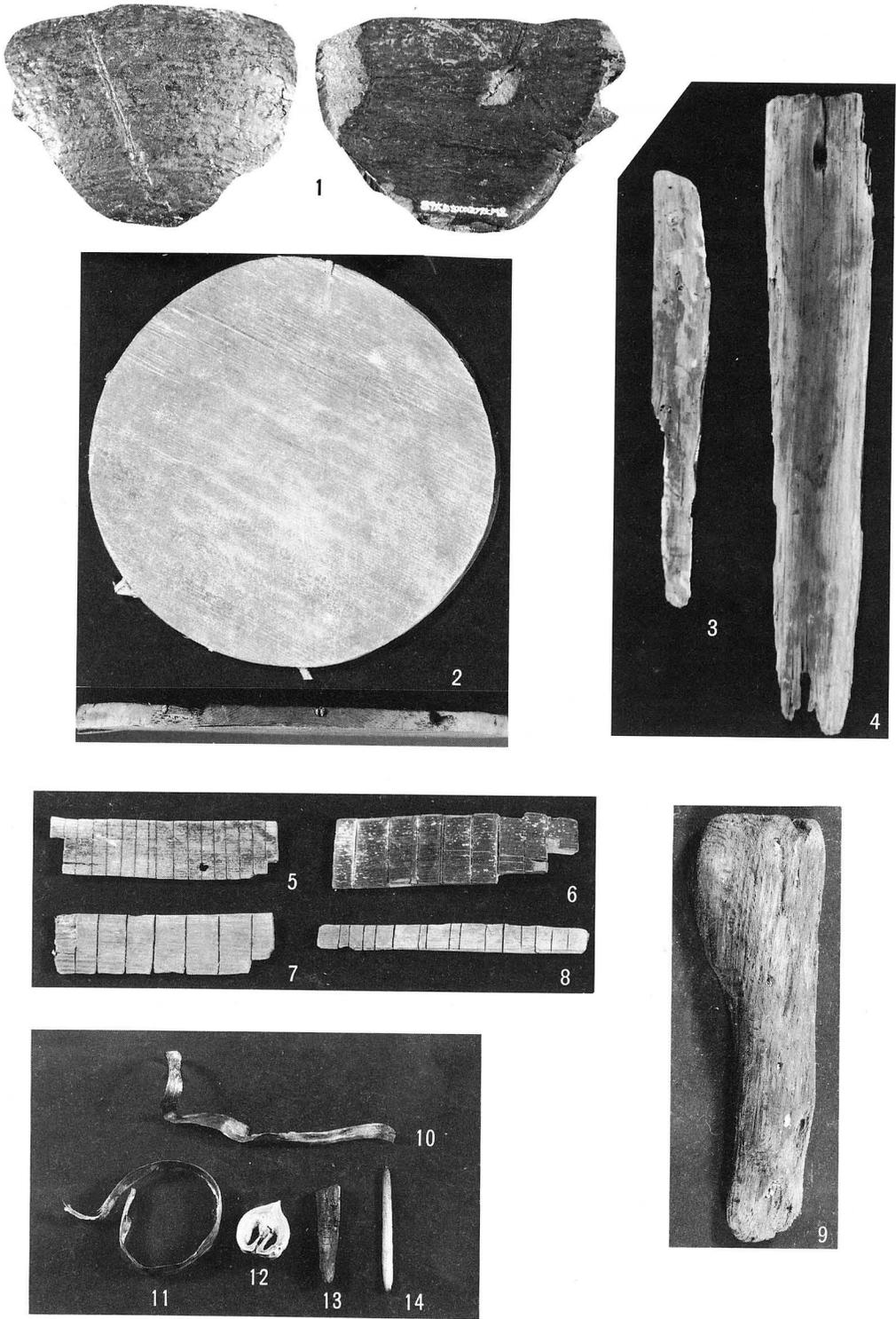
PL. 9 土師器甕・鉄滓・縄文土器・砥石

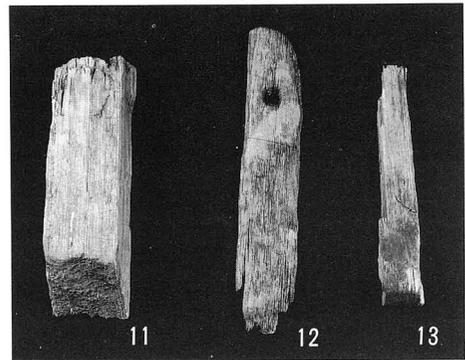
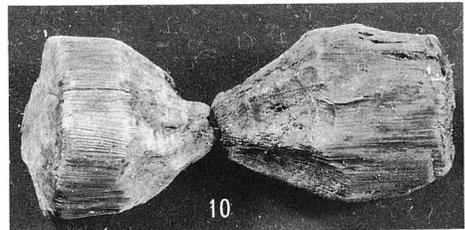
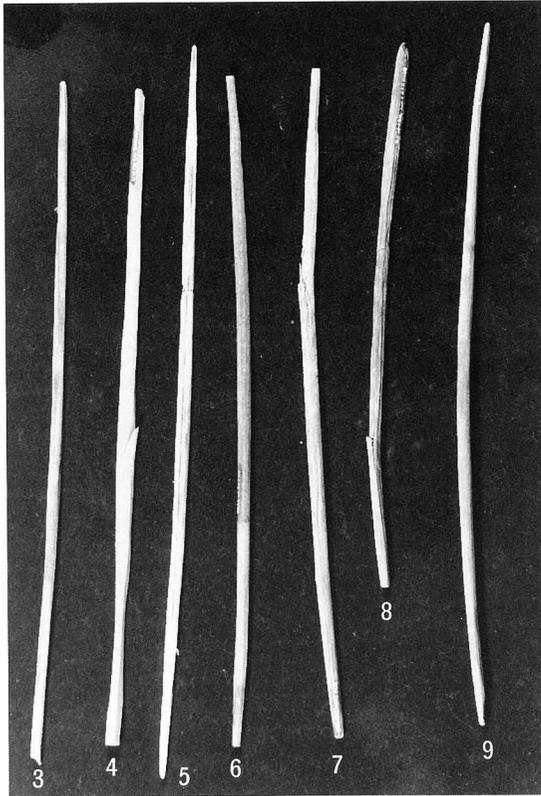
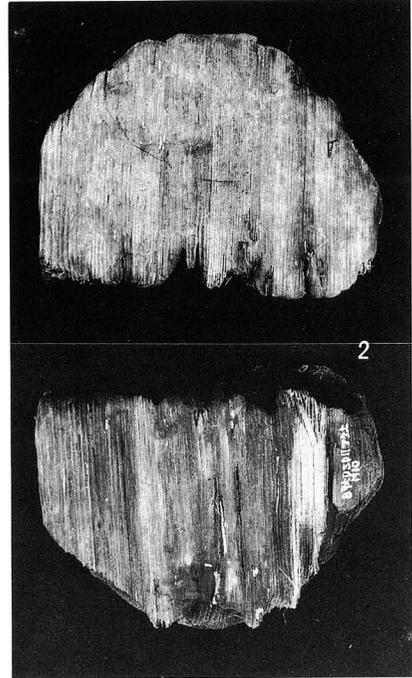
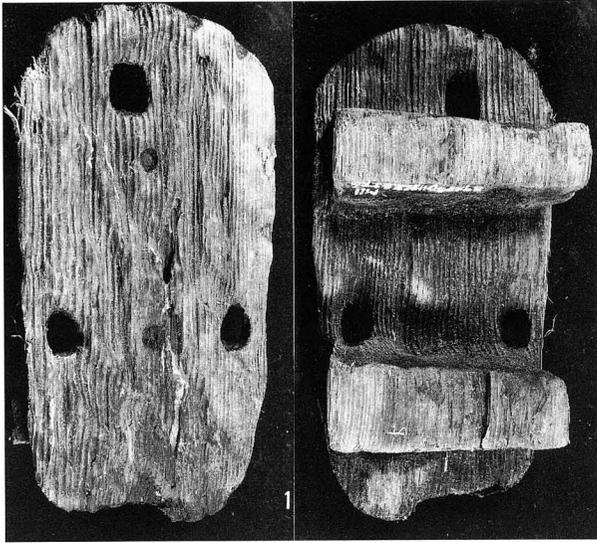


PL. 10 須恵器・土師器・羽口・他



PL. 11 木製品・他





〔特別寄稿〕

大沼遺跡から出土したウシの遺存骨

小林 和彦

溝跡底面付近からウシの1個体分の左側下顎骨破片が出土した。共伴資料は10～11世紀の土師器、須恵器、木製品等である。

本資料は、頬歯が植立した状態の下顎骨体部の破片であり、現状で4つの部分に割れている。頬歯の保存は良好で、第2前臼歯(P₂)から第3後臼歯(M₃)まで、6個全てが残存している。骨質は保存が悪く、歯槽を形成する部分が頬歯に付着するような状況で残されているにすぎない。

第3後臼歯(M₃)は咬耗があまり進行しておらず、歯冠高が高いので、成獣でも比較的若い個体と考えられる。

個々の頬歯は大きく、エナメル質も厚くがっしりしている。4分割されている下顎骨を接合して下顎頬歯列長(P₂～M₃)を計測すると、159mmとなる。これは、八戸市八幡遺跡出土の中世のウシ遺存骨(註1)の同一部位の計測値133.5mmと比較すると20%近く大きな値である。また、わが国在来牛で和牛の元祖といわれる見島牛(山口県萩市)や口之島(鹿児島県)に野生状態で生息している口之島牛の雄と比較しても、かなり大きい(註2)。頬歯列長は、ウシの体格を正しく反映しない場合もあるといわれるが、本資料は、在来牛としては、比較的大形の個体と考えられる。

青森県内では、平安時代のウシの遺存骨は、まだほとんど出土例がない。確実な例としては、八戸市熊野堂遺跡で平安時代の溝跡から上顎後臼歯1個が出土している(註3)。奈良時代以前の出土例は全くない。古代のウシは、同じ大形家畜であるウマと比べると、その出土例はやや少ない。本資料によって、平安時代に津軽地方でウシが飼育されていたことが初めて明らかになった。

仙台市泉崎浦遺跡では、平安時代の水田跡からウシの足跡が多数検出され、農作業にウシが使役されていたことが明らかになっている(註4)。ウシは役用のほかにも、乳牛や食肉用などさまざまな利用が可能な有益な家畜であり、平安時代には東北地方でもウシの飼育がある程度普及していた可能性がある。遺存骨の出土例の増加によって、その飼育や利用の実態が明らかになることが期待される。

(註1) 八戸市教育委員会 1988 八幡遺跡発掘調査報告書 203頁

(註2) 見島牛および口之島牛の計測値は、西中川駿ほか 1989 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源・系統に関する研究 4頁 によった。

(註3) 八戸市教育委員会 1989 熊野堂遺跡発掘調査報告書 125頁

(註4) 仙台市博物館 1986 仙台市博物館展示図録 13頁

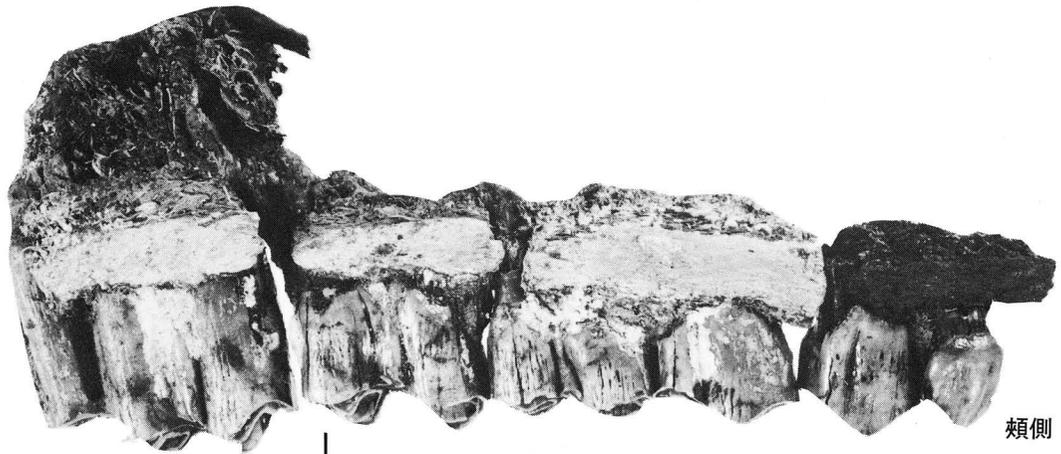
表1 ウシ下顎骨計測値

	下顎頰齒列長(mm)
大沼遺跡(左)	159 (復元推定)
八幡遺跡(右)	133.5
見島牛雄(n=2)	148.1
見島牛雌(n=2)	145.8
口之島牛雄(n=3)	146.5
口之島牛雌(n=7)	138.5

表2 ウシ下顎頰齒計測値
(単位: mm)

	齒冠長	齒冠幅
左 P ₂	15.0	10.7
P ₃	21.5	13.2
P ₄	25.5	15.3
M ₁	26.2	17.9
M ₂	30.8	19.3
M ₃	43.1	16.2

PL. 13 ウシ左下顎骨



浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第4集

大沼遺跡発掘調査報告書

平成 2 年 2 月 20 日 発行
発行 浪 岡 町 教 育 委 員 会
038-13 南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1
TEL(0172)62-3001
印刷 高 金 印 刷 株 式 会 社
038 青森市千刈二丁目1の30
TEL(0177)81-0519・2244
